
死神の杖

RedHands

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神の杖

【Nコード】

N4182W

【作者名】

Red Hands

【あらすじ】

様々な人々の人生を見守る死神のお話

庭師

「ほう、相変わらず見事なものだな。」

王冠を被った男が草の手入れをしている私に話しかけてきた。私はそれが直ぐにこの国の王だと分ると振り返って深々と頭を下げる。王は、それを掌で制すると、にこやかな表情を保ったまま威厳のある声で優しく語りかける。

「余の言は気にしなくてよい。そのまま仕事を続けてくれ。」

「はっ。」

私はそう言われる事は予想済みだったので、さして驚きもせず再び仕事に戻った。そんな私の背中から再び威厳のある声が話しかけてくる。

「それにしても相変わらず見事なものだな。限られた者しか王宮に入れないのが勿体ない。国民全てに解放したいものだ。」

「いえいえ、この庭は私が先代、先々代より時間をかけて王の為に作り上げてきたものです。その目にこの庭を焼付け、その足で散策される特権を持ったものがこの国の王たる資格であります。」

「父上も生前に同じ事を口にしていたような気がする。成程な。これは余の失言であった。」

私はこの歳まで余り自分を賛辞したことはないが、この庭だけは庭師としてこれ以上のものは出来まいと、自分の生涯の仕事の総決算のつもりで取り組んできた。それ程広い庭ではないが、木々や池の形、そして造りすぎないよう配所した茂みの草1つ1つに至るまで、私の技量と自然が一体となって作り上げた傑作である事は疑いの欠片もない。

この国の温暖な風土もそれを更に促進させる材料だ。四季があるにも関わらず、冬と夏の温度差がそれ程激しいわけではなく。1日の昼と夜の気温差もそれ程無い。殆どの植物が1年を通して花をつけることが出来る。だから季節によって庭の色を変える必要もない。

多分それ程大きく手を入れなくても永遠に美しさを保っているような錯覚に陥る時がある程だった。

「それももう見納めかもしれんがな。」

王は寂しそうにポツリと呟いた。先程までの威厳が明らかに少し萎んでいるその声を聞いて私は手を止めて振り返る。

「戦…ですか。」

「ああ、そうだ。」

王の目は遠くに目を向けている。諦めとも悟りとも取れる表情を浮かべて口をへの字にきゅっと結んでいた。私はこの王が赤ん坊の時から良く知っている。何か覚悟を決めて緊張した時のその癖は王の座についても変わらない。そしてそれは私の癖でもあった。私自身には家族がいない為、彼をまるで自分の息子の様に錯覚する事すらある。

「今度の戦はな。おそらく無傷では帰れまい。いや、それどころか、帰ってくる事すらできなかもしれないのでな。」

「これはまた陛下に似合わない弱気な事を仰せられる。」

「何も言うな。」

基本的には、人に弱みなど見せない性格ではあるが、王の家に生まれて幼い頃から緊張の糸を張り巡らせて来た王にとって、この庭や私は、心を許せる数少ない存在だったのだろう。

「更に磨きをかけてお帰りをお待ちしておりますよ。」

私は励ますつもりで軽くそう言って王の表情を見上げた。王は悲しそうな表情のまま私の目を見返すと、少し口を吊り上げて苦笑いする。私ですら余り見たことのない表情だった。

「そうだな、とりあえずまた生きて帰ってこの庭でゆっくりしたいものだな。」

王は振り返って去っていった。その背中はいつともよりも小さく見える。

少し昔話をしよう。

この国は先々代が建国した歴史の浅い国。その血塗られた歴史は、多くの敵を造り、戦いの絶えない国だった。この庭はそんな国の王宮の一角にひっそりと作られた。

先々代王が引退して息子である先代王に王位を譲った頃、私は各地を庭師として周り自分の技術を磨いていた。町の公園から貴族階級の屋敷の敷地までかなり数々の作品を手がけてきていた。

時には仕事中に戦が始まった事もあり、私の作った公園がわずか1日で灰になる風景も見てきた。その度に、私は自分の仕事に自信を失う日々が続いた。自分のやっている事に意味があるのだろうか、どう心血を注いでもそれが一瞬でなくなるようなものならば、いっそ自然に任せるままにしておいた方が、よくないだろうか。

そして、それこそが草木の本来あるべき姿なのだろう。

私は、ある国で仕事をしていた父親を尋ねた。

「やあ。」

まるで、遠方からの親友を扱うように父親は私に接する。

「久しぶりだね。母さんは？」

私が親元に戻ってきたのは実に、二十年ぶりだった。当たり前のように迎え出てくれると思っていた両親も、既に見る影もなく年老いていた。

私が母の居場所を尋ねると、父は少し悲しそうな目で立ち上がり家の裏口へと向かう。

「？」

私は静かに立ち上がるとその後について行った。何処へ向かおうとしているのかは、大体分ってはいたが、私は敢えて何も言わず、父の小さくなった背中について行った。

裏口を出ると、あまり賑やかで無い通りに出る。この国の城壁が見えるほどの町外れにある我が家から城の門まで歩いてそれ程の距離ではないが、すっかり弱った父の足では思ったより遠く感じるほど遅々としていた。

私は敢えて父に肩を貸したり、背負つたり、「何処へ」と尋ねたりせずに、その速度に合わせてついて行く。

「手を合わせてやってくれ。」

とある墓石の前で父は俯いて私に言う。父に言われるまでもなく私は既に両手を合わせて目を閉じていた。

生前の母は私の我儘を全て許してくれた。私の目から涙が溢れ落ちる。

ふと目を開けると少し離れた場所にある木に誰かがもたれかかって眠っていた。帽子から靴まで全て黒一色の黒ずくめの男を見て私は父を振り返る。

「父さん。」

「ん?」

「あの木の所にいる人が見える?」

私はその木を指差す。父は首を縦に振った。

「ああ、ここ何日か、毎日あそこですつとああやつてるのを見るな。知り合いか?」

「いや。。。」

そうか。見えるのか…。私は口をへの字にきゅつと結んで再び目を閉じて手を合わせる。

庭師としての父は職人という言葉がこれ程似合う人は見たことがないくらい頑固で融通の聞かない性格だった。特に仕事では、まず人の言う事に耳を傾ける事もなく、ひたすら黙々と作業をこなす日々を送っている。時には、数日家に帰らずに、隣国にまで出かけては仕事をこなしていた。

私は子供の頃に何度も父の仕事を手伝った事があった。その頃の父には何人が弟子がいて、父は未熟な彼ら（もつとも父から見ても未熟という事でしかなく、彼らもまた庭師としての腕は一流だったようだ）を頭ごなしに、怒鳴りつけていた。

家では、寡黙に食事と晩酌している所以外見たことがない父が生き生きとしている様に見えた。だが、そんな独りよがりの仕事ぶりに定着する弟子など居るはずもなく、1年以内に父の周りには誰も居なくなつた。それでも父は動じる事なく、日々の仕事をコツコツとこなしている。

そのうち時々手伝っていた私に今度は怒鳴り散らす様になる。

思えばあれが、私の立場が、唯の息子から弟子になつた瞬間だつたと思う。

ただ、私は家族でもあるので他の弟子の様に逃げ出すわけにも行かず、ひたすら耐えるしかなかった。そして、庭師として独立しても、相変らず父とともに仕事を続けていた。

そして数年経つたある日、私は衝動的に思い立って父に「旅に出たい」と申し出た。

「旅？、半人前が何を下らん事言つてやがる。明日からの仕事はどうするつもりだ！」

予想してたの一言一句違わない言葉が返ってくる。

「父さん、僕は確かに庭師としては半人前なのかもしれない。でも、父さんも若いときはあちこちまわつて、そして今の父さんがあるんじゃないか。僕も世界を見てみたいんだ。」

「馬鹿野郎！、俺はな住んでいた村が戦で焼け野原になつて仕方なく放浪していたんだ。このご時勢に1人旅なんざ、狂気の沙汰じゃねえ。」

「だつて、父さんの頃だつてあちこちで戦は起こつてたんだよね。

僕なら大丈夫だから……。」

「おめえみてえな世間知らずを世の中に出しても、人様の迷惑になるだけだ！」

「世間知らずだから、世間を見に行くんだ！、父さんの言う事は矛盾してるよ！」

「やっかましい！、屁理屈言つてる暇があつたら早く寝ろ！」

父は晩酌していた酒瓶を僕に投げつけて、その場でうつ伏せにな

りそのまま寝てしまった。母親が台所から出てきて父の背中にそつと毛布をかける。

「わからず屋……」

その頃の私の呟きを聞いて母親がそつと私の肩に手を置く。

「父さんはね。お前の事を手放したくないんだよ。どんな仕事も受け継ぐ人がいないと意味が無い。特にそれが自分の子供なら、親としても庭師としてもこんな嬉しい事はないからね。」

母の静かで落ち着いた声。私を説得するでも諭すでもなく、ありのままの気持ちだけを言葉にしているだけで、人に何かを押し付けない声。父とはまるで正反対だった。

「僕は仕事を投げ出したりはしてない。必ず帰ってきて親孝行はするよ。なのに……」

私は、悔しそうに歯を食いしばった。

「……少し、待ってなさい。」

母は私を椅子に座らせると奥の部屋に消えていった。

数分後、鞆を1つ持って現れる。

「これはね。昔この人が旅をしていた頃に使っていた鞆なの。何処かの貴族の庭の仕事をしている時に仲良くなった同年の人に貰ったものなんですって。」

「へえ。」

僕は生まれた時からこの家にずっと居るが、その鞆は初めて見るものだった。数個のボタンには何か動物の彫刻が刻まれている。

目利きなどは一切できないが、それが途方も無い価値があるような気がしていた。

「でも何でそれを僕に？」

鞆を手渡す母を見て、私は当然の疑問を口にする。

「言っただけで世間を見てきなさい。」

母は一言静かにそう言った。

「え？、で、でも……」

私は傍らでうつ伏せになっていびきをかいている父をチラリと見

た。

「この人には私から言っておくわ。だから貴方は遠慮する事ないのよ。」

手渡された鞆は少し重かった。慌てて中を開いてみる。そこには古いランプや替えのシャツが数枚と、飲み物を入れる皮袋や仕事に使う道具が入っている。そして脇のポケットにはお金が少し入っていた。

「こ、これは…。」
「手ぶらってわけにはいかないでしょ。」

あの数分でここまで周到に用意できるわけが無い。母は、その頃の私がいつ言い出しても良い様にずっとこれを仕舞っていたのだろう。

「う…。」

私は泣きながら俯いた。

「ほら、一人で旅に出ようと言うのに、出発前から泣く人がありませんか。」

背中をさする母の手の感触を私は一生忘れない。

私は鞆を肩にかけると、そのまま、家を飛び出した。通りに人はいない。城門は直ぐそこにある。私は城門を潜り抜け全力で暫く走った。振り返らずとも、見送って手を降っている母の姿が見えたようない気がした。

それからの私はひたすら鬼の様に働いた。ただただ、仕事を見つけては雇ってもらい仕事をこなす。生きていく為には好きな事だけをしているわけにはいかず、皿洗いから傭兵まで、何でもやった。必死だった。

ただ、何をやっても最後は庭師としての仕事に戻ってきた。それ以外は私の生涯の枝葉みたいなものだ。

6年ほど経過したある日、私はとある城の建築の手伝いでとある

国で砂袋を担いでいた。

「ふう、疲れた。」

昼休みに配給された弁当を食べながら周りを見回す。ようやく城壁が形になってきたばかりで庭などという贅沢なものは影も形も見当たらない。

「よう、隣いいかい？」

この現場で知り合った男が、私の隣に座って弁当の蓋を開ける。私の方が先に食べ始めた筈なのにあつという間に男の弁当の方が先に空になっていく。

「そついや、君は何処の国の生まれなんだい？」

一気に食べてしまうのが勿体無いと思ったのか、男は一度箸を止めて一息つく合間に私に話かけてくる。

「ここから北の方ですよ。」

「へえそうか。俺は東から来たんだ。武者修行中だな。実家に帰れば王の剣術指南役になるんだよ。」

「はあ。」

滴る汗が疲れを物語っている筈のだが、それを吹き飛ばす様に男の口からは次々と言葉が溢れてくる。聞いてもない自分の歴史を私に押し付けた後、男は唐突に小声になり私の耳元で囁く。

「そついや、お前も気をつけるよ。」

「何を？」

男はキョロキョロと辺りを見回して再び口に手を当てた。

「最近この城の建設で人が何人か死んでいるだろう。」

「ああ、確かに。」

城の土台の上に建物の骨格を建て始めた最近は人数が増えてきたこともあり、いざこざや事故がなんとなく増えてきた。そして、前日、遂に事故で死者が出たことが噂になっている事は私も知っている。

「それが何か？」

「それでよ。最近、死神が出てきたらしいぞ。」

「死神？」

「ああ、そいつが見えたら死ぬらしい。この前死んだ奴はそれが見えたらしいぞ。」

「へえ……。」

眉唾ものだが、物騒な事を言っている割には嬉しそうな顔をしている様に見える。

「精々、気をつけるんだな。俺が聞いたそいつの特徴はだな。」

そいつはそこまで話すと思いつと上を見上げる。しかし、思いつにいくかったのか、再び弁当の残りをガツツキ始めた。

「まあ、気をつけるよ。」

私は何となく食欲がなくなる。満腹ではないが、今日は比較的涼しいからこの程度で夕方までは体力は持つだろうと弁当の蓋を閉じて腰を上げた。

この現場ではとりあえずレンガの元を運んでそれを練るのが私の仕事だ。単純作業だが王の城を建てるだけあって、国家予算を費やし、働く者からすれば非常に割のいい仕事になっている。

弁当を袋に放り込むと私は作業に戻る。確か休憩前に最後に運びかけたものがこの辺に置いてあるはずだと、それを探した。

「お、あった、あった。」

私とその運び荷に近づいていくと、その傍に全身黒い服を着た大男が立っている。被った帽子の下から鋭い目がこちらを見ている。

私がこの現場に来てから初めて見る男だ。炎天下ではないとはいえ、肉体労働をしている現場で、全身を覆うような黒いマントは、少し暑苦しく感じた。男の目はこちらを見ていた筈だが、あまりに目に生気がないので視線を一切感じなかった。

「ちよつとごめんよ。」

私はとりあえず作業を再開し、そこそこ重い袋を担ぎ上げる。庭師に必要なものは何より体力だ。

その男は何を言うでもなくただじつと佇んでいる。周りはマチマチに昼休みを終えた男達が気合を入れて作業を再開している。季節

柄この国には晴天の日に時々寒い風が吹く。マントをしているからなのか、その男に感覚がないからなのか、周りの者が二の腕を掴んで身震いする中で全く身震いもせず表情も氷の様に固まったままだった。

「変な奴…。」

私は一応気を使って誰にも聞こえないように呟く。乾いた風に乗って私の声はその黒い男に聞こえなかった事をほんの少し祈った。

「さてと…重っ…」

朝の勢いのあるうちにやっておくべきだったと思ったが、仕事だから仕方ない。それに今の仕事は割りもしいが、何よりこの城の庭園をどう組み立てるかという事を考えながら体を動かすという至福の要素が疲れを相殺するという好循環な日々だったので特に不満というものも無かった。

「いてて…」

とはいえ、ここ数日の突貫工事で結構体はボロボロにはなっていた。少し前までは至極普通の工事ペースで作業していたので割と楽なものだったのだが、今となっては、一度に運ぶレンガも一時期の二倍近くになっている。

ほとばしる汗とともに何とか仕事をこなしていく俺は、何とか夕方方の解散時間までペースを落とさずに仕事を終わらせる事ができた。

「全く、日に日に忙しくなるな。」

「ああ、明日は日没までにノルマが終わるどうか怪しいぜ。」

「まったく、戦争が近いって噂もあるしなあ。」

口々に愚痴る者達を横切って宿屋への道を真っ直ぐに歩いていく。「ここもそろそろ引き時かもな。」

傭兵経験があるとはいえ、この国の為に命をかけて戦うつもりはさらさら無い。その噂は単なる噂というには余りにも工事に関わる者達に広まっていた。

新興国家だけあって労働者の大半は、お世辞にもこの国に愛着があるとは言えない。その中でのこの噂である。普通に考えて、覚悟

も自信もないものは報酬日の次の日に消えるパターンが多い。

その為に、報酬を全体で割るという方式が取られた。しかし、それも効果のあるはずもなく、徒党を組んで入れ替わりで報酬を受け取り楽をして儲けるものが現れた。それでも、右肩上がりに周辺の国を併呑していった状況の中で、国はとにかく威厳を懸けて報酬を支払った。ここで出し渋ると、周りの国に実体を勘ぐられる恐れがある。なので、ここに国運を懸けている程の報酬に次々に人が減る一方、増加人員量もそれに追いつくという状態を長らく続けている為、工事自体は一進一退を続けながらも何とか完成予定日に向かつて突き進んでいた。

それでも戦争に勝ち続けて国庫は常に潤っていたので、受け取る方は当然として支払う方も誰一人それを気にする者はいなかった。日に日に上がっていく報酬に人の入れ替わりはますます激しくなっていく。

その為に、見知らぬ顔を現場で見たとところで誰も気にしない。勿論私もこれまで何度も見知らぬ顔も見てきた。それなのに何か、あの黒づくめの男が妙に気になる。

翌日も前日の疲れを残しつつ現場へと足を運ぶ。

「何してるんだ！ボーツとするな！」

突然の叱咤に私は我に帰って仕事を続けた。じんわりと汗の染込むシャツが冷たい風を更に冷たく感じさせる。それがまた疲れた体を冷やして次の行動へのエネルギーを蓄えるようなサイクルが体の中で続いている。それがまた心地良い。

気がついたら夕方になっていた。ここでは、日が沈む前に仕事は終わる。日雇いの金を受け取ると大体の者は夜の街へと消えていく。私は、一人で飲むのが好きなので基本的にはここから先は誰とも絡む事もない。

大きな酒屋へ行くと絡まれる可能性が高いので片隅のバーの片隅の席で1人でほろ酔うのが丁度いい。

新興の街というものは、どの店も真新しい雰囲気がある。ここは

元々、無人ではなく小さな村だったのだが、今の国王が地理的に適切なのでここを首都にする事を決めて城を建設する事を決めた時から急激に発展してきた。

仕事があると人が集まる。人が集まると仕事が生まれる。労働者が溢れるとそれを標的（あまりよい表現ではないが）にして夜の街も発展する。そんな好循環を繰り返し返り短期間で様変わりした街だ。いつかバーの老人店主が長々と私に語ってくれた話である。

「いらつしゃい。」

寂れた看板を見つけて私はドアを引いた。狭い店内には2人の男客がそれぞれバーの隅に座っている。お気に入りの席を取られて仕方なくど真ん中に陣取ると最初の1杯を注文した。

「今日も忙しかったのかい。」

老店主はカクテルを造りながら私に静かに話しかける。このマスターは、ここが小さな村だった時からもう長い間、この土地の遷移を見てきた生き字引だ。

「今日は繁盛しているじゃないか。」

「ははは、そうだな。」

席は全部で丁度十席、いつ来てもこの席が埋まっているのを見たことがない。街の最北端という場所柄もあまり良くない。城の位置からすれば、街の繁華街とは少し離れているし、城が完成してしまつとこの辺りはますます寂しくなるだろう。

私は最初の1杯を飲みながら店内を見回す。左隅にいる男はテーブルを見つめながらバーボンを飲んでいる。視線を移して右側の客を見ると、黒ずくめの服装は間違いなく昼間の男だ。黒い帽子の下に隠れた目は鋭いが生気が感じられない。

しかし、その男の前にはグラスがない。もう飲み終わったのだろうか。だが、あの現場で仕事をしているのであれば、終わつて真つ直ぐにここに来た私とほぼ同じ時間に来たと考えると1杯飲み干す時間はないはずだ。

「マスター、あの男は？」

私は、私の目の前にグラスを置いたマスターに小声で話しかける。
「ん？」

マスターは私の指差す方向を一度見ると目を細めて私を振り返る。
「…何？」

マスターは逆に私を不思議なものを見るような顔で聞いてくる。

「いや、だからさ。あの客が…」

私がここまで喋った時、マスターはハッと何かを思い出した様に目を見開く。私はそんなマスターの顔を初めて見たので、逆に同じ様な表情になった。

「君、それって黒づくめの格好をしているだろう。」

「…知ってるのかマスター。」

「そうか…見えてしまったか…」

突然左端に座っていた男が低く威厳のある声で私とマスターの会話を割り込んでくる。

「見えてしまった…とは？」

私は思わず気になって男に問いかける。

「聞きたいか？」

男は静かにテーブルを見つめていた目線を上げて私の目を見る。

現場では見かけたことはない顔だった。まあ、私が知らない顔など現場には五万といるが。

「貴方は？」

男はその問いかけにニヤリと笑うと、グラスを傾けて残っていた酒を一気に飲み干す。

「…」

十分程の沈黙が店に流れた。私の問いに男は一度としてまともに返答していないのだが、男の威厳の前にそれについて全く触れられない。やがて男は静かに語り出す。

「昔…この国には王がいなかった。いや、そもそも国なんてものは

なかった。」

私は丁度一杯目を飲み干した所だったのでマスターにグラスを見せる。いつものお代わりの合図だった。マスターが私のグラスに2杯目を注いでいる間も、その男は話を続けた。

「そんな小さな村にある日噂が立った。」

男は話しながらグラスをマスターに見せる。マスターは私の時と同じ様にそれに答え、バーボンのグラスを棚から取り出した。

「死神が村に現れたという噂。それは、何百年も平和に暮らしてきた村人の中で突然槍が降って来たような噂だ。」

男は注がれた酒を少しだけ喉に流し込む。私も右端の黒ずくめの男も沈黙しながら彼の次の言葉を待った。もつとも、右端の男が私と同じ気持ちだとは何の確証もないが。

「それは、村に来た1人の旅人から始まった。村の宿に何日か滞在する間に、酒場などで接した村人に死神の話をした。やがて、数日後に村人が1人病で死んだ。そいつは、丈夫な男で病の兆候など何も無かったはずなのに、突然、ある日苦しみ出して倒れた。」

「ああ、そんな事もありましたね。」

マスターが男の話に相槌を打つ。

別に長い付き合いではないし私に人を見る目があるのかどうか疑わしいが、マスターは嘘をつくような人ではない。そんなマスターの相槌が胡散臭い男の話にほんの少しの説得力を添えたような気がした。

「そいつは怯えた目で死に際に枕元の家族や見舞いに来た村人に死神を見たとき散々に語った。あの旅人が話していた特徴と全く同じ格好をして、別に何かをされたわけでもなく。ただじつところちらを見ていたという。」

話していた男は、そこまで話すと視線を黒ずくめの男に移す。私もつられてそちらの方を見た。マスターだけは気を使ってか、そ知らぬ顔でグラスを磨いている。

「…」

黒ずくめの男は帽子の下の目線を泳がせたままじっとして動かない。一見すれば呼吸をしている、生きている様には見えなかった。

私は昼間、工事現場で聞いた死神の噂を思い出した。そして店内の気温が下がったわけでもないのに少し身震いする。「そいつを見たら死ぬ」という昼間の男と、この男の双方の口から出た同じ言葉が私の脳を刺激した。

「大丈夫ですか？」

この時の私は自分ではどんな顔をしていたのだろう。マスターが声をかけたという事は普通に無表情に酒を飲んでいたわけではなさそう。店内に鏡は一切なく、私が自分の顔色を確かめる術は、わずかな灯りに照らされたグラスを覗くしかない。しかし、私には自分の顔を見る勇氣すら無かった。

「その男が死んだ後、村人の間では次々と死神を見たという者が現れた。しかし、その後暫くは特に村で不審な死に方をした者は出ない。やがて、その旅人が村を去り、噂も下火になって村人の中の恐怖が薄れていった。」

これが単なる怪談話なら、普通に酒の肴になっただろう。そんな店のサービスの一環として、この店ぐるみで私を謀っているのではないだろうかとも考える。このマスターが、そんな演出が好みなのかは分らないが、もしそうであれば、もう十分だろう。これ以上続ければ酔えなくなる。しかし、無情にも男の話は続いた。

「そんなある朝に突然始まったんだよ。」

「何が？」

「戦争だ。」

「どこからともなく現れた馬軍が砂煙を上げて朝靄の中から現れ、突然手当たり次第に村人を殺していった。」

その男は私に感想を求めるわけでもなく目の前の何も無い空間を見つめながら淡々と話す。

「その時殺された村人が全員死神を見たのかどうかは確かめる術はない。」

男は私に視線を向けた。

「その話、酒の肴にはちと刺激が有りすぎるのでは？」

私は少し笑って目を泳がせた。男の表情は喜怒哀楽のどれでもない。唯、石像に見られているように不気味さを感じる。

「…」

「…」

それから凍りついたような沈黙が店の中に現れる。マスターのグラスを磨く音だけが、私の耳を擦った。

「つかぬ事を聞きますが、あなたはもしかしてその村の…」

「さてね。」

男は、空になったグラスをトンと置くと、数枚の貨幣を置いて席を立った。男が出て行くと、私は自然と黒ずくめの男が座っていた方を向く。しかし、そこにはもう誰もいなかった。

「もう一杯どうですか？」

マスターの冷静な声で何とか我に帰る。

バーから帰った翌日、私は再び現場で砂袋を担いでいた。昨日聞いた話を頭の中で反芻しながら体は労働に従事していた。

「今日はいいつ来ていないな。」

昼休みにまたあの騒がしい奴が勝手に私の隣に腰を降ろして喋り始める。

「あいつとは？」

「昨日の黒服の奴だよ。」

「ああ、あいつか。」

「お：お前も見えたのか？」

「見えた？」

私は一瞬この男が何を言っているのか分らなかったが、昨日のバーでの男の話が電撃的に頭に走る。今日は快晴なので、滴る汗が思考を妨げてはいたが、昨日の話は私の脳に相当深く刻まれていたら

しい。

「死神の事か？」

「そうだよ。知ってるのか？」

「その話をするという事はお前も見えたって事だな。」

「そうだよ。そういうお前こそ、噂を知ってるんだな？」

男は私の反応に存外食いついてくる。普段は私は、この手の会談めいたものに興味はない。しかし、何故か今回の場合だけは気になつて仕方なかった。

「昨日少し聞いたよ。」

「逃げた方がいいぜ。」

そいつは少し神妙な顔になつて私に逃亡を薦めてくる。

「俺は、その死神の話をこっただけじゃなくて、以前何箇所かで聞いたんだ。眉唾ものだと思つていたんだが、遂に今回は俺自身が見ちまつた。」

「そういう話は何処にでもあるんじゃないのかい？」

「そう思うだろ？、だがな、どの土地の話も死神の特徴がみんな同じなんだよ。だから俺はこいつは存在すると思う。」

軽薄に感じた男の雰囲気少し変わったような気がした。

「無駄話だな。」

俺は、目の前のそいつだけではなく、自分の中の記憶に向けて一言放つと腰を上げた。

「おい待てよ。」

歩き出した私の後に続いて男がついてくる。

「！」

突然立ち止まった私の背中に男がぶつかってきた。しかし、背中の衝撃の信号は私の脳には一切届かない。

「……いてて、何だよ。」

鼻をぶつけた男が顔を上げて私と同じ視線の先を見る。

「……」

私も男も立ち止まって絶句する。

目の前に大きな木が立っていた。その大きな幹にもたれかかって黒ずくめの男が昼寝をしている。いや、昼寝をしているのかどうかは分らないが、俯いて軽く肩で息をしている。

「見えるか？」

背後から少し震えた男の声が聞こえてきた。私はそれに答えなかったが、言葉にしなくても男には十分に伝わったと思う。その黒ずくめの男が何かをしたわけでもないにも関わらず、私の中に何か黒いものが広がっていく様な不快な感覚が呼び起こされる。

ドシン…。

突然の振動に我に帰った私は周りを見回した。

「何だ今のは？」

背後の男も同じ反応で周りを見回す。

「あれは？」

男が指差す方を見るとモクモクと煙が上がっている。始めは気のせいかとも思っていた振動は次第に大きく体全体を震わせた。やがてそれは無視できない程の巨大なうねりになっていく。

「逃げる！」

誰かがそう叫んだ時には、騎馬に乗った無数の兵士が剣を振り上げているのがはつきりと視認できた。

「来やがったか！」

開発中の新興国家にはよくある話だ。特にこの国は周辺国と同盟を結んでいるわけでもなく開発中の隙を伺って攻撃を仕掛けてくる。そして…。

「進め！」

反対側の城の方から聞こえる鬨の声。

「かかれ！」

無論、新興国の方も無防備なわけではない。砂煙を観測した瞬間から対応を始めていたのである。馬に乗った騎士達が既に剣を抜いて構えていた。その先頭を切つて敵に突撃していく男の顔を見て、私は目を見開く。

「あれは…バーの…」

「おい、何をしているんだ。逃げるぞ！」

通り過ぎていく避難する人波に飲まれて私は混戦が始まるうとしている場所から離れた。走って逃げる最中もどうしても、馬上の男の事が気になつて時々振り返る。しかし、最初に見た時の倍以上の濃度の砂煙の中では、混ぜ合わされた人の影と時々飛び散る深紅の血が認識できるだけだ。

止むをえず逃げながら周りを見回す。あの黒ずくめの男も見当たらない。

私は他の者について城の裏側に回り込む。大勢が城から離れようと街外れまで走り続けていたが、私は立ち止まって造りかけの城壁の隙間に体を滑り込ませる。戦の喚声が鳴り響く城の中へと戻っていった。

普段は、自分の担当以外の箇所は行くことはない為、城の裏庭あたりに踏み込んだのは初めてであった。

先程から続いている振動は戦いの激しさを物語っている。その中で私は見慣れぬ城を徘徊した。正直、私自身も何故この時に逃げなかったのかは分らない。人間は緊急時には衝動的な行動を取る。それが正しいかどうかは結果が出ないと分らない。

1階部分は半分以上は既に完成している。

普通、城は敵に侵入された時の為に複雑な回廊にしてあると聞いた事がある。城の構造を私が理解している筈もなく、ただ当てもなくウロウロと歩いた。不思議と恐怖はない。それが若さかどうかは分らないが、とにかくなるようになると思っていなかったのは確かだ。

「うん？」

突然開けた場所に出る。周りは建物に囲まれていた。中庭だろうか。

「へえ、こんな場所があったのか。」

上を見上げると吹き抜けになつていて、出入口は2箇所、私の入

つてきた部分は小さなくぐり戸だったので裏口という事だろう。正面には見事に開けた街の景色が広がっている。そこから私の働いていたエリアも見える。

「広さも丁度いいな。ここに花を植えて、ここに小川を作って…。」
そこから眺めて見える戦場では、血飛沫が舞っているというのに私は、この箱庭に思いを巡らせ始めた。ここが元々何に使われるはずのものだったのかは分らないが、広さや立地や地面の起伏、周辺を見渡した環境など、まさしく申し分のないこの庭は、しばし私を魅了した。

そうして、どれくらいの時間が流れただろう。

「ん？」

ふと目の前を見ると、小さな岩に、あの黒づくめの男が座っている。私の心に残っていた恐怖は興奮ですっかり洗い流されていたから、思わず話しかける。

「…あんだ…死神なのか？」

「…」

男はとりあえずはこちらを向いたが、口は全く動かす様子はない。

「…ここで何してるんだ？」

私は第二の質問を投げかける。

「それはこっちの台詞だ。」

不意に背後から別の声が投げかけられた。振り返ると赤い鎧に身を包んだ男が剣を持って立っている。

「あ…あんだ…。」

「ああ、バーの男か。」

鎧の男は剣を一振り素振りして付着していた血を拭くとそれを鞘に収めた。敵意はないようだ。足取りからしても体に付着している血は全て返り血なのだろう。

「逃げなかったのか。」

「あなたは？」

「ああ、この城の主さ。」

薄々は気づいていた線が繋がる。

王は私の傍まで近寄ると死神のいた木に目を向けた。自然私の目もそちらを向く。

「あ…。」

そこには誰も居なかった。

「まだ、見えるのか？」

「い、いや、もう見えません。」

「そうか。私にも見えない。ところで…もう一度聞くが…」

「はい。」

「ここで何をしていた？」

「い、いや、私は庭師をしておりますて、この場所が気に入りました…。」

別に問い詰められたわけでもないのだが、咄嗟に慌てて出た言葉がそれであった。

「そうか、ここを庭になあ。それもいいかもしれんな。」

王は周辺を見回しながらそう答えた。

「おっと。」

城の振動が私の前に佇む木を根元から揺らせる。私自身もバランスを崩して尻餅を突いた。すっかり足腰が弱くなっている。

揺れは収まる様子もなく私は木にしがみつくようにして何とか腰を上げた。私の傍にはいつの間にか黒づくめの男がじっと私を見ていた。

「やあ、五十年ぶりだね。」

私の話しかけに男は答えない。

「いや、正確にいうと、三十年くらいだな。ここで会つのが五十年ぶりかな。」

相変らず男は全ての事象に興味がないとばかりに口や眉を何一つ動かさない。予想通りのリアクションに私は苦笑いをするだけだ。

開けた景色の中で街に突然火が上がる。城壁が破られ雪崩のように見慣れぬ鎧が町に流れ込んでくるのが見える。

五十年前とは違って城壁も町も城もすっかり完成していた。この王の住む城は完成してからも今まで何度か攻められた事はあるが、町にまで雪崩れ込まれたのは初めての事だった。

町から流れてくる喚声と嬌声はあまり気持ちのいいものではない。「かかれ！」

城門が開かれ、城から王を先頭にして見慣れた鎧が町へと飛び出していく。

「お、お逃げください！」

若い兵士が私の所へ走ってきて背後からそう話しかけた。

「君、この黒い男が見えるかね。」

私は手をついていた木の傍の死神を見ながら若い兵士に問いかける。

「は？」

兵士は不思議そうな表情を浮かべて首をかしげる。

「そうか。なら君だけでも逃げなさい。」

「わ、私は最後まで……。」

「まだ君は助かる。いや、私も足掻けば分らんが、もうすっかり体も弱ってしまつたからな。」

「し、しかし……。」

若者はまだどうするか迷っている様子だった。こうしている間にも火の手はどんどん城に近づいているのが見える。王の軍隊でもあの勢いは止められないだろう。

「私はこの城の庭師だ。自分の職分を捨てて逃げるには歳を取りすぎた。」

私は嗜める様に若者に話しかける。

「し、しかし……。」

この迷いも若さかもしれない。私は苦笑いしながら庭の片隅にある物置を指差した。

「あそこに私の鞆が置いてある。持ってきてくれないか？」

「はい。」

跪いていた若者は直ぐに立ち上がり小屋に向かって走っていく。どんどん小さくなる背中を見て私は正直羨ましく思う。あつという間に若者は古びた鞆を私に持って来た。

どこからともなく火矢が一本飛んできて木に突き刺さる。あつという間に枝葉に火がついて燃え広がってしまう。それを見て私は何とかよるよると木から離れた。

「ふふ、綺麗なものだな。」

火を眺めて呟いた私を若者が不思議そうに見ている。

「君はこの国の生まれか？」

「い、いいえ、私は遠い北の国から……。」

「そうか、なら北門から逃げた方がいいな。ご両親は健在か？」

「あ、は、はい。」

この非常時にする質問としてはかなり異質なもののだろう。若者は仕方なく答えているという雰囲気をかもし出している。

「そうか。なら早く故郷に帰って親孝行する事だ。今の君にはそれが仕事だ。」

「し、しかし、私は王命で貴方の護衛をしているのです。」

「もうこの国は地図から消える。国が消えれば王も消える、だから王命に意味などなくなる。」

「……」

少し前まで確固たる信念を持っていた若者は私の言葉に戸惑っている。王命が無意味だなどと言い放つ私を化物を見るような目で見ている。

「君がもつと歳を取れば、私の言葉の意味が分る日がくるかも知れない。その日まで命だけは大事にしなさい。」

私はここで持っていた古びた鞆一度強く握って若者に渡す。

「これは……？」

「これは私が父から貰ったものだ。君にやるよ。旅には必要だろう。」

「

「し、しかし…。」

「いいから貰ってくれ。私には弟子も子供もない。遠慮することはない。」

少し重い鞆を若者は開いて中を確認する。かつて私が母に渡された時と同じ様なものがそのまま格納されている。この庭を離れるつもりのない私が何故こんなものを用意していたのか…それは自分でも分らない。

「で、では…。」

若者はようやく重い腰を上げて走り去って行った。木に乗り移った火はそうしている間にも庭中に広がり続ける。

「さて、と…。」

私は自分の作り上げた庭が自然に帰るのを見届ける為に庭の裏口へと移動して、火の海になった庭を暫く眺めていた。傍らには死神がじっと立っている。

「この歳になるとお前を見ても何の恐怖も感じないな。」

とりとめもない会話をしたつもりだが、相変わらず死神は沈黙を守っている。

「今日は、よく晴れているから冷たくて乾いた強風が吹いている。敵さんもこの日を選んで攻め込んできたのだらう。五十年前もこんな日だったな…。」

私は真つ赤に染まっっていく庭や町を眺めてその場に座り込んだ。体を包んでいく赤い炎に不思議と熱さは感じなかった。

剣

長い旅が終わる。俺の武者修行の旅が…。あと山一つ超えれば生まれ故郷の村である。

「待て、何者だ？」

国境の川に掛かる橋の手前で鎧を着た兵士に呼び止められる。

「何者って、俺はこの国の生まれで今から実家に帰るところなんだよ。」

「そうか通行証は？」

「は？」

俺が怪訝な顔を見ると周りにいた数人の兵士達が集まってきた。

もうこの国を旅立って十年になる。十年前には見送り1人いなかったのに比べてこれは随分と歓迎されたものだ。いつ出来たのか知らないが橋の前に駐屯基地のようなものが出来て、物騒な兵士達がうろろろしているので近づきたくなかったのだが、この橋を渡らずに帰る遠回りの事を考えると止むを得ない。

「この国のものと証明ができるまで通すわけにはいかな。」

「俺は十年も国を離れてたんだ。通行証なんてどこで手に入ればいいんだよ。」

「そうか。お前は知らんだろうが、この国は十年前にクーデターが起こって、王も法律も変わってしまったのだ。」

「そんな事知らないよ。」

俺が国を出てすぐの時期じゃないか。こんなくだらない事で自分の生まれた国に入れないとは情けない。

「とにかく、ここは通すわけにはいかんだ。」

兵士は真面目ぶってインコや九官鳥の様に同じ事を繰返すだけだった。いつの間にか、他に通行している者達も俺の周りに集まってきた。何で帰るといっただけでこんな大事になるのか理解できない。

突然兵士の額当てが光った。晴天の太陽に反射してその光が俺の目を差す。

「いてて。」

俺は目を擦りながらその額当ての模様を見た。俺の知っているこの国の模様とは全く異なっている。どうやらこの国が変わってしまったという事は事実らしい。だからと言ってこのまま引き下がるわけにもいかなかった。

「じゃあ、どうすれば、俺は家に帰れるんだい。」

立腹を露にして俺は兵士に問いかける。

「まったく、本当に何も知らないんだな。」

俺は大きく頷く。兵士はやれやれといった様子で面倒くさそうに説明を始めた。

「いいか、この国は生まれ変わって前みたいな平和ボケではなくなつたのだ。いいか、この国は弱肉強食の法律がある。」

「…?」

俺はまず兵士の言っている事が理解できない。ぼーっと聞いてみると兵士は、おもむろに剣を抜いた。

「わっ!」

流石にこれには少し驚いて身を引く。兵士はそんな俺の態度を嘲笑って剣を肩に担いだ。

「この国では私闘が推奨されているんだよ。」

「私闘?」

「ああ、但し、許されているのは、我々軍事関係者、政府関係者と国外の者のみだかな。」

「どうということだ?」

「つまり、こういうことだ!」

兵士はいきなり俺に向けて肩に担いだ剣を振り下ろしてくる。とつさにうしろに身を引いて何とかかわす。

「どうした? 剣を抜かないと、今ここで死ぬ事になるぞ?」

「何だつて?」

どうやらこの国は俺が留守の間にとんでもないことになってしまったらしい。

「どうした、背中に担いだ剣は唯の飾りか？」

兵士は俺を目一杯挑発しているつもりの様だったが、俺は頭にくるどころか、今自分が置かれている状況を理解する為に頭をフル回転させるだけで精一杯だった。

「何のつもりか知らないけど、俺はこの国の人間だ。それに軍事関係者でもない。そしてこの剣は飾りじゃない。俺は鍛冶屋だ。剣を持つていてもいいだろう！」

俺は兵士の横暴に剣ではなく弁舌を持つて答えつつもりだ。兵士は黙って弁舌を聞いていたが、神妙な面持ちになって俺を眺め回す。「それは、本当か？」

「ああ、嘘じゃない。嘘と思うなら調べてみる。この国の東の外れにある村の唯一の鍛冶屋だった俺の親父が十年前に死んでいるはずだ。俺はそれから親父の後を継いで技術を磨く為に旅に出たんだ。家族の不幸の知らせを受けて今日帰ってきたんだ。分ったか？、この国の法律がどう変わったって、家に帰るだけの人間に剣を向ける理由なんかないだろうが。」

「ふーむ…。」

兵士は暫く考え込んだ。こんな簡単な常識を考えないと分らない風になるこの国の法律に大きな問題があると思ったが、今はそんな挑発的な言葉を投げかけるわけにはいかない。とにかく無事にこの川を渡る事が先決だ。

「分ったら通してくれ。結構急いでいるんだ。」

「…なるほど、なら一つ条件がある。」

「は？」

「この俺の剣を鍛えなおしてくれ。」

兵士はさつきと一転して剣を俺に差し出してきた。俺は「急いでいる」と言っただけはずなんだが、どうやら人の話を聞かないタイプの人間のようなのだ。

「分ったよ。ただし、この国を出る時だ。俺は今、急いで故郷に帰らなければならぬから用事が終わったら必ずここに来てあんたの剣を鍛えなおしてやるよ。」

「…。」
兵士はしばし考え込む。確かに口約束だが、前向きに善処してくれているようだ。

「よし、分った。約束は破るなよ。」

兵士はあっさりと承諾して剣を鞘に収める。俺の意外な反応に気づいた兵士がわけを話す。

「この国はな、この法律のおかげで1兵卒に至るまで急速に強くなったから周りの国から睨まれてるのさ。だから、食料を生産する農民と武器を生産する職人が何より厚遇されているんだ。お前さんの言う村には行ったことはないが、まあ、職人つてのは信用してやるよ。この国で農民と職人を殺せば、厳罰になるからな。」

何ともまあ、無駄を削いだというか、大分偏った思考の王様のようだ。

「行けよ。約束は忘れるな。」

兵士は一変してあっさり道をあける。その脇を通って橋へと歩いていく俺。

「気をつけるよ。俺みたいに物分りがいいやつらばかりじゃないかな。おっと、一つ言い忘れてたが、この国は、この法律のおかげで王が結構この十年で何人か入れ替わったらしいぜ。私闘の範囲に王も入っているからな。勝ったものには全てが与えられる。この国では王のシンボルは冠じゃなくて、国のシンボルを彫った剣だよ。」

橋に向かって歩いている俺は、背中から聞こえる狂気じみた話に少し身震いしながら橋を渡りきった。橋を渡った門の上には新しい国のシンボルマークの模様が刻まれている。

これも十年前にはなかった新しいものだ。しかし、あんな話を着た後では血生臭い模様にしか見えない。俺はそそくさと入国した。

余計な事で時間を食って、日は暮れてきたのでこの辺りで俺は宿を取る事にした。生まれ故郷であるがゆえにこの辺りの山が危険な事は良く知っている。

熊や蛇から山賊まで、命と荷物を失う要素がやたらと存在する。
「疲れた…。」

まあ一日くらい遅く帰っても別に構うまい。山の麓の集落には旅人を泊める宿が何軒か軒を連ねている。この辺りの街道はこの国の新しい王様が輸送道の整備の為に工事して直したらしい。ここを通ること自体久しぶりだが、俺が旅を始めた時はこんな集落自体存在しなかった。

「空いてる？」
暖簾をくぐって声を掛ける。

「すみません。うちはいっぱいでして…。」
奥から出てきた宿の主は手を揉みながら笑顔で残念な返事を切り返す。

「なんだよ。ちえ。」
無論、俺の方は笑顔でそれを返すわけではないが、空いてないのであれば止むを得ない。何軒かそうやって回ったが、どこも満室でとりつくしまもない。

「仕方ないなあ。」
途方にくれて道端に座り込んでいた。

ふと、何気に顔を上げると街道の反対側に誰かが立ってこっちを見ている。帽子から靴まで真っ黒いものを揃えているから、薄暗い中、今まで気づかなかった。しかし、そいつは確実にこちらを見ている。

「？」

じろじろと見られている割には全く覚えのない顔である。こちら

から話しかけるのも何か違う気がして、俺は気づかない振りをするのが一番良いと判断した。

「うーん。」

立ち上がった背伸びをする。さて、今夜の宿はどうするか…。強行軍で帰るという手も考えられるが、それも何か面倒くさい気がする。よし、あと1軒だけ覗いて、それで駄目なら…。その時考えよう。

「すみません。」

俺は最後の暖簾をくぐって声をかけた。奥から出てきた髭の主人が手を揉みながら笑顔で答えるのだが、同じ笑顔を何度も見てきた俺にとつては、また「一杯で…」という言葉が飛び出すと思った。

「えーと、相部屋でよければ…」

「えーと…」

意外な答えに俺は迷いを露にする。このまま、野宿や強行軍を選択するよりはマシだと思い、仕方なく「それでいい」と返答した。

「ではこちらへ。」

腰を低くした髭主人は俺を宿の中へ導く。階段を上った2階の一番奥の部屋の前まで来ると髭主人はドアをノックする。

「はい。」

低く野太い声が部屋の中から聞こえてくると、髭主人はドアを開く。

「失礼します。」

部屋に入ると、髭主人よりもさらに髭の濃い中年の男が鞘から抜いた剣の手入れをしていた。片目は大きな傷が塞いでいる。

「すみません。今日は大変に混み合っていて…相部屋をお願いできないでしょうか。」

「私は構わないよ。」

野太い声が快く提案を承諾する。

「失礼します。」

俺は部屋に入り、テーブルを挟んで男の向いに腰掛ける。男は俺

を一向に気にせず、剣の手入れを再開した。大分、使い込んでいるようだったが、手入れが良いのかまだまだ切れ味が衰えている様には見えない。

「いい剣ですねえ。」

沈黙が嫌なので俺は何となく話しかけた。男は手を休めてこちらを見る。

「そう見えるかね？」

「はい。俺はこう見えても鍛冶屋なので。」

「ほお。それは丁度良かった。この前の戦で使い込んでしまったな。この山の向こうに腕のいい鍛冶屋があると聞いたので来てみたのだが……。」

この辺りで村があるのは俺の村だけだ。それに村に鍛冶屋はうちしかない。親父は元々有名だったので間違いなく親父の事だろう。なるほど、でもその鍛冶屋はもういないですよ。」

「何？、そうなのか？」

「はい。」

「そうか。いないのか……。」

男は顔を曇らせて本当に残念そうな顔をする。俺が村にいた頃から、何人かの名のある剣士がうちを尋ねてきた事があるが、これからは俺が対応しなければいけないと思った。

「俺で良ければどうぞ。」

「そういえば君も鍛冶屋だったな。」

「はい。親父程ではないけど、まあ、それなりに修行は積んでいます。」

「ふむ、それではお願いでしょうか。」

「毎度、じゃ、少し拝見。」

俺は男から剣を受け取るとじつと観察する。修行中に見たどの剣よりも間違いない名剣だった。もはや芸術品の域に達していると思われる刃芯を見ると、これ以上何をどうしようというのだろうと思う。

ただ男の言うとおり激戦を潜り抜けた跡なのか、多少の刃こぼれはあった。

「どうだ。何とかかなりそうか？」

「はい。とりあえず、ここでは何なんで工房に行ってからですね。」

「工房？、それは何処に？」

「ああ、山の向こうですよ。」

「そうか。では、今日はもう休む事にしよう。」

工房に行ってもどうなるものか分らないが、俺も鍛冶屋の端くれだというプライドで適当な返事をしてしまった。まあ何とかなるだろう。

十年前に親父が亡くなり、祖父が家業を廃止すると言い出した時、俺はそれに反対した。親父は病で死ぬには早すぎる年齢だったので俺はまだ後を継ぐ技術を十分に引き継いではいなかった。祖父はまだ健在だったが、家業を続ける体力は残っておらず、このまま続ける事は困難な状態だった。

しかし、俺は諦めなかった。この狭い村では他に鍛冶屋の技術を学ぶ事はできない。俺は家族を説得して旅に出る事にした。何年かかるかは分らないが、武者修行の旅だ。正直俺は生まれてからこの村を出たことがない。だから、これを理由に旅がしてみたかった。修行は真面目にするつもりだが、それよりも、旅をするという行為に高揚した気持ちの方が強かった。

「なるほど、で、修行を終えて戻ってきたというわけだね。」

俺の話を黙々と聞いていた男は相槌を打つ。

「いや、終えたわけではなくて、祖父がなくなつたという知らせを受け取つたもので。」

「そうか、それで一時帰省という事か。」

「はい。」

「だが、そんな時にお邪魔してよろしいのかな。」
なかなか良識のある人のようだ。

「仕事であれば問題ありませんよ。」

山道も中腹に差し掛かってきた頃に少し休もうという事になり、俺達は景色のよい岩肌には腰掛けて休んでいた。

「剣士さんも各地を旅してるんですか？」

「いや、それほどウロウロしているわけじゃないよ。」

「そうですか。」

いい天気だ。日向ぼっこをしているうちにまた歩くのが面倒になると嫌なので出発しようと腰を上げた。

カチン。

足元で何か音がした。

俺がそれが何かを確かめようと身を屈めると、今度は頭上で金属音が響く。

「そのまましゃがんでろ！」

剣士の声で思わず体が硬直する。そして、引続き聞こえる金属音が起こっているのか分らないままにとりあえず指示通りはいつくばって身を低くする。僅かに首を上げる俺の視界には無数に飛んでくる短刀を見事に剣で叩き落としているのが見える。

一体何が起こっているのか分らないまま、暫くして短刀が飛んでこなくなったので腰を上げて周りを見回した。

「すっかり囲まれたな……。」

「え？」

剣士の呟きに背筋が凍る。それと同時に周りから十名程の簡易鎧を来た刺客が飛び出して来る。鎧と言っても胴体の正面に申し訳程度にあてがった板に見慣れぬ模様が描かれているものだ。

俺は、修行中に人に恨まれる様な事をした覚えはない。

「くそ……。」

背中に背負っていた剣を抜いて構える。これでも1人で物騒な世界を回っていた手前、多少剣術には覚えはあった。俺は剣士と背中

あわせになつて戦闘態勢に入る。

「貴方、心当たりはあるんですか？」

とりあえず小声で聞いてみる。

「すまないな。」

謝られてもこの状況になつてしまった以上は仕方ない。とりあえず、殺気をばら撒いていた刺客達が一齐に飛び掛ってくる。俺は目の前の1人に向かつて飛び掛る。激しい火花とも力づくでそいつの体ごとはじき飛ばした。重い槌を一晩振り続ける事もある。それに比べれば一瞬に人間を飛ばす力は十分に備わっている。追撃して何度か切りかかるが見事に払いのけられた。

まあ本職でないとはいえつくづく剣士の家に生まれなくて良かったと思う。剣を止めるところこちらがやられるという思いにかられ必死で剣を振るつた。向こうも俺の隙を伺っていただろうが、素人ゆえにその剣筋を読めずに戸惑っている。

「当たれ！」

思わず言葉にした瞬間に向こうの体に剣が突き刺さる。願っているものだと思つたら、その剣は俺のものではなくて剣士のものだつた。

「大丈夫か？」

剣士に肩を叩かれて我に帰り、気づけばかなり息が上がっていた。た、助かった。」

剣を扱う職業とは言え、生まれてこの方、正式な剣術など習つた試しがない。

剣士が鞘に仕舞う前に剣を一振りすると、予想外に生々しく新鮮な返り血が足元の岩肌飛び散る。それを追つた視線を背後に向けると、先程まで人間離れした動きを見せていた刺客達が物言わぬ屍に変わり果てている。

「何なんだコイツら。」

「おそらく隣国の暗殺者というところだろう。」

剣士は鞘に剣を仕舞いながら抑揚のない淡々とした口調で答える。

「あんた何者なんだ？人に恨みを買っような事してんのか？」

「そうだな、まあ気にするな。」

そう言われても気にしないわけがない。この後も俺たちはあんなに狙われ続けるのだろうか。本人はまるで虫を追い払う様に日常茶飯事の事な態度だが、俺は激しく動く心臓を落ち着かせるのに、もう少し時間がかかりそうだ。

「先を急ごう。この辺りの獣が血の匂いを嗅ぎ付ける前に。」

既に匂いを嗅ぎ付けているカラス達が鳴きながら頭上を徘徊している。もはや獣がどうとかいう問題ではない様な気がするが、とりあえず言われるがままに剣士の後について岩から降りた。

正直この時点でこの災いの塊の男を村に連れていくのかどうか迷っていた。このままでは村が襲われかねない。

「まだ距離はあるのか？」

剣士は振り返りもせず問いかける。返事を返す前に剣士の背中越しに道端に誰かが立っているのが見えた。薄暗い森の中で黒一色の服装なのでとても見えにくいだが、そいつは確かにいた。

剣士もその存在に気づいたらしく、背中から殺気がみなぎったような気がした。どうやらこちらから仕掛けるかどうかを迷っているようだ。俺はよく分からないが、こういう時には達人同士は水面下で高度な駆引きを行なっているのだろう。

「……」

俺達は素人でも分かる程の緊張感を身に纏って黒ずくめの男の前を通り過ぎる。特に真横を通過する時の鼓動の速さは生涯最高の速さだった。

しかし、そいつは全く我々に反応を示さずにその場を一步も動かない。逆に生きているかどうかも怪しい程に指一本ピクリとすることも無かった。

「……」

振り返って男の姿が見えなくなった時に始めて身体中の皮膚から汗が滲み出てきた。それと同時に何か頭に引っかかっていたものに

気づく。

「あいつ、宿の集落にいた奴だ。」

宿の集落からここまで来る険しい道を我々より早く辿ってきたのか。

「知っている人物なのか。」

「とんでもない、あんな不気味な奴は知り合いにはいないよ。」

剣士の問いに俺は首を大きく横に振った。だが二度も見てもうと、三度目が頭にちらつく。かなり距離が開くまで気が気ではなく、背中に神経を集中させていた。

ようやく安心した頃に目の前に不気味に立ち上る煙に気づく。

「む、村の方だ。」

「何っ!」

もうすぐ辿り着く筈だった村の方向である。思わず駆け出した俺に続いて剣士も地面を蹴る。

剣を精錬する時の煙に似てはいるが、親父が亡くなった今、村にはそんな事をする者は一人もいない。最悪の状況が脳裏に浮かぶ中で、久し振りの家路を急いだ。

「待て!」

不意に俺の前に剣士が立ちはだかる。

「どいてくれ!」

「落ち着け、良く見ろ!」

気がつけば俺達は村を一望出来る小高い丘にいた。そこから見える、かつて村があつたであろう場所はほとんど平にならされて、焦げた臭いが鼻をつく。

「そ、そんな馬鹿な。」

足元から魂が抜けていく様に膝を地面につく俺は、剣士に支えられて何とか上半身は起こしたまま、絶望的な景色を瞳に映していた。

「国境が近いとはいえ、まさか奴らがこんな所にまで来ているとは……。」

俺は剣士の呟きを殆ど上の空で聞きながら、眼前で赤々と燃えている火を見つめる。勝手知ったる我が家は何とか半壊状態だった為に雨露くらいは凌げるだろうと、とりあえず一晩ここで過ごす事にした。

「これからどうするか……だな。」

顔を上げると剣士が俺の目を見て核心な問い掛け。確かに一番最初に考えなければならぬことかもしれないが、今日はもう色々起こりすぎて思考が停止してしまっていた。

「あなたこそ、すいませんね。これでは仕事になりそうにないな。」

俺は頭を掻きながら精一杯冷静を装うが、おそらく剣士には心中露になっただけだと思っただろう。

「確かにそいつは困ったな。」

俺の真似をしたわけではないだろうが同じ様に頭を掻く。俺は少し小さくなった火に瓦礫から取った破片をくべた。火は少し大きくなり俺達の周りを照らす範囲を少し広げる。

「あ。」

「どうした？」

口を開いて明かりと暗闇の境界を見ていた俺の目に人の形が飛び込んでくる。おそらくは大分前からそこに立っていたのだらうが、火をくべるまで全く気づかなかつたのは、そいつの格好が黒一色だったからだろう。

「またお前か……。」

剣士は剣を抜きもせず立ち上がる。殺気が感じられないことが今度は俺にも分かった。もしかしたら、こいつはただ道に迷っただけかもしれない。

「そんなとこに立ってないで、こっちに来て座ったらどうだ？」

何で俺が気を使うんだ？と思いつつながら声をかけてみた。

黒づくめの男は、俺の親切に素直に従い、歩いてきて火の脇に腰

掛けた。

「……」

そいつは何も言わずにただじつと火を見つめている。少しの間、俺も剣士も口を閉ざして沈黙が訪れた。時々俺が瓦礫から取ってきた木片を火にくべた時のパチパチという音だけがやたら大きく耳をくすぐる。

「剣を見せてもらえないでしょうか……」

別に沈黙に耐え切れなかったわけではないが、俺は剣士に何気なく話す。剣士は黙って鞘のまま剣を差し出してきた。俺は鞘を抜いて焚火の明かりで刀身を照らした。

目を細めてよく観察すれば多少の刃こぼれは目立つが、ゆらゆらと揺れる火を映したそれは名剣と呼ぶに相応しい色艶を出していた。なるほど、この剣を作ったのはかなりの名工だ。俺の中でくやしき感情が少し頭をもたげてくる。

旅の中でも数々の優れた武器を見る度に沸き上がる気持ちに対しては、それを糧にするようになるまでには随分と足を引っ張られたものだ。揺れる火を鏡の様に映すそれを眺めていると、思わず槌に手を伸ばししそうになる。

「……そういえば、あっちの方に残ってた小屋は？」

そんな俺の心情を察してか、それとも無視してか、剣士が不意にある方向を指差す。

「小屋？」

俺は暗闇を見つめながら記憶を辿る。焼け残った小屋とは、それは幼い頃からよく知っている父の仕事場だった。そうか、まだあの場所は焼け残っているのか。

心の中では迷っていたが、思い切って口を開く。

「もう一晩ここに留まりませんか？」

「よかるう。」

剣士は全てを見透かしていた様に即答する。それを待っていたのかと思えるほど、答えた瞬間に雲が晴れて月の明かりが焚火の円灯

の外の風景を照らし出す。そこには確かに見慣れた工房が原型を留めていた。

「仕事しろってことか…」

俺は剣を持ったまま立ち尽くして、すぐには動けなかった。迷いを見透かしているのか、剣士だけではなく黒づくめの男も俺の顔を凝視している。まるで次の一步が人生の分岐点かのような緊張感が辺りの空気を凍らせていた。

「…」

沈黙する三人。虫の鳴き声だけが辺り一体に響いて満月はますます明るく地面を照らしている。

「分かったよ。」

誰に対して言った言葉なのかは分からないが、とりあえず俺の足は意思とは無関係に前に移動し始める。一步小屋に近づく度に体が重くなっていく様に感じた。

小屋の戸を引こうと手をかけた途端、それはボロボロと崩れ落ちた。流石に無傷というわけにはいかないか。

中に入ると記憶の中のそのままの風景が広がる。竈に火こそ入っていないものの見慣れた道具が、窓から差し込む月によって不気味に光っていた。

それらの道具を一つ一つ手に取って確認する。使う者が居なかった事が幸いしたのか、一通りは村を出る時に最後に手入れした状態を保っていた。

「どのくらいかかる？」

まだ作業を始めるとも言っていないのに、入口付近の壁にもたれて腕を組んでいた剣士が質問する。

「…」

俺は即答しようとして喉から声を出しかけた。しかしその声が剣士に届くことはなかった。

「がはっ…」

「？」

突然嗜血したかと思うとそのまま目を見開いたままうつ伏せに倒れ込んだ。

「な…」

今度は俺が目を見開く番だった。何が起こったのか理解できるまでの数秒間、剣士の背中が当たっていた部分の壁から突き出た剣と、倒れた剣士の背中から溢れ出してくる血を交互に見ていた。

やがて入口に現れた人影で我に帰る。

「貴様はこの者の縁の者か？」

個性の特定出来ない低くて地獄から響いてくる様な声。俺は妙に冷静に答える。

「俺はこの村の鍛冶屋だ。この男は客さ。」

「そうか、もう一つ質問だ。お前は死神を見たか？」

「何の話しだ。」

「そうか、ならない。」

薄暗さで表情は分からなかったが、そいつが何となく笑った様な気がした。その姿が、かき消す様に消えると、いつの間にか壁から突き出していた剣も消えていた。

それから俺は暫くは動けないでいた。相変わらず虫の声だけが空気を振動させている空間で、ひんやりとした夜風が戸や窓から吹き抜けていく。

何がきっかけというわけでもなく、俺の全身から汗が噴き出してきた。そして外に出ると、赤々と燃えている焚火の場所まで走った。そこには消えかけた火以外に動いているものなど何一つ無かった。

そこにじつと座っていた黒ずくめの男も影すら見当たらない。さつき剣士を殺した奴と関係があるのだろうか？

— 先ずその場に座り夜風で汗を乾かすと、ようやく頭が回転し始めた。

「まずは休むことだな…」

誰に言うともなしに呟くと寝袋に滑り込む。誰かは知らないが、俺を殺すつもりならさつき殺しているはずだ。だからもう命の危険

はないと思う。いや、そう信じよう。

あの黒ずくめの男が刺客だとしても剣士が死んだ途端に姿を消したという事は目的が達成された何よりの証拠だ。気休めかもしれないが、俺は必死に自分の安全を確認しながら目を閉じた。

朝日の眩しさで目を覚ました。まだくすぶっていた焚火の焦げ臭い臭いが鼻をつく。頭上を見上げると雲一つ無い空に輝く陽射しで少し目が痛い。

細目になって周りを見渡すと昨夜の事が夢では無かった物証があちこちに散乱していた。明るくなって改めて見ると、俺が知っている村など何処にもない。ただ、何とか形を保っていた工房がもの悲しげに建っていた。

小屋に近づくと、外れた戸から小屋の中が見える。昨日うつ伏せに倒れた剣士が今にも起き上がりそうに生々しく目に飛び込んできた。

「墓くらい作ってやるかな…」

剣士の遺体を抱えて小屋から出すと小屋の脇の木の根元を掘り始める。

「くそっ！」

墓穴を掘りながら俺は急激に口惜しさが込み上げてきた。理由などはないが、何でこんな目に合わなければならぬのだという思いが穴を掘る手に余分な力を注ぐ。

「くそっ！」

呪いの決め文句を掛け声の様に繰返す。あっという間に二人分は埋められるであろう、かなり大きな穴が足元で口を開けていた。

「まあこんなもんか。」

穴掘りは専門外とはいえ割りと立派な穴が出来た。もう一度剣士を抱えて移動を始める。

「ん？」

少し進むと足元に何か光るものが落ちた事に気づいた。剣士の持ち物なのだろう。それは何かの模様の入った小さな袋だった。一旦剣士の体を地面に置いて拾い上げる。少し後ろめたい気持ちもあったが、好奇心も手伝って袋を開けてみた。

少しの貝貨に混じって何か光る貝貨が1つ入っている。

「何だこれ？」

取り出して太陽に翳すとそれは、太陽の光を倍増して目に入れた様になりに神々しさを放っている。他のものとは色艶が一変しているものであった。そこに描かれた模様には何処かで見覚えがあった。俺は、その場に暫く立ち尽くしてどうしようか迷ったが、貝貨は葬式代だと思い頂くことにした。

剣士の死に関しては俺に責任は何もない筈だ。

「さてと、それじゃあ運ぶかな。」

再び剣士の体を引きずって穴の中に落とす。多少荒っぽいけど、まあ勘弁して貰おう。結構な時間をかけて丁寧に土を盛る。さて、あと問題は墓標だ。俺はこの時点で、剣士の名前を聞いていなかった事に気づく。

「ふむ。困ったな。仕方ない…。」

俺は考えた末に木に「名無」と刻んだ。何も無いよりはマシなはずだ。その場で一礼して小屋に戻る。そこには道具一式と剣士の残した名剣がまだあった。俺は再び剣を鞘から抜いてじっくりとそれを眺める。

「ん？」

剣の柄の所に先程の袋の中に入っていた模様入りの貝貨にとても良く似ている模様が刻み込まれている。

「あ…。」

俺はほどなくして入国した時に見たこの国の新しいシンボルだと気づく。そしてあの兵士の言葉…。

「まさか…。」

あの兵士の話が本当だとすれば、下克上を狙って部下が王を暗殺したとも取れる。しかし、そうなるとこの剣を置いていった理由が分らない。やはり、この国の人間ではないのだろうか。

それはそうと、この剣を持ってこの国をウロウロするわけにはいかない。王の称号である剣を持っているという事は俺が今はこの国の王という事になる。

「そ、そんな馬鹿な…。」

自分で言ってる馬鹿馬鹿しくなるが、兵士の話が本当なら別段不思議な事ではないだろう。しかし、命には変えられないのは分つてはいるものの、これだけの名剣を手放すには、1人の鍛冶屋として余りにも惜しい気がする。

「うーん。」

美しい剣を眺めながら、俺は雷に打たれた様に一つの事を思いつく。

「そうか…。俺は何の為に鍛冶屋をやってるんだ…。」

夜の戸張が降りても俺の作業は終わらない。竈に火を入れてからもう数時間が経過した。流石に誰も使っていなかった工房だけあって直ぐには作業に取り掛かるわけにはいかない。とりあえず、準備で半日以上は使ってしまった。一休みしようと夜風の吹く外に出た時には、昨日と同じ様に煌々とした月がすっかり夜の顔になっていた。

昨日焚火した跡付近に立って空を眺める。大きく深呼吸した俺の目に突然黒い人影が映った。

「なっ…。」

それはあの黒ずくめの男だった。彼は、木の陰から黙って俺の方を向いている。

「あ、あんた。まだいたのか。」

黒ずくめの男は木陰から月明かりの下に進み出る。だが、相変ら

ず口が動く気配はない。

「何をしに戻ってきたんだ？、ここに何も無いぜ。」

俺は刺激しない様に出来るだけ友好的に話しかけた。何せ相手は、王を暗殺した犯人かも知れないのだ。

「…。」

一瞬で話題は尽きて沈黙。まあ、2、3回会った事があるだけで、俺はこいつの声さえ聞いた事がないのだ。

「もう一度聞くけど、俺に何か用なのか？」

男は答えない。暖簾に腕押しなのを悟った俺はそれ以上話すのをやめて工房に戻ることにした。

工房にはすっかり準備が整い俺の仕事は今か今かと待っている道具がずらりと並べられている。人の気配を感じた私は顔を上げると目の前に黒ずくめの男と違う影がそこに立っている。

「誰だ！」

窓から除く月光だけでは、そいつの顔は確認できなかった。

「俺だよ。」

「俺？」

十年ぶりに戻ってきたこの国で、村の連中以外に知り合いなどいる筈もない。「俺」と言つて分る人物など…。

「お前は…。」

その男が一步進み出て顔が月光の下にくる。その顔を見て、俺はそれが、入国した時の兵士である事にようやく気づく。

「何でここに。」

「お前が東の村って言ったんじゃないか。」

「そんな事じゃなくて、ここにいる理由を聞いているんだよ。」

男はニヤリと笑つて俺に近づいてくる。

「その剣は何処で手に入れたんだ？」

「何だと？」

俺との距離が近くなる程、男の表情が強張ってくる。

「その剣がどうしてお前の手にあるんだと聞いているんだ。」

「……」

俺は男との距離が縮まる度に距離を保とうと後ろに下がった。

「お前は、民間人だ。その剣を大人しく渡せば命だけは助けてやる
う。」

俺の背中が壁に当たってそれ以上は後に下がれなくなった。

「ま、待て！、俺は今からこの剣を鍛えなおそうとしていたんだ。」
男の足が止る。

「鍛えなおす？」

「そうだ。この剣の持ち主は俺にそれを依頼してから死んだ。俺は
王なんかに興味はない。だからこの剣はあんたに譲るよ。ただその
代わり、依頼は完遂したいんだ。頼む。3日いや、2日待ってくれ。」

男は立ち止まってじっと俺の目を睨む。恐らく頭の中では色々な
打算が働いているんだろう事は容易に想像できる。

「……分った。だが、俺もここで待たせて貰うぞ。」
俺は何とか命を繋げた。

赤く焼けた鉄を鍛える瞬間は無心になる。こんな状況でも、それ
は変わらない。

カーン、カーン。

その音は俺の心臓を撃つ様に自分の鼓動にあわせて響き渡る。今、
俺にとっては世界にこの音しかない空白に近い瞬間。雑念を捨てら
れる様になったのは、いつからだろうか。形を変えていく剣をただ
無心で見っていた。元々が名剣だったのに今この剣がどの世に生まれ
変わるのかは、俺自身にも分らない。

「ぐ……」

汗が目に入る。それを拭き取る時、一瞬だけ我に帰る。そして直
ぐに無の世界へと入っていく。

どの位経ったのかは分らない。しかし、出来上がった剣を水につけるとジユウという音が耳をくすぐると、とりあえず我に帰る。

「ふう。」

大きく息を吐き出して頭に巻いていた手拭を外す。用意していた柄に刃を取り付けると鞘にピタリとはめて作業を完了させた。手拭を外して、何気に絞ると大量の汗が床に滴り落ちた。壊れた戸から外に出ると、月が同じ場所に光っている。

「終わったのか？」

男が1人近づいてきて俺に話しかける。

「ああ、終わったよ。」

「さつさと渡せ。」

俺がゆっくりと手に持っていた剣を差し出すと、男はそれを筆り取る。

「ところで、あいつは誰なんだ？」

男は近くの木の根元を指差して聞いてくる。俺はその方向を見たが、その指先には誰もいない。

「さあな。知らないよ。」

「まあいい。これで俺がこの国の王だ。」

男は薄ら笑いを浮かべると剣を握って走り去る。

俺は、男が指差していた木の根元に歩み寄ると何も見えない木に向かつて話しかけた。

「お前、死神だろ？」

「…」

無論返事はない。そこにいるのかどうかも分らないが、俺は言葉を続ける。

「俺にはもうお前が見えない。これで俺は助かるんだろうな。何をしたら助かったのかは知らないが、あの男はもうすぐ死ぬんだろ？、この国の王が、あんな馬鹿じゃこの国は死んだも同然だな。」

俺は少し笑って小屋に戻った。そして更に一本の剣を持って小屋を出る。俺はその剣を最初に埋めた男の墓標として木の根元に突き

立てる。

「俺は王なんてのに興味はないんでね。」

それは、男に渡したダミーの剣ではない本物の剣だ。俺は一度手を合わせて焚き火の場所に戻り荷物を纏めた。もうこの国に未練はない。

俺はそれから旅に出て他の国で鍛冶屋を開いたが、程なく生まれ故郷の国の滅亡の話をも風を頼りに聞く事になる。

遠くへ

人間ツイてない時は徹底的に重なるものだ。仕事が忙しいのは悪いことではないが、度が過ぎれば精神的に参ってくる。ようやくとれた休みの日も特に何をするでもなく家でゴロゴロするだけを繰り返していた。

会社に親しい人がいるわけでもなく、無論彼女や友人などという人物関係は俺の周りには存在していない。だから、人に恨まれる事もなければ喜ばれる事もない。

そんな無味無臭の人生に疲れた俺はどうしても一人になりたくて人生初の「無断休暇」というものをしてみる事にした。更に家に居ても仕方がないので、これも人生初になるが旅に出ることにしてみる。

計画と呼ぶほど大袈裟なものでもないだろうが、とりあえずネットで地図を眺めてみる。飛行機や新幹線などは本当に数回しか乗ったことはないし、予約の仕方もよく分からない。車もバイクも無ければ運転免許も持ってない。この乏しい移動手段で何処まで行けるのか…。

何も自分を変えたいだとか、そういうつもりはさらさら無く。ただひたすら突発的に思いついただけの旅だった。

そうこう考えているうちに就業終了の時間がきた。

「お疲れ様です。」

一応挨拶はしたつもりだが、周りからは何の返答もない。まあいつもの事だ。就職してから何年も飲み会や食事に誰かに行った試しはないが、仕事に関してはきちんとこなしているつもりだ。リアクションがないという事は裏をかえせば、俺の仕事ぶりに問題はないと受け取っている。

都合のいい解釈かもしれないが、そうでもしないと精神的にもたないのだ。まだ明るいうちに会社を出て電車に乗る。誰一人、明日

俺が会社に来ないなどは思っていない。サボり癖のある人にはよくある日常かもしれないが、俺にとってそれは大事件なのだ。

荷物を纏める為に一旦家に帰る。散らかった部屋の中から取りあえず一番大きなリュックを引っ張り出す。旅行など行かない俺に両親からの就職祝いだが、一度も使った事がない。

具体的には何が必要かもよく分からないが、着替えや携帯電話の充電器くらいは必要だろうと、思いつくまま適当に詰め込んだ。詰め込み終わって外を見ると、すっかり日は沈んで星が見えかけていた。

家を出て駅に向かう。途中で空を見上げると、真ん丸い月が俺を笑っている様だった。最寄の駅前には商店街への入口があり、居酒屋などが軒を連ねている。まだ平日だというのに何人ものスーツ姿のサラリーマンや大学生らしき私服の若者が入れ替わりに店に入りにしている。

賑やかな繁華街も俺にとっては、あまり嬉しい町ではない。街灯の光が映し出す彼らの紅潮した顔もあまり好きではなかった。

目的地は考えていなかったが、一先ず定期を使って改札をくぐった。会社までは無料でいけるが、こんな時にまで、いつもの見慣れた通勤風景を見るのも嫌だったので、ホームに降りた後に、会社とは反対方向の電車に乗る事にした。

「えーと、こっちか。あ…。」

慣れとは恐ろしいもので、危うくいつもの方向の電車に乗りそうになったが、何とか思いとどまってホームの真ん中のベンチに座る。1人溜息に身を任せて壁に張られてあるポスターを何気に眺める。次の電車までまだ五分あった。何もすることがない時の五分は長く感じるものだ。

少しでも空いている方がいいな。そうだ、先頭車両か最後尾なら座れるかもしれない。退勤ラッシュの時間はとくに終わっていて、いつもの電車より空いている事は予想できたが、席に座れる事を期待して、念には念を入れようと席を立って移動した。

ホームには誰もいない。いつもは、ホームに降りて最初に到着した電車に乗れない程混雑している見慣れたホームが、まるで別の空間の様に思える程、俺にとっては異色の景色だ。この駅のホームはこんなに広かったのか…。

端まで来ると五人掛けのベンチの隅に誰かが座っている。

「あれ？」

さっきまで誰もいなかった様にも見えただが…。まあ、俺もポーツとしているから断言は出来ない。更にそいつはまるで気配がない感じがしたし、服装も帽子から靴まで黒一色の格好だったから尚更目立たない。

男は寝ているのか起きているのか、深々と帽子を被り足を組んで手をポケットに入れてじっとしている。ただ、微かな体の揺れで息をしている事だけは分った。それがなければ死んでいるんじゃないかと思える程にそいつからは生気が感じられなかった。

まあ俺も似たようなものかもしれないが。

男が座っているのと反対側の端に座って電車を待つ。電光掲示板には電車遅延の情報は流れていないので、時間通りならもう直ぐ来るはずだ。

いつの間にかホームに一人降りてきていた駅員が旗らしきものを振っていた。先頭車両付近に座っていた俺の目にゆっくりと進んでくる電車の強烈な灯りが目に飛び込んできた。

先頭車両がピツタリと目の前に止まり、立ち上がって近づくと左右に開いた扉から中に入ると、その車両は誰一人乗っていないかった。

「おおっ。」

一車両を独占する事など生まれて始めてだ。小声で歓声を上げた後、隅っこの席に腰掛けた。

パツと顔を上げると、いつの間にか乗り込んでいた黒ずくめの男が向かいに座っている。いくらでも席があるのに何もこんな近くに座るとは…。

小窓から見える隣の車両にも誰もいないように見える。少なくとも

も今の駅では、二人しか居なかったはずだ。

「まさかなあ。」

この電車に俺とこいつしか乗ってないと思えるほど人の気配がない。ついでに言えば、別に恨みがあるわけでもないが、こいつには早々に降りて頂きたいものだ。

扉が閉まって、進行方向と反対側にかかる重力が心地よく体を押し始める。心なしかいつもより軽快に車輪が回っているように感じた。

窓から見える見事な満月。それだけで、この時間が永遠に続く事を願う。ガタンゴトンと電車に揺られる。いつもならこの揺れが眠気を運んでくるのだが、今日は少しいつもと違う景色や状況に興奮していた俺の臉は軽かった。

向かいに座った黒ずくめの男は深く被った帽子で表情は分からないが、眠っているように見えた。

「次は……。」

アナウンスが聞こえて次の駅が見えてきた。薄暗い灯りのホームには誰もいない。

「……ん？」

俺は、ここで始めて違和感を覚える。元々今日は違和感だらけの日であるが、それとは異質の雰囲気や車内に漂っていた。目の前の黒ずくめの男は相変わらず微動だにしない。

電車がホームに到着して扉が開く。ホームに漂う不気味な空気が車内に流込むと、温度が少し下がったのか、少し身震いした。無人のホームは薄暗い電灯のみが地面を照らしている。

それにしても駅員すら一人もないのは妙だ。この路線には無人駅は存在しないはず。ましてや終電が過ぎる時間というわけでもないし……。

俺の疑問をよそに電車の扉は閉まって再び振動と少しの重力が体に押し掛かってくる。ウーンというエンジン音が耳に入ると窓の外景色が少しずつ流れ始めた。

それから何駅か通り過ぎる。途中の駅でも様子は何も変わらなかった。降りる駅は決めていなかったもののどの駅でもとても降りる気にはなれない。とは言っても環状線というわけではないので、いつかは降りる必要があるのだが、終電までに決めればいいし、終電まで時間もある。

流石に通勤と逆方向の景色は見慣れない事もあつて新鮮な風景だ。次々に新しい情報が頭の中に流れ込んでくる感覚は痛快なものがあった。それだけでもこうしている甲斐があるのかもしれない。

さつきから何も変わらないのは、夜空にくつきりと浮かぶ月と、目の前で全く動かない黒づくめの男だけである。こいつは一体どこで降りるつもりだろうか。もしかしたら、寝過ごしているのかもしれない。周りには誰もいないし、一度声をかけてみようか。いや、そこまで親切にしてやる義理もないか。

こうして迷っている間にも幾つかの景色と駅が流れていく。俺はいつの間にか瞼が次第に重くなっていくのに気づいた。次第に思考が空白に近くなり考えが纏まらなくなってくる。やがて俺は、心地良い揺れの中で、少ない荷物を抱き抱えたまま意識を失った。

「うーん。」

どの位の時間が経っているのか分らないが、俺が目を開いた時には、眠る前と変わらぬ状態だった。月も男も相変わらずそこにあつた。そして、またしても見知らぬ駅に停車する所だった。

「次は終点……。」

駅名が告げられる。確かにそこは俺の知っている路線の終点の駅名だった。車両を見回しても俺と黒づくめの男以外には誰もいない。こんな事があるのだろうか、いくら何でも。

俺は今更置かれた状況の異常さに気づいた。

しかし、開いた電車の扉は今度は不気味に口を開けていつまでも閉じようとしなない。普通ならここで車内点検の駅員が何人か入って

きて、車内で寝過ごしている人や、棚に置かれた漫画、床に転がっているビールの缶などを片付けていく時間だ。

俺は何度か仕事の疲れで寝過ごしてこの終点の駅まで来た事があるから知っている。

いつまで待っても人の気配はない。ホームを照らしている電灯もいつものものより薄暗く感じる。仕方なく俺は電車を降りた。

背後に感じた気配に振り返ると黒ずくめの男が席を立っていた。

そいつは、俺と同じ出入口から電車を降りてホームのベンチに腰掛ける。

「あ、あの…」

俺は男の前まで言って思わず声を掛けた。現在の状況への焦燥感と、一応同じ時間を共有した事がそうさせたとは思えない。しかし、別に何の質問も思いつかずに軽く追い込まれた俺は思わずどうでもいい事を呟いてしまう。

「だ、誰もいませんね。」

「…」

沈黙が帰ってくる。まあ、そうか。俺も知らない人にそんな事を話しかけられてもそうするだろう。

「困ったな…。」

時刻表を見ると引き返す電車は十分後に出るらしい。これを逃すと明日の始発までここに釘付けにされる事になる。俺は、迷った拳匂、ホームのベンチに座って始発電車を待つことにした。もっと遠くまで行ける路線に乗り換え可能な駅まで行くしかない。この終点駅からは何処へも乗り換える事が出来ないからだ。

この男もここに座っているとところを見ると、俺と同じ様に寝過ごした口だろう。今度は寝るわけにはいかないのとおりあえず時間潰しに携帯電話を取り出した。

「ん？」

そこは圏外だった。立ってホーム内をウロウロしてみたが、電波が受信される気配はない。

「まったく、何て所だ。」

ホームから見える景色は、背の高い芒が何処までも広がっている。民家らしきものがポツリポツリと見えるが、灯りは灯っていない。まあ既に寝ていてもおかしくない時間ではある。

ホームに唯一あつた自動販売機でジュースを買う。ガタガタという音が周りの静かな空気に吸収されていった。

電光掲示板に示された出発時間が近づいてきていた。新たな電車が来る気配はないので恐らく、さっき乗っていた電車がそのまま引き返して走り出すのだろう。行き先の表示がいつの間にか変更されていた。

車内の灯りはずっとついたままだった。まあ、ここまで来たら考えても仕方ない。どうせ、俺とこいつしか乗っていないのを見て、車内清掃するまでもないと判断したから誰も出てこなかったんだろう。

しかし電車が走っていたという事は運転手がいた筈である。先頭車両に乗っていたのだから一旦降りるか反対側に移動する時に見かけそうなものであるが、少なくとも俺は見えていない。

「すみません。何か変だと思いませんか？」

俺は思わずまたしても黒ずくめの男に話しかけてしまう。男は、今度は顔を上げて一応俺の方を見たが、ただそれだけで相変らず返答は帰ってこない。俺は乗り過ぐすと大変なのでとりあえず一礼して電車に乗り込んで席に座る。

それとほぼ同時に、まるで俺が乗り込むのを待っていたかの様に扉が閉じた。異様な気配で動き出す電車の中をゆっくりと先頭車両に向かつて歩き出す。

最後尾から隣の車両に移るが、そこにはもちろん誰もいない。次々と車両を乗り移り前へ前へと進んだ。ここまで無人な電車は本当に初めて乗ったのかもしれない。

やがて行き着く先まで辿り着いた。最後の繋ぎ目を渡って先頭車両に入る。

「あ…。」

一番前の席に腰掛けた黒ずくめの男。こんな服装は二人といまい。
「あんださっきの…」

思わず指差して話しかける。男は面倒くさそうに顔を上げてこちらを見たが、それ以上は何も言わない。どうやって乗ったんだ？

俺が乗り込んで扉が閉まった時にはまだホームにいたと思ったのだが、しかも先頭車両まで来る時間は絶対に無かった筈だ。

頭の中がグルグル回る。そんな時、不意にホームへの扉が開く。しかし、今の俺にはそんな事よりカーテンの向こうの運転席の方が気になる。黒ずくめの男の前を通り過ぎて運転席のカーテンのかかった窓に耳を付けると、カチカチと何かのスイッチもしくはハンドルを操作している音が聞こえる。

傍らに運転席に入る扉がある。ガチャガチャとノブを捻るが、鍵が掛かっているようだった。

「すいません。」

不安に駆られた俺は窓をドンドンと叩いて呼びかけてみた。しかし、窓の向こうからは何の反応もない。運転中だからだろうか…。

仕方がないので次の駅に到着した後、再び同じ様に呼びかけてみるが、電車が駅に停車している間も何の反応もない。背筋に冷たいものが走り、ホームへ飛び出そうと、そちらを向くと丁度閉まったところだった。

やむを得ず黒ずくめの男の向かいに座る。そしてもう一度周りを見回した。いつもの雑誌の広告がぶら下がった車内には異世界的な雰囲気はない。ただ、そこに流れる空気は冷房もついてないにも関わらず肌を刺す。

目の前の黒ずくめの男に対して少しずつ怒りすら覚えてきた。が、いくら睨み付けても帽子の奥の目は呆然と床を眺めているだけだ。

「…あんだ、何か知ってるのか？」

俺には人に話し掛ける事自体が勇気がある事だが、この時ばかりはそうも言ってもらえず、何の躊躇いもなく男に話し掛けた。

「…」

「さつきから何なんだよ。俺はどうしちまったんだ？」

生まれてこの方あまり感情を表に出した事はない俺がいつしか黒ずくめの男に詰め寄る姿は我ながら似合わないと思う。

「…」

何か言えよ。ん？、待てよ、話せないのか？

それならばとポケットから手帳とペンを出して質問を書きながら、そいつの目の前に翳した。

「ここは何処なんだ？」

あまり綺麗な字ではないかも知れないが、言葉が分かれば普通に読める筈だ。しかし、そいつは興味なさそうに視線を下にそらす。字も読めないのであれば、完全にお手上げだ。もしかしたら俺は全く違う異世界に迷い込んでしまったのだろうか？

「くそっ！」

俺は歯を食い縛りながら男の向かいに腰を下ろす。絶対に次の駅で降りてやる。

流れていく景色に俺は奇妙な事に気がついてしまった。

「月が…」

あれだけ煌々と空にのさばっていた満月が何処にも見当たらない。背後の窓も振り返って覗いてみたが、星1つ見当たらない。始めは曇っているのかと思ったが、目を凝らしてもそうは見えない。

更に悪いことに気づく。やたら駅間が長くないか？、時計を見たが、いつの間にか見事に壊れていて、既に時間を刻んでいなかった。やけに電車のスピードも速い気がするし、外の風景にも生気が感じられない。

「…」

突然に眠気に襲われた。さつきまでの興奮の反動だろうか。目的の駅まではまだ数駅あったので、大丈夫だろうと、重い瞼に逆らわずにそのまま眠ってしまった。

意識は起きたが目は開かずにいる。数秒ばかり眠る前の状況を思い出そうとする。ふと肩が誰かに触れて目を見開いた。太陽の明るい光が不意打ちで目を突く。

「え？」

キョロキョロと周りを見回す俺に、左右の席に座っている人や目の前に吊革を持って立っている人達が不審者を見る目を向けている。普段の俺なら縮こまってしまっただが、眠る前の状況を思い出した今となつては逆に周りに同じ目を返す。

「…夢落ち…？」

誰にも聴こえない位のボリュームで呟いてみたが、手に持ったりユックの中に終点駅で昨日買ったジュースのペットボトルがあるのを見て夢ではないと判断した。

周りを見るとどうやら何時もの通勤電車の風景だった。寿司詰め
の車内は閑散とした無人電車とは対称的に熱気に包まれていた。

どちらを見ても人、人、人。それが嫌で逃げ出した俺には地獄絵
図に見える。降りようにも人を掻き分けて降りるには少し勇気が必
要だったが、とにかくここから出なければと席を立てて扉に向かっ
た。

「ぶはっ…」

海底から陸に上がった様な深い深呼吸。見慣れた景色は職場の駅
だとすぐに俺に気づかせた。俺と同時に降りた何人もの人が狭いホ
ームにひしめき合い、階段とエスカレーターに並んでいる。朝の一番
混みやすい時間だ。この人の流れに乗ってしまったら、せつかく逃
げ出した空間に戻されてしまう。

根拠は無かったがそう思ってしまったので隅っここのベンチに腰か
けて、詰まっている行列の方をボーツと見ていた。

突然に雷に打たれた様な衝撃が体を貫いて硬直する。

「あれは…」

見慣れた後ろ姿だ。見慣れたもなにもスーツ姿のその男は人混み

に紛れながらも軽快に階段を上がっている。その肩幅、髪型、スーツの色、少しよれた鞆、どれをとっても、俺自身が良く知っているものだった。

世の中にはよく似た人が三人はいると言うが、まさか…。悪い予感に捕らわれながらも、俺は自然とベンチを立ち上がって人混みに紛れ込んだ。

その背中を一定の距離で追いかけている間、頭の中は真っ白になっていた。何故追いかけたのか、その根拠すら曖昧なまま足は前へと進む。

駅の改札をくぐるそいつを追いかける。どう考えても見慣れた通勤路を通って会社に向かっている。しかし、それまでの道のりの風景は、微妙だが何かが違っている。

ビルの合間をぬって進んでいくと、見慣れたビルが見えてきた。どう見ても俺の会社だ。前を歩く追跡対象は俺には一度も気づかずに早足でビルに入ってしまった。

このビルは少し妙な造りになっていて1階入口からエレベータまで長い1本道の廊下になっている。あまり大きなビルではない為に受付などというものは無い。俺はビルの入口からそいつがエレベータに入る所までをはつきりと目撃。エレベータの扉が閉まる直前男が振り向いた。

「…！」

その顔は初めて見るものではない。毎朝、顔を洗う時の鏡等で見る自分の顔だった。少し雰囲気は違ったが、いくら物忘れが酷い俺でも自分の顔を見忘れる事はないだろう。

「何なんだ？」

思わず一人で呟くが、それについて解説を加えられるわけはなく、いくら考えても分らない。その場に十分程立ち尽くした後で俺はとりあえず近くの公園に移動した。

公園では、中央の噴水の周りで集まってきた鳩に餌を与えている老人や、乳母車を押している母親など、良くある景色が広がっている。昼休み時には、近くのオフィスから色々な人が押し寄せて憩いの場として活用されている公園である。

しかし、あんな体験をってしまった俺には、ここが夢の世界に思えてならない。ふと目を覚ますと、あの電車の中でリュックを抱えて座っているのではなからうか。そんな期待だけに支えられているような状態だ。

「これからどうしようか…。」

少し腹が鳴る。そう言えば、朝飯も食べていない。とりあえず、この腹を何とかしないと思考回路もろくに回らない。ふと、立ち上がると、公園の入口から数人のスーツ姿の人々が公園内に入ってきた。自分の時計は壊れていたので公園の時計を見る。しかし、「修理中」と書いた張り紙が目に入った。

入ってきた人達がお弁当を広げるのを見るとどうやら昼時らしい、幸いこのオフィス街に親しい友達などはいなかったので、私服姿を見られたとて、さほど害はないのだが、問題は、自分の行動パターンからすれば、コンビニ弁当を持って公園で食べるのが日課になっているという事だ。しかも、いつもの癖でいつものベンチには、今まさに自分が腰掛けている。

別に悪い事をしていないわけではないのに、俺は自然とベンチを離れて近くの木の影に移動した。天気は良く、土の地面にクツキリと映る木の影の中はとても涼しい。いつも通りのどかな公園の中では、俺だけが異物である様な空気感を出しているのが自分で分かる。

「む…。」

やがて少しすると予想通りに「俺」が公園に入ってきた。抱えたコンビニの袋は良く行く店のものだ。恐らく中身は、日替わり幕の内あたりだろう。何をこそそそしていたのか自分でも分らないが、俺は本能的に身を隠した。ベンチから見て後ろ側に周り半身を出してこっそりと「俺」を観察する。「俺」は、俺の予想通りにいつも

のベンチの右端に座ってコンビ二の袋を開いた。こちらからは背中しか見ないので、弁当の種類までは分らないが、確実にそもそも食事をしている。

「さてと、どうするか…」

見つからなかった安心感からその場に座り込んだ。だが視線は、「俺」から外してはいない。これからの事を思案していると、ふとベンチの反対側、つまり左端に座っているそいつに気づいた。

いつからいたのだろうか、弁当を持った「俺」が右端に座った時には、確かにいなかった筈だ。しかし、今は、シーソーのバランスを取るように、ベンチの中央から全く同じ距離の反対側に座っているその人物にも見覚えがある。

「あいつ…。」

帽子から背中まで、たった一色しかないその服装は、電車の向かいの席に座っていたあの男以外の何者でもない。何であいつがこんな所にいるのだ。

少しパニックになった頭を整頓している間に、「俺」とその黒ずくめの男が何か会話しているのが見えた。「俺」は男の方を向いて何かを喋っている。この距離では、声は何も聞こえない。自分と同じ顔を見るだけでも気持ち悪いのに、俺には近づいて何を言っているのかを確かめる事などできなかった。

「俺」は結構な剣幕で何かを男に言っている。俺は電車の中での自分と男のやり取りを思い出した。

「あいつ、結局何も言わなかったな。」

恐らく今も俺の言葉に対する返答は何一つ返ってきていないのだろう。暫くはそんなやり取りが続くと「俺」はベンチを立てて公園を立ち去ってしまった。

それを確認すると、俺はベンチへと近づいて男の正面に回り込む。やはり、あの電車の男だ。

「お前は、何者なんだ？」

「…。」

男の沈黙には慣れてきた。目立つのは嫌だったので、俺は大きく深呼吸をして心拍数を下げる。そして、ベンチの「俺」が座っていた所に腰掛けた。

「ここは…、何処なんだ？、こいつは夢じゃないのか？」

まるで人形に向かつて話している様に虚しいが、この男が何か知っている事は間違いない以上、こいつから真相を聞くしかない。

「何で俺に付きまとうんだ？」

質問ばかりで会話のバランスが悪い。俺は、喋るのをやめて考えた。夢であれば、時間が経てば目が覚めるだろう。

「もういいよ。」

俺は男から聞き出す事を諦めてベンチを立ち上がる。しかし、横をふと見ると、男は既にそこにはいなかった。こういう不思議な事でも慣れはあるものだ。あいつが只者でない事は間違いない。そしてこの世界は、俺がいた世界ではない。確信はないが、これまでの状況から見て間違いないと思う。問題は、ここから帰る方法だ。

「帰る？…」

俺は空を見上げて少し笑った。帰る…か。

ほんの昨日まで現実の世界からどれだけ遠く離れるかを考えていた俺が、今度は元に戻る方法を考え始めている。今、まさに最初の願い通り、遠くへ来た筈なのに…。だいたい元の世界に戻ったとして何があるというのだ。

俺は、リュックに入っていたペットボトルを取り出して一気に飲み干した。温い炭酸が刺激する喉は、この世界がリアルに存在している事を俺に教えているようだった。

「げほっ…。」

乾いた喉に慌てて流し込んだので少し蒸せてしまった。

「ふう…。」

口を拭って顔を上げる。とりあえず、もう1人俺がいるという事は、ここは本来俺がいる場所ではないという事だ。傷心旅行的な軽いサボりだった筈なのに、とんでもない事になった。

「さて、これからどうしようか…。」

思案しながら公園を出ると、不意に目の前に人だかりが見えた。数十人の人達がビルの前で何かに群がっている。

「？」

それどころではないと通り過ぎようとしたが、ふと、そのビルが自分の会社のビルだと気がついて足を止めた。

「何だ？」

「自殺か？」

人々が口々に唱えているのを聞いて、脳内に電撃的に悪い予感が広がる。

「ち、ちよつと、すいません。」

人混みを掻き分けて群集の中に入る。しかし、狭い道に予想以上に集まっている為に中々体が前に進まない。少しずつ体を前のめりにしていくと、人の隙間から倒れている「俺」の顔が見えた。俺は目を見開いて、人混みを掻き分けていた腕の力が抜ける。

「どけよ！」

突然何ものかに突き飛ばされて、群集からはみ出す。

人混みから何とか抜け出すと通りの向かいに黒ずくめの男が立っているのが見えた。俺はこの時に何度も見たその姿で背筋が寒くなる。男は無表情のままだったが、俺には笑っている様に見える。

ツカツカと詰め寄って男の表情を覗き込んだ。

「説明してくれ。って言っても無理か。」

一人完結した俺はそのまま男から離れた。背後からは救急車のサイレンが聞こえる。

電車に揺られていつもなら座ったら眠気に襲われる筈だが、この時ばかりは興奮で目を開いたままだった。特に何をというわけではないが、電車から見える景色を睨み付けている。この時の俺の顔は恐らく笑う子も泣く顔をしていたのだろう。

「次は」

アナウンスが流れて席を立つ。周りの数少ない着席している客はほぼ全員が居眠りしていた。

ホームに降りるとまず周りの様子を見回す。駅員が笛をふいているいつもの駅のホームだった。それでも警戒を解かず改札へと向かう。

正直電車に乗っている間、気が気ではなかった。普段なら仕事をしている昼間の時間帯とはいえ、今の俺の身の回りでは何が起こるか分からない。

家路を辿る途中で時々振り返る。あの黒づくめの男が、何処からか俺を見ている様な気がしてならない。駅から家までの街並みも微妙に何かが違っている。

しかし今の俺にはそんなことはどうでもいいことだ。ここが既に別の世界だということは間違いはなさそうだ。今の俺に必要なのは元の世界に戻る手段を探すことだけだ。その手掛かりになるかならないかも分からないまま、さっき死んだ「俺」の家に向かっている。微妙には違っているても大まかな場所は何も変わっていない。で、あっさりと家に辿り着く事ができた。正確には自分の家ではないのだが。アパートの階段を登る途中に見慣れたおばさんとすれ違う。

「あれ？もう会社終わったのかい。」

「いや、気分悪くて早退したんで…」

「そりやお大事に。」

普段は声など掛けられないはずなのだが、こちらの俺は少し社交的なようだ。

ドアの前に立ち鍵穴に荷物から取り出した鍵を差す。駄目元でとった行動だが、ガチャリと音がして、あっさりとドアは開いた。

中に入ると、家具の配置や匂いも微妙に違っていた。こっちは俺は少し整理整頓が出来るようだ。

物の配置が変わっても俺本人であれば癖や考え方に大差はない

はずだ。俺は机に座ってそこにあったパソコンのスイッチを入れる。パスワードでロックされた画面が表示されると、何の躊躇いもなしに自分の使っていたパスワードを打ち込んだ。

いつもの当然の流れの様にホーム画面に切り替わる。さつき死んだ男が「もう一人の自分」であるという確信がますます募っていった。更にデータを探ってみる。さすがに一言一句同じデータというわけにはいかないが、幾つかのテキストファイルを開いてみると不気味なメッセージじみた文字が踊っていた。

職場や自分の周りに対する不平不満、まあ全部読まなくとも書いている内容は予想がつく。

暫くデータをザツピングしていると「あれ？」と思う様な不可解な日記が目に入ってきた。当然俺自身はこんなことを書いた覚えはない。

「今日もアイツが後ろからついてくる。死神の様な黒ずくめの男だ。いや、実際に奴は死神なんだろう。朝に駅の前にはいたかと思えば、電車に乗ってもいないのに会社の最寄り駅に俺が降りた時には出口に立っている。」

背中が少しひやっとした。思いきり身に覚えのある体験だ。どうやらアイツは「俺」につきまとっていたらしい。それから暫くは黒ずくめの男への恐怖と苛立ちが綴られている。同じ事をやられたら同じ様に書いていただろう。

日記も最後の方に差し掛かると、「常に何かに追いかける夢を見る」や「何処からか落下し続ける夢を見る」など、かなり追い詰められた表現が増えてきた。そして最後のページを開く。

「何もかもうまくいかない。遠くへ行きたい。」

同じだ。俺は今遠くに来ているはずなのに、現実に戻された様に不快感が漂う。同じ遠くでも、それを死と解釈した事はない。日付を見ると、どうやら今朝書いたものらしかった。

ファイルを閉じて窓の外を見ると、夕焼け空が赤々と燃えている。「俺はどうすりゃいいんだ。」

無論何処からも返答はなく、静まり帰った部屋の中で侘しくなる一方だった。振り替えれば、あの無感情な目がこちらを見ていると思うと、後ろを向くのも勇気がいる。

ここにも何も始まらないとばかりに早足に外に出た。

周りを見渡すが、誰もいない。人通りが少ない時間帯とはいえずし様子がおかしい。あの男は何処から俺を見ているのだろう。俺の足は自然に駅の方に向かって歩き始める。

1分毎に暗くなる街並み、長い様で短い駅までの距離を歩き切る。居酒屋などの看板には灯りが灯っているにも関わらず人の気配がないという異常な事態に俺は戸惑うばかりだった。

駅に入るとますます異世界への扉を開いた感があった。そこは無人で、あの黒づくめの男すらいない。今俺は世界のどの位置にも立っていないのだろうと思える程に孤独感が襲い掛かる。

既に外は日が沈んでいた。駅のホームは改札からは見えない位置にあるが電車が走っている音は聞こえる。まるで誰も乗っていない様な軽快な車輪の軋む音が。

「はっ……」

背筋に寒さを覚えて俺は振り返る。そこは、黒い影が立っている。「またか。俺に何の用だ？」

「……」

黒づくめの男は相変わらず沈黙を守っていた。この先に会話が始まるなどとは夢にも思っていないが、口に出さずにはいられない感情が俺の中で渦巻いている。

「俺は…死にたくはない。」

そう呟くと同時に男は振り返って夜の暗闇に溶けていった。遠ざかる背中、寂しそうにも見えたり、泰然としていた様にも見えたり。まるで絵画の一部の様に、夜を描いたキャンバスに黒い絵の具を一滴垂らしたような男の姿を完全に見えなくなるまで俺は呆然と眺め

ていた。

振り返って階段を上がる。そこにある僅かな光が導くように俺はホームへと向かった。まるで俺を待っていたかの様に、丁度電車がそこに止っている。俺は少し迷いながら、ホームにあった自動販売機で炭酸のジュースを一本買って電車に乗り込んだ。

そこには勿論誰もいない。発車のベルが鳴ると、走り出した電車の振動で少しバランスを崩した。ヨロヨロと先頭車両まで歩いて一番前の席に腰を降ろした。空には星も月を見えない。しかし、電車の揺れは否応なしに俺の瞼を重くする。

「帰ったら…今まで通りで、いいか…。」

自分でも何故帰れると思ったのかまるで分らない。何の根拠もない安心感で更に瞼が重さを増す。俺の呟きは誰にも聞こえないはずだ。次に目覚めた時には窓から月が見えている事を期待して俺は静かに目を閉じた。

山

「おい、起きろ。出発する時間だ。」

あまりに返事がないので私はテントを捲って覗き込んだ。仲間は寝袋の中で目を閉じてじっとしている。動きがないのでとりあえずテントに入り頬を叩いてみた。普通なら飛び起きて顔が紅潮するはずだが、人形のように気はなく閉じた目が開くこともなかった。

「おい、どうした？」

他の仲間が背後でテントを捲って覗き込む。

「駄目だ…。」

「え？」

私の言葉が耳に届くと、仲間は驚きの表情をする。それがテントの外で待っている他の仲間が届くと一同動揺し始めた。私は物言わぬ屍となった仲間を一旦降ろすとテントを出る。

「駄目って…まさか…。」

私の目の前には3人の仲間が、真剣な表情で暗い顔をしている私を覗き込んだ。皆言葉にしくなくても最悪の事態を予想している。そして、それは的中していた。

「駄目だ。もう息をしていない。」

「心臓マッサージは？、昨日はあんなに元気だったんだぜ。」

「そうだ。食欲のない俺の分の携帯食料まで食ってる程だったのに。」

「皆口々に私に蘇生を薦める。」

「駄目だ。硬直具合からいっても、もう息が止って数時間は経っている。蘇生は難しいだろうな。」

私の言葉に皆、まだ何か言いたそうだった口を閉ざす。他に出来る事はないかと頭を回転させるが、我々に出来る事は何もありません。遺体を担いで行くわけにも行かず、さりとて手厚く葬る時間や道具もない。

「どつするんだ？」

その言葉は誰の頭にも浮かんでいる。

「引き返そう。ここらが限界だ。」

私ではない誰かがそういう。多数決では間違いなくその意見が採用されるはずだ。しかし、私は一同を見回した後、静かに口を開いた。

「いや、このまま進む。」

「は？」

全員が横一列に同じリアクションを取った。

「正気か。確かに食料や道具の問題はない。しかし、この天候でもう10時間も足止めを食ってるんだ。様子を見て風が落ち着いたら、下山すべきだ。」

彼の方がまともな意見なのは十分に承知している。しかし、私には必ず頂上に行かなければならない理由があった。

「降りたい者はそうしてくれ。私に付き合う必要はない。」

私の中でも苦渋の決断だった。本当は続行する事を説得しなければいけないのだが、死者まで出してしまった以上、私に強く引き止める権利などあるはずがなかった。

「おいおい、待ってくれ。何であんたそんなに無理するんだ？、一旦引き返してまた昇ればいいだろう？、今回は運がなかったんだ。」

山の天気は変わりやすいなどと俗に言うが、今回のそれは登山経験豊富なメンバーをかなり戸惑わせた。1日置きに正反対の天候となるだけでなく、常に吹き続ける強風が我々の気力と体力を削り続けた。そして遂に、犠牲者が出ってしまった。残っている者達も既に限界を感じているのは仕方のない事だ。

「…運か…。」

俯いてにやけている私をメンバーは蔑んだ目で見下ろすと、そのうちの1人が不意に立ち上がる。

「分ったよ。俺は降りさせてもらう。死にたくはないからな。」

もう1人のメンバーが一番若い者が続いて立ち上がる。

「僕も…悪いけど…」

2人は自分のザックを背負うと風が止むのを待つ為にその場に座り込んだ。今朝も強風が吹き荒れていたが、一時程ではないし、霧のような朝靄も風に飛ばされて晴れかけていた。

最後の1人が私の横に座りなおして肩に手を置く。

「どうしても、今回じゃないと駄目なのかい？」

「ここまで来て戻ることはいできない。次はいつになるか分からないからな。」

私の力強い答えに最後の1人が諦めた様に溜息をつく。

「君が頑固なのは知っているが、今回は少し譲ったらどうだい？」

嗜める様に静かな声は風に乗って私の耳には半分ほどしか届かなかったが、それでも十二分に意図は伝わった。

「残念ですが。」

「そうか。」

最後の1人が、他の2人と同じ様にザックを背負うと、その途端朝靄が晴れて風が弱まった。他の2人も立ち上がると私を振り返る。「これが最後のチャンスだぞ。君が頂上に辿り着けないとは言わない。しかし、復路の事を考えると生きて帰ることは難しいかもしれない。生存確率を考えれば死に行くようなものだ。それでも行くのか？」

私は静かに首を縦に振る。

「分ったよ。もう何も言わない。好きにするといい。」

「それじゃ。」

「幸運を。」

3人のメンバーはそれぞれ軽く手を上げて、そのまま山の斜面を下り始めた。晴れてみると見晴らしのよい場所で3人の背中が小さくなっていく。

「さてと…。」

私は遺体の寝袋をその場に放置してザックを背負う。出発前にほんのささやかな黙禱を捧げて、3人とは正反対の方向へ重力に逆ら

つて歩き始めた。

「ん？」

ふと前を見ると山肌に晒された幾つかの岩のうちの1つに誰かが座っている。そんな馬鹿な、前人未到のこの山に我々以外にも誰かが？、いや、その存在よりも私の目を引いたのは男の格好だった。三角の帽子を深く被り、分厚いコートのようなものを着込んでいる。少しサイズの大きなブカブカの長ズボンに紐で縛るタイプの靴。おおよそ登山をするような格好ではない。

この格好でここまで昇ってきたのだとしたら、それだけで我々のこれまでの苦労を見下されているような不快な気分になる。

「…。」

私は一旦立ち止まって目の錯覚ではないかと、もう一度目を細めてその男を見直した。しかし、そいつは間違いなくそこに存在している。気持ちを落ち着かせる為に、腰にぶら下げたステンレスの魔法瓶を持って水分を補給する。しかし、それでもそいつの存在は消えなかった。

男は目線の位置が分らない程に帽子を深く被っていたので私を視認しているのかどうかは分らない。しかし、間違いなく私の存在には気づいているはずだ。礼儀の面からもこのまま無視して通り過ぎるわけにはいかないだろう。私は遠くから一礼して男に近づく。

男は座ったまま全く動かずにこちらを見ているのかどうかも分らない。いや、もしかして死んでいるのかもしれない。確かに近づけば近づく程、男から生気が感じられない事が不気味に思えてくる。

「こんにちは。」

勇気を出して声をかけると男が顔を上げた。よかった、どうやらとりあえず生きてはいるようだ。

「あの…いつからここに？」

男は何も答えない。

何なんだ…私が時々立ち止まって振り返るが、男はそれを気にする様子もなく一定の距離を置いてついてくる。別に何かをするわけでもないのに、来るなとも言えず、私は背中に不気味さを背負ったまま頂上へ向けて歩いていった。

しかし、何者なのだろう。見たところ登山の装備どころか、水筒一つもっていない。途中でなくしたとも考えにくいし…仲間割れでもして荷物を取られたのだろうか…。息一つ切らさずついてくる様子なので体力には自信があるのだろう。助けてあげたいが私の方も余裕がないし、第一意思疎通自体が困難な状況では、何もできない。「あの…。」

私は思い切ってセカンドコンタクトを試みた。

「何処までついてくるつもりか知りませんが、一刻も早く山を降りた方がいいですよ。」

私の最大限の親切心だ。男に反応がないので、やむを得ず前に向き直り再び歩き始めた。

既にかなり空気が希薄になっており、息切れの間隔が刻一刻と縮まっている。休憩を何度も小刻みに入れながら、頂上との距離を確実に詰めていく。

天気は快晴。上を見上げると青いキャンバスに吸い込まれそうな程雲一つない空だ。太陽の日差しが冷えた空気と汗で下がった体温を補完する様に照り付けている。今の瞬間は、この登山の中で最も恵まれて充実した時間だった。あそこで帰っていれば味わえなかつたところだ。

周りには人工物は見当たらない。それも、前人未踏である事の何よりの証だ。月にすら到達した人類も、この山のこの場所にはまた足を踏み入れていない。宇宙飛行士もこんな気分で月の地面に足を踏み出したのだろうか。今の私の一步は普通に街中を徒歩する一步とは重みが違う。

真上に見える太陽が午後の始まりを続けている。山では午後から

の方が天気が崩れ易い。ここから何処まで進んで休憩を取るかというタイミングが何よりも大事になってくる。背後について来ている黒尽くめの男も私と同じタイミングで休憩をとっているから体力的な事を心配する必要はないだろう。

というか、何故私が突然現れて勝手についてくる見ず知らずの人の心配をする事があるのだろうか。妙な事になったものである。

頂上に近づくにつれサングラス越しに見える山々の景色が私の不快な心を洗い流す。

頂上へ行くまでは少なくともあと1泊は必要だろう。無理をすれば登頂は可能だが、天気が崩れた場合に山頂近くで1泊するのは危険が大きい。半日ほどで頂上とベースを往復できる程度の距離で休憩する方がよい。しかし、地図には前人未到の頂上までの距離などが書かれているはずもなく。私は経験則で、最後のベースキャンプの場所を決めた。

例の男は私がテントを広げている間に近くの岩に座って私の様子をじっと見ている。気にするなという方が難しい。どう見ても、テントなど持っていないだろう。が、私のテントは1つしかないので貸すわけにもいかない。どうするつもりなのだろうと、時々男の方を見てみたが、特に何かをする様子もない。

男は岩肌に腰を降ろすとそのまま、また動かなくなった。

少しだけ風が強くなったように感じる。私には天候が変化する前触れなのだと思いついた。

やむを得ず私は、黒尽くめの男に近づく。

「これから、天候が変わって強風になります。下手すればホワイトアウトになるかもしれない。私のテントが少し広いので、そこへ来ませんか。」

今までの男の態度から、もしかしたら言葉が分らないのではと心配もしたが、男はゆっくりと立ち上がった。どうやら私の声は届いているらしい。

「どうぞ。」

私達はテントに入る。

「本当はお茶でも出したいところですが、生憎切らしてましてね。」
「……。」

男は沈黙で答えた。まあ、返答を期待したわけではないので良しとする。

バタバタとテントの幕が激しく揺れ始めた。予想通り風が吹き始めたようだ。私の予想では、このまま吹雪になるだろう。元々低かった気温が更に下がっているからだ。

「それにしても、よくその服装でいれますね。」

男の格好はおおよそこの気温に耐えられるものではない。顔色一つ変えないのは、我慢強いのか気温を感じる器官が麻痺しているのか分らないが、見ているだけで身震いしてしまう。

「……。」

男の表情からは喜怒哀楽の感情が全く読めない。

「本当はね。私も今朝まではパーティで登っていたんですよ。」

別に沈黙に耐えられないわけではないが、私も丁度話相手が欲しかった所だったので1人で話始めた。テントを叩く風からすればどの道暫く動けそうにないからだ。

「そのうちの1人が死んでしまつてね。他の仲間も引き返す様に私に言っていたんですが、私1人がどうしても譲れなくて、こうしているわけですよ。」

「……。」

「どうして私がそう頂上に拘っているのか？」

「……。」

男からすれば、私の過去などどうでもよいのかも知れないが、私は構わず話を続けることにした。明日には、もう話すら出来なくなっているのかも知れないという危機感が私の口を動かした。

「十年前に私には友人が1人いたんです。そいつとは、学生時代から一緒にいるんな山に登つた。いくつもいくつも。私なんかより体力も技術もよっぽと優れていた。私は悔しくて努力しましたが、ど

うしても追いつけなかった。この山の調査隊が公募された時には、勿論私達2人は応募しましたが、当然の如く選ばれたのはそいつだった。」

私は記憶を引きずりだしながら一言一言言葉を紡ぎだす。最早男の反応などどうでもよくなっていた。

「何、本当か？、修二。」

俺は椅子から立ち上がり机を強く叩く。

「ああ、通知が来たんだ。だが1つ問題があるんだ。」

「問題？」

「出発は半年後なんだが…。」

「それがどうした。」

口籠る修二の肩を掴んで顔を近づける。

「いや、その、予定日がその頃なんだ。」

「そうか。奥さん元気なのか？」

「母子共に健康だよ。でもなあ…。」

一度山に入ればどの位の期間で戻ってこれるのかは分らない。最長の日数は大体決まっているが、前人未到の場所ともなれば、何が起こるか分らない。リーダーの判断により直ぐに帰ってくる場合もあるが、最悪の場合は数ヶ月戻ってはこれない。

「一次調査隊の報告は俺も読んだが、最悪で3ヶ月程だろうな。」

「うん。俺もそう思う。上手く行って登頂して戻ってくるとしてもそれぐらいだな。」

「最悪の場合は…。」

「おい、弱気になって馬鹿な事いうんじゃない。」

「冗談だよ。分った分った。」

修二は席を立って廊下へと出た。

「何処へいくんだ？」

「決まった以上、準備しなくちゃな。来週の予行演習に参加するんだよ。」

「そうか。俺も行くぜ。」

俺は修二の後について行った。技術面でも体力面でもこいつに勝てた事は一度もない。悔しいが、今回選ばれたのは当然の選定だと思う。今度の本番は世界級の山なだけあって、予行演習といつても、かなり過酷なものだった。俺にとっては本番さながらの予行に付き合わされた事によって自分のレベルアップにはなったのだが…。

それからの半年の体力造りは完璧だった。別に俺は登るわけでもないのだが自分でもこのままこいつについていけるんじゃないかと思っ位自分の体力も充実していた。

「それじゃ、気をつけて。」

「ああ。」

奴は奥さんから白いハンカチを受け取ると俺の方を向いて拳を突き出してくる。

「ちよつとそれ貸せ。」

俺は奴からハンカチを奪い取るとポケットからペンを取り出して一言書き添えて返す。

「それじゃお先に。」

「ふん。直ぐに追いついてやる。」

強がり言いながら奴の拳に自分の拳をあわせる。お腹の膨れた奥さんと俺に見送られて奴はゲートを潜った。

それから3ヶ月程経ったある日…

「おい。お前に面会が来てるぞ。」

「え?」

図書室で調べ者をしていた俺の肩に突然、友人が手を置く。

「面会?」

「ああ、何か子供連れの子女だけど、お前まさか…。」

「馬鹿野郎。」

「まあ、冗談だよ。西口の受付にいるみたいだぜ。」

軽口を叩いて図書室を出ると西口へ向かう。その女性は子供を抱いてソファーに座っていた。俺の顔を見ると立ち上がった一礼する。「ああ、生まれたんですね。すみません。あいつによるしく言われていたのに、忙しくて。」

「いえ、それよりこれを。」

奥さんは一枚の紙を俺に手渡した。

「あいつ元気ですかね。」

俺は貰った紙を開きながら軽く聞いてみた。しかし、その紙に書かれた内容を見て口を閉ざす。

「…これは…。」

「昨日、その手紙が届いて…。どうしたらいいのか分らなくて…。よく見ると彼女の目が真っ赤に腫れている。タベ泣き明かしたのだろう。」

「そんな。全滅って。」

山岳隊と連絡が取れなくなる事はよくある事だ。天候や磁場の状態や無線が故障している場合もあり、我慢強く連絡を待つというのも常識の1つだ。しかし、2週間連絡が途絶えることは絶望的な事だった。予定通りなら既に登頂して下山を始めている筈だったが、誰一人戻っておらず、全滅の可能性が濃いという一連の説明が無機質に紙に書き並べられていた。

「くっ！」

俺は紙を床に叩きつけると壁に拳をぶつけた。

「あ、あの…。」

「あ、ああ…：すみません、取り乱してしまつて。とにかく共通の知人に連絡して確認してみます。心配でしょうが、3日程待つてもらえますか。何かあったら私の方から連絡しますのです。」

「は、はい。宜しく願います。」

奥さんは一礼して出口へ向かう。途中見えなくなるまで何度も振り向いては頭を下げた。この状態で3日も待てとは辛いとは思いますが、俺のつてを使つても確かな情報を得るまでにはそれくらいは最低で

もかかるだろう。一番いいのは俺自身が現地へ向かう事かも知れないが俺にも仕事を空けるわけにはいかない。

その日は電話で現地とつながりのある友人に確認する様に手配するので精一杯だった。

数日後、俺の元に来た知らせは絶望的なものだった。搜索隊が組織されて入山する事が決定した様だが、その目的は生存の確認というより、死亡の確認に近い意味合いなのだろう。元々組織された登山隊前二十名、誰一人戻って来ていない。登頂していてもしていても既に予定下山期間を終えている上に全く連絡が取れないのであれば死亡の判断も妥当な事だろう。

俺は奥さんに連絡を入れると、搜索隊に入れる様にコネをフル活用して手配する。しかし、それも何も実らなかった。

「その時の搜索隊は何一つ見つかる事が出来ずに成果はゼロ。山へのアタックも暫くは先送りになった。今回の登山までの十年、この山に誰も近づいたものはいない。」

私は長い昔話を終えて顔を上げる。黒ずくめの男は先程と何も変わらない体制で座ってじっとこちらを見ている。

「退屈だったかい？」

「…いや。」

男が沈黙を破った事は驚くべき事だったが、私は特にそれに触れずに話を続ける。

「あいつが…修二がこの山の頂に立ったのかどうか、確かめたい。もし、それが確認できればそれを世間に発表してあいつは歴史に残る。そしてもし、あいつが辿り着いていなければ、私が初登頂を果たして、奴を追い抜いた事になる。」

「そうか…。」

男は納得したのかしていないのか男は一言言い放った。

テントを打つ風が少し収まってきたのか、さっきまでバタバタと音を立てていた壁のざわつきが収まっていく。

出口から外を覗くと雲が晴れていた。しかし既に日没間近の時間帯だったので、私はこのままここで休むことにした。

「今日はこのまま休んで夜明けとともに出発する。それでいいな？」

男は私の言葉を聞いているのかいないのか既に目を閉じていた。よく考えれば私が気を使う必要はないのだ。私は考えるのを止めて目を閉じた。

目を開くと既に薄っすらとした日光がテントの幕から漏れ出している。何処か遠くから小鳥の泣き声が聞こえてきそうな程、安定した温度だ。テントの中には私しかない。あの男は何処に行ったのだろうか。

私の話を聞いて諦めて下山したのだろうか。

テントの出口を捲って外に出る。すっかり雪は溶けて、昨日の視界が嘘の様に晴れ渡っている。薄い空気が肌寒さを訴えていたが、私はそれより、目の前に見えた風景に神経が集中した。

「ま、まさか……」

もう少し距離があると思っていたのだが、まさか、こんな近くにあるとは……

歩いていけば百メートル程だろうか。澄み渡った空をバツクに間違いないその頂は存在した。いや、頂そのものがある事は分っていたが……

「あいつ……」

頂に立っている旗は間違いなくその地が前人未到ではない事を物語っていた。私は歩いて旗に近づいていく。その旗には何の模様もない。そしてそれはかつて修二が出発する時に持っていたハンカチだ。旗、いや、ハンカチの隅にサインされている修二の文字は間違

いなく奴の筆跡そのものだ。

「そうか。やっぱり私は彼には追いつけなかったのか…。」
空を見上げて大きく深呼吸をする。たとえ初ではなくとも一番高い所というのは気分がいいものだ。

私は周辺の山々を見下ろす。ついでにあの黒ずくめの男も探したが周辺には誰もいない。

「ふふふ、こんなに近いんだ。私が2番目ではなくて3番目になってしまったかもしれないな。」

本人がいないのでは既にそれを確かめる術はない。しかし、今の私には2番目だろうが3番目だろうが、そんな事はどうでもいい事だ。

「ん？」

ふと下を見ると地面を掘り返した後を見つけた。私はしゃがんでその土を少し掘ってみた。土質が硬く中々てこずる。地質調査の為に誰かが掘り返したのだろうと思ったが、指に何かが当たった。

「何だ？」

石ではない。掘り返してみると何かカプセルのようなものだった。修二か誰かが何か埋めたのだろう。と言っても、ここに来た人物は限られるが。とりあえず取り出したカプセルを開けてみた。特に鍵が掛かっていたわけでもないのでそれはあっさりと開いた。

「これは…？」

中に入っていた数枚の紙。広げると中には私の国の文字で何か長文が書き綴られていた。その筆跡は間違いなくハンカチのサインと同じものだ。

「手紙…か？」

「この手紙を君が受け取る事を願ってここに残す。まず、子供に会えない事は残念だが、仕方ない。それより、君がここに来たという事は、既に死神に会っていると思う。」

「死神…？、何の話だ？」

「俺達は、登り始めて2ヶ月程は順調だった。しかし、途中で原因

不明で1人仲間が死んでしまった。他の者達は下山する事を主張したが、俺にはどうしても頂が直ぐ近くにあるような気がしてならなかったからそれに反対した。食料問題や他の者の体調がすぐれないのであれば仕方ないが、奴等はただ仲間の死に怖気づいたただけなのだ。」

「…相変らず頑固な奴だな…。」

私は苦笑いしながら手紙を読み進める。

「仲間割れをして俺は山に残った。そして食料を持って仲間と袂を分かった。俺の計算では歩行で1日以内に辿り着ければ、多少の足止めを食っても必ず下山できる計算だった。そして、思い通り、頂に向かつて半日後、奴が突然現れた。そいつは上から下まで黒一色の服を纏って岩肌に座ってこちらを見ていた。山の麓に住む民族に伝わる死神の姿そのものだった。昔から、山に近づくものに死を与えるという伝承を聞いた時には、お化けなんて信じた事もない俺でも少しは背筋が寒くなったもんだ。」

「伝承？」

そんな事もそう言えば聞いた事があるな、ただ私はよくある話だと記憶からすっかりそんな事は削除していた。黒一色の服装…、この地にそんな格好で現れた不自然さには勿論違和感はあるのだが、まさか…。しかし、死神だと考えると説明はつく。いや、非現実と人は思うだろうが、山での過酷な出来事も私達には同じような非日常だ。

「しかし、奴は特に何もしなかった。俺の後ろからついてくるだけだ。俺はそれに慣れてしまい。話し相手として、利用した。そして俺は遂にここに辿り着いた。俺は暫く、この素晴らしい景色を堪能した。ここから見える景色、こここの空気、そしてこここの土、その全てが素晴らしいものだ。唯一の気がかりはここから下山する体力が残っていない事だ。君がこの手紙を見ない事を祈る。」

「もう、見てるよ。」

俺は呟きながら最後の一枚に目を落とす。

「もし君がこの手紙と死神を見ているのなら、それは残念な事だ。助かるかどうかは分からないが、一刻も早く山を降りるんだ。ハンカチは形見として妻と子供に渡してくれ。」

手紙の最後の方の文字はかなり乱れていた。修二の奴がどういう気持ちでこの手紙を書いていたのかが、伝わってくるようだ。少なくとも山にいる間の奴は誰よりも冷静な奴だった。

私は顔を上げて周りを見渡す。しかし、死神は見当たらない。昨日まで確かに私はテントの中に死神がいたはずだ。

「早く降りるか…。だが、私は目的を達成したんだ。ここで死ぬのも悪くない。」

ふと顔を上げた俺の目にハンカチがたな引いている。

「あ…。」

奴のサインの少し上に消えかけた文字が不意に浮かび上がった。

それは十年前に私が彼に送った一言。

「生きて帰ってこそ達成。」

その文字は確かに今までそこになかった。安物のペンで書きなぐったその文字は風雨に晒されて消えていた筈だったのに…。

「…分かったよ。」

まだ修二はそういう意味では何も達成していない。生きて帰ってこそその達成。昔読んだ本で誰かが言っていた言葉を何気なく書いたそれが今やっと自分の血肉になった気がした。

そうだ。ここで私が生きて帰れば…。あいつの夢、いや、私の夢でもある目標が達成できる。いつか誰かが達成するかもしれないが、今、私はその切符を握っているのだ。まだ、食料は十分にあるし、まだ体力にも少し余裕がある。天候と雪崩などまだ危険は十分に残されているが、生還できる可能性は高い。

「やればいいんだろ！」

私は誰に言うともなく呟く。いや、あの消えた文字を浮かびあがらせた修二の魂はきつとここにいるはずだ。

「一つだけ…。悪いけど、このハンカチはここに残していくよ。君

が行きで私が帰りとはいえ、ここに辿り着いた証だからな。代わりにこの手紙を貰っていく。」

俺は手紙をポケットに入れると後ろを振り返った。

「…！」

そこには、死神が無表情な目をこちらに向けていた。

「もう、あれから二十年か…。父さん。」

若者は、頂上に刺してあったハンカチを手に取ると、その片隅のサインを見て涙ぐんだ。背後に立っていた仲間の1人が若者の肩に手を添える。

「良かったじゃないか。そのハンカチは父親の形見なんだろう？」

「ええ。修二のサイン。間違いなく父親のもんです。母さんも喜ぶぞ…。」

若者は嬉しそうにハンカチをポケットに仕舞いこむ。

「写真も取ったし、後は土を採取するくらいだな。」

「はい。ん？」

若者は足元の土が少し盛り上がっている事に気づいて、しゃがみこんだ。

「どうした？」

周りの数人の仲間が集まってくる。

「何か埋まつてる。」

若者は土を掘り返して、何かカプセルのような物を掘り起こした。

「何だこれ？」

それは少し力を入れるとあっさり開いた。中には数枚の手紙らしきものが入っている。皆が見守る中で若者は手紙を黙読する。

「親父の字かな…？、誰かに宛てたものだ。」

「いや、内容からすればそうなる。凄いな二十年前の手紙だよ。」
背後から一緒に黙読していた1人が感嘆の声を漏らした。

「そうだな……。」

若者も手紙の内容を見てそう確信したようだった。写真でしか会ったことのない父親に手紙だけでも再開できた事で涙ぐむ。

「あれ？」

「どうした？」

最後の一枚を捲った若者の声に仲間が反応する。

「この一枚だけ違う字だ。」

「違う字？」

最後の一枚は確かに紙の質や筆圧が明らかに違っている。

「もしかして、十年前にこの山で行方不明になった。親父さんの友達じゃないか？、ここに来た可能性があるのは、その人しかないぞ？」

「ええ、僕もそう思っていました。」

「何て書いてあるんだ？」

「えーと……。『私は今から山を降りる。この手紙も持って帰ろうかと思ったが、死神を見てしまった以上は私は助からないだろう。もしこの手紙を読んで、死神を見ていない者がいれば、ハンカチと手紙をここに届けて欲しい。』」

紙の一番下には、若者のかつて住んでいた住所が書かれてあった。

「死神って……。」

「お前の親父さんの手紙にもそんな事書いてあったな。」

若者の手が少し震える。

「どした？」

「さっき、そこで黒づくめの男に会っただろ？」

「ああ、おいおい、お前まさか。こんな事信じてるのか？、そりゃ気持ち悪い奴だったけど、死神なんかいるはずないだろ？、笑わせんな。」

仲間は若者の心配を一笑した。

「昔は、大変だっただろうが、今の近代装備じゃ、この山も昔程は難関じゃない。さあ、写真を撮ったら帰るぞ？」

「は…はい。」

手紙をポケットに仕舞いこんだ若者が振り向くと、少し離れた岩肌
に黒づくめの男がじっとこちらを見ていた。

水

「全く…何でこんな事に…。」
「まあ、そう言っつなよ。こんな体験は滅多にできるもんじゃないぞい。」

白髪の教授は嬉しそうに三角フラスコを揺らした。俺は椅子に浅く腰掛けて、さっきから部屋の片隅からじっとこっちを見ている黒ずくめの男に視線を合わせる。

「一生したくなかったよ。」

「じゃが、バイト代はちゃんと払っただろう。」

「そっという問題じゃない。」

その時丁度、教授の手の中のフラスコから紫色の怪しい煙が噴出した。俺は丁度窓際にいたので急いで換気する為窓の鍵に手をかける。

「おっと、開けるなよ。」

「何でだよ。」

「秘密の実験じゃからな。」

何が秘密だ…。

しがない大学生の俺が金に目が眩んで、このマッドサイエンティストの実験の被害者になったのはほんの数日前だった。

元々変わり者として学校内では誰も近づかなかった名物教授だという事は入学した当初から先輩達に聞いていた。俺も別に科学なんぞに興味はないし、同じ学校内にいても特に顔を合わせる事なく平穏な生活を送るはずと思っていた。数日前に廊下に張り出されている張り紙を見るまでは…。

「とにかく早く解毒剤作ってくれよ。俺はもうこんな生活は嫌なんだよ。」

「人生何事も楽しまないといかんぞ?」

俺はこの部屋にいる間、何度もこいつを殴りそうになった。

「兎に角、早くしてくれ。金は返すからさ。」

悔しいが今はこの変態教授に解毒剤を頼むしかない

「そう焦るな。人生は長いぞ。」

こいつは人の話を聞いているのだろうか。この数日間の地獄を考
えると焦るなという方が無理だ。

「もうこんな体は嫌なんだよ。もしかしたら他に何か副作用がある
かも知れないだろうが。」

副作用という言葉聞いた瞬間に教授は顔を赤らめて俺の方に向
き直る。

「ワシの薬は完璧だ。そんなもんあるはずがない。」

俺は怒りを通り越して呆れかえる。副作用がない？、よくまあそ
んな事が言えるものだと腹を抱えて笑い出しそうになった。

「あのね。いいですか？、もう一度見せますけど、痛いからこれが
最後ですよ。」

「何を？」

俺は教授の問いかけを無視して席を立ち、近くの蛇口まで行くと
水を流した。

「いいか、よく見てろ。」

真っ直ぐ真下に流れ出る水に腕を伸ばして少し触れさせた。

「ぐう……。」

激痛が走り、思わず呻き声が漏れる。そして、それと同時に水に
触れた俺の腕が煙を上げて水に溶けていく。これ以上はまずいと直
ぐに腕を引つ込めた。

「ほお！」

教授はそれを見て感心した様にずれた眼鏡を真っ直ぐな位置に戻
した。

「ほお！、じゃないよ。さっきも一度見せただろ。これで俺が嘘を
ついてない事が分つただろ？、このままじゃ日常生活が出来ない。

元に戻してくれ！」

「ふむふむ……。」

まだ煙を上げている俺の腕を教授は手にとって眺める。さつき、同じ事をして見せた時には大してリアクションが無かった癖に大した役者だ。

「水に触れると溶ける体…か。これは世にも奇怪な。どうしてこんな事に？」

教授…と呼ぶのもメンドクサイ、この爺め。

「やかましい。そりゃ少しは知りたいけど、今は一刻も早く元に戻りたいんだよ。何とかしてくれ。」

「ふーむ。」

他人の話を聞かない事がこんなに人をイラつかせるものなのだと、この時の俺は生まれて初めて痛感する。これからは、この爺を反面教師にして人の話は聞くようにしよう。それはそれとして、兎に角今はこの体を正常な状態にする事が何より急務だ。

「…で、お前は何なんだ！」

これ以上教授に関わっていたら血管が切れそうだったので、怒りの矛先を部屋の片隅にいる黒ずくめの男に向けた。この爺とは何の関係もないと思うが、俺がこんな体になってからというもの行く先々で見かける様になった奴だ。

いつも俺に視線を向けているので一度、「何か用ですか？」と、話しかけた事があつたが見事にシカトを食らつたので、それ以来こちらも無視する様にしていた。警察に連絡すればと友人に言われたが一つ問題があつた。

「お前、誰と話してるんじや？」

顔を上げた教授が俺と同じ目線の先の部屋の隅と俺の顔を交互に見ながら目を丸くしている。

「何でもありませんよ。ストレスで見えるはずのないものが見えてるもので…。」

「それはお大事に。」

素っ気無い反応の後、教授の興味は再び俺の方に戻る。しかし、よくまあストレスの大元がそんな反応できるものだ…。もう溜息一

つけないよ。

と、この様に俺以外の人には全く見えならしい。友人にも、この爺と同じ反応をされたので、「原因はストレス」という風に結論付けた。

大体警察に「ストレスで見えないものが見えるんです」と通報した所で、何処かの病院を紹介されるのが関の山なので、俺は無視を決め込んだ。恐らく体が元に戻れば、このくだらない幻想も消えてなくなる筈だ。そう、全ての原因はこの爺の作ったわけの分らない薬から始まったのだから。

「成程な。大体分ったわい。」

ようやく長い思索から覚めたのか、教授が顔を上げる。

「やっと分ってくれた？、で、解毒剤は？」

「無い。」

「…。」

あまりの衝撃の答えに俺はリアクションを忘れた。頭の中が真っ白になり、1分程、呆けた俺と教授は目を合わせたまま時が止まる。「ふざけるな！」

実験室に響き渡る声に教授がとっさに耳を塞ぐ。

「落ち着け。」

「こんな事落ち着いてられるか。この体で一生いると？」

「そんなに心配せんでも、薬の効き目は1ヶ月じゃよ。」

1ヶ月…。長い、長すぎる。

「そ、そんな、せめて、それを短くする薬とか作れないのかよ。1ヶ月もどうしろってんだ。」

「そんなに心配する事はあるまい。1ヶ月、水にふれなきやいいんじゃないよ。飲むのは大丈夫なんじゃろ？」

この爺は俺が怒り心頭な事を理解しているのだろうか。いやしていいまい。

確かに飲む分には何も無い事は確認済みだが、風呂はどうする？、顔も洗えないぞ。いや、それより、窓の外で降っている雨は？

「まあ、そう言わんと落ち着け。座ってテレビでも。」

教授は実験室の隅にある、思い切り旧型のテレビのスイッチを入れる。少しぼやけた画面に、よく見る顔のニュースキャスターが映り、彼女の背後には天気図が見えた。

「おい…マジか？」

俺の目がおかしくなければ、そこに映っている大きな円形の低気圧は、例のあれだ。今の俺の体には何よりの天敵。雨水とあらゆる方向から体に叩き込む例のあれだ。心なしか、窓の外の風の音が次第に強くなっている様に感じる。

シトシトした雨は元々降ってはいたが、風がそれに加わると話は変わってくる。横殴りに叩きつける様な雨の中、傘1本では家に帰り着く事は不可能だ。

「冗談じゃない。どうしてくれるんだ？」

振り返って教授に詰め寄る。

「合羽ならあるぞ？」

爺は、実験室の片隅にあるロッカーを指差して苦笑いする。

「うーん。」

目を覚ますと実験室の片隅のソファで寝ていた。少し頭が痛い。あれ？、何で俺はこんな所で寝ているんだっけ？

昨日の出来事が、大昔のテレビのスイッチを入れた時の様に、少しずつぼんやり形を成していき、やがてそれが完全な形となる。

結局、不本意ながら実験室に泊ったのだった。周りを見渡すと誰もいない。

「くそ。妙に頭がガンガンするな。」

昨日は間違いなく酒など一滴も飲んでいないはずだが…。

これは予想でしかないが、おそらく大気中の水分が寝ている間に少しずつ俺の体にダメージを蓄積させていったのではないかと思

う。でもなければ、この頭痛の説明がつかない。

俺は一旦ソファに戻り深々と座ってテレビを睨みつける。まだ電源すら入れていない。

黒いブラウン管に映る自分の酷い顔などあまり見たくもないので、リモコンを探そうと周りを見渡した。

「！」

昨日と全く同じ位置に同じ人物がいる。

「アンタ、一体何なんだ？」

普通に考えればこんな不気味な事はないのだが、今の俺には自分の境遇への怒りが勝っているのか、全く恐怖の欠片も感じずにこの男に怒りをぶつける。それに、最初は少し覚えていた畏怖の感情も、こいつの姿を見慣れてくるに従って次第に消えていった。

ここ数日、実験室だけでなく、図書館や映画館などの一般施設から、果ては飯を食いに入った飲食店まで、所構わずに俺に付きまとっている。自分で言うのも何だが、俺は人に恨みを買うような事は何一つしていない。むしろ今は逆に人に恨みをぶつける側の人間だ。現れた時から何を言っても答えない。一度警察を呼んだ事があるが、駆けつけてきた警官は、不思議そうに俺の周りを見回すだけだった。

「何だ？、誰もいないじゃないか……。私も暇じゃないんだ！」

そう言うって逆に怒られてしまう始末。昨日の教授もそうだが、こいつはどうやら俺にしか見えていないらしい。

昔から、こういう類の怪奇現象は全く興味がなく、基本的には信じないのだが、こうまで鮮明に露になると、俺にとっては性質の悪いストーリーカーと何ら変わりがない。せめて何のつもりでここにいるのかをはつきりさせてくれないと、気になって仕方ないという想いだけが、心に引っかかっていた。

「くそ……返事なしか……。」

期待しても仕方ないので、俺は諦めて廊下にある水道の蛇口まで顔を洗いに……。いや、駄目だ……。水道の蛇口を捻ると同時に、自分の

今の状態を思い出して、誰に見せるともなしに首を横に振る。

「あつぶねえ…。」

1人呟きながら、ポケットから出したハンカチを少し湿らせて顔を拭く。本当はこれでも少し皮膚がヒリヒリするのだが、仕方ない。よく考えてみれば、教授は1ヶ月で直るなんて言っていたが、そんな保障は何処にも無いではないか。一生このままであればまともな社会生活が送れるはずもないではないか。何もせずに、ただ1ヶ月待つだけなどとても出来そうにないので、今日は教授が来たら、昨日以上に詰め寄って元の生活に戻らなければと、強い決意を抱く。

「よし！」

鏡を見て両頬を掌で叩く。まだ気力は何とか残っているようだ。

「さてと…。」

黒ずくめの男に気を取られて気づかなかったが、窓の外は朝にも関わらず薄暗い。昨日の台風が暴風域に入っているようだ。グウーと腹の虫が空腹を知らせるが、今は外に出るわけにも行かず、俺は実験室に戻った。

「あー！」

壁のカレンダーを見て今日が祭日だった事に気づく。下手をすれば教授どころか誰一人この建物にはいないし、今日は誰も訪れる事はないのだ。

「くそっ…。」

ソファーに座ってテレビを睨みつける。天気予報で、キャスターが笑いながら、

「午後には晴れます。」

と、断言していた。

こんな憂鬱な日には過ぎたグットニュースだった。

「仕方ないな。午後まで寝てるしかないのか。」

そう結論付けるとソファーでごろつと横になる。窓に叩きつける大粒の雨が、まるで戦場に飛び交う弾丸の用に俺を狙って誰かが乱れ打ちしているかのようだ。

無駄に怒ってエネルギーを消費したからだろうか、俺は直ぐに眠くなった。これも夢であればいいのという考えが頭を駆け巡る。あと数秒で睡眠状態だったであろうその瞬間…。

ガシャーン！

鉄骨で飾り気の全くない実験室に響き渡る甲高い音。俺は直ぐに目を開いて床に転げ落ちる。

雨粒の弾丸が俺を狙って窓ガラスを破壊する音だという事は瞬間的に分った。俺のいた窓際のソファァーに水分が染込んでいく。

「アブねえ…。」

寝起きの運動は体にあまり良くはない…などと考えながら俺は窓から距離を置いた。台風の暴風域の中では雨はほぼ横から降ってくる。遮るものの無くなった雨粒は俺に向かって容赦なく飛んでくる。俺はただそれを見ているわけにも行かずに、辺りを見回して傘を探した。

それらしきものが無かったので仕方なく教室の隅で暫く待つことにする。時計と空を交互に眺めていると、いつの間にか、雨は小ぶりになり始める。俺は座ってウトウトし始めていた。

朝、目を覚ます為に洗面器一杯に溜めた水で顔を洗うという一般的な習慣が俺にはある。いつもの癖でうっかりそれを実行しそうになったが、洗面器に手を入れかけた時に自分の置かれている状況を感じ出した。

「くそ…。」

ビニールの手袋をしておいてから、タオルを濡らして思い切り絞る。それで顔を拭くと肌がヒリヒリする。逆にこの刺激で目が覚めるくらいだ。何とか顔を拭き終わると部屋に戻った。

「や」と…。」

もうこの体になって十日は経つ、教授の話信用するとしてまだ

二十日程の気の遠くなる日々がこの先に待っている。安いアパートの部屋は、この前の台風の日から、かなり湿っぽくなっている。大気中の水分が増えれば夜などは特に体がヒリヒリと痛み出す。

まずはそれを何とかしなくてはなるまい。

外出着に手早く着替えると靴を履く。部屋を振り返ると隅にいる黒ずくめの男がこつちを見ている。

「出かけるぜ。ついて来ないのか？」

「…。」

いつも通りの沈黙。数日前からとうとう家にまで現れるようになっていたのだが、特に何をするでもなく。部屋の片隅に座っているだけだ。

「まったく…。」

外に出ると雲一つない快晴だった。今日は傘を持って行く必要は無さそうだ。たしか、駅前に大型電気店が新しく出来ているはずだ。駅までの道のりをテクテクと歩く。金に目が眩んだせいでとんでもない事になってしまった。

今は戻ってくる日常を信じて出来る事をするしかない。しかし、いい天気だ…。ふと後ろを見ると、天気のように晴れていた気分を害する黒ずくめの男が一定の距離を置いてついて来ている。

ここ数日、こいつについて幾つかの事が分った。どうやら俺以外には見えていない。そして、いくら部屋に鍵をかけても出入り自由。そして実害は何もなく喋らない。こういうオカルトチックな事は嫌いではないが、自分の身にこういう事が降りかかってくると好き嫌いという問題ではない。

「どうしたものか…。」

ひとりごちている間に電気店に到着した。店内に入ると平日だからか、客と店員が同じくらいの人数でまばらに歩いている。案内版を見ると、どうやら目的のものは一番上の階にあるようだ。

空いているエスカレーターに乗り込むと上の階を見る。いつの間にながったのか黒ずくめの男が俺を見下ろしていた。既にこういう事

には慣れていた。結局こいつは幽霊か何かなのだろう。

除湿機のコーナーに行くと、いくつかの製品がまるで芸術品の様に展示されている。俺はこれまでこんなものを買った事がないので、どういふものがあるのかまるで分らない。一応パンフレットを手にとって一通り眺めてみると、どうやら機能的にはあまり差が無いようだ。値段の大きな差はデザイン的な事に理由があるようだ。

あの安アパートにはデザインの良い品を置くのはちょっと違和感があるので、一番安い品を買うべきだろう。第一、この体質が直るまでの間しか使わないつもりだからそれまでもてばいい。

手続きをしている間、俺はベンチに座って一息つく。

「面倒な事になったなあ。」

ふと横を見るとベンチの反対側の端に例の黒ずくめの男が座っている。視認するまで気配を感じないのは、いつもの事だ。

「なあ、あんた普通の人間じゃないだろ？」

「…。」

返事がないのも慣れてきたとはいえ、ここはちゃんと答えて欲しい。

「何で俺について回るんだ。俺はただの貧乏学生だぜ？、まあもつとも今は、人間らしくからぬ状況にはあるけどね。」

「…。」

はたから見れば、この男もみえていないから、ただ俺が一人事言っているようにしか見えないだろうが…。

「何とか言ってくれよ。せめて名前だけでも名乗ってくれ。」

「…。」

俺の言葉だけが虚しく空中に消えていく。会話を諦めてベンチを立って商品を受け取ると店の外へと向かった。空を見上げると、店に入る時には無かった怪しい雲が空を覆っていく。

「おいおい、マジかよ。」

俺はそこそこの大きさと重さの荷物を抱えて全速力で家へと走った。実は流れる汗も肌を少しヒリヒリさせるのだが…。まったく、

どうなっているんだか…。

「教授、いるか？」

壊れるんじゃないかと思えるくらいに乱暴にドアを開く。相変らずの研究室の中は煩雑に器具が置かれていて、他では味わえない独特の匂いが充満している。

「換気くらいしろよ。」

ここ一週間で、俺は空気が読める用になっていた。といっても世間一般の雰囲気を読むとか、そういう意味ではなく、物理的に空気が持つ濁りや湿度感が肌で判定できるようになったというだけの事だ。

「いないのか？」

遮光率の悪い安物のカーテンと窓を開くが、教室の中には教授の姿は見当たらない。ここに来るまでに、教員室に寄ってみたのだが、他の先生方は、教授の姿をここ一週間ばかり見ていないという。

以前から変わり者で1週間程度なら講義すらサボってここに籠る事も珍しくなかった名物教授だから、1週間程度に姿が見えないくらいでは、誰も気にしなかったのである。窓を開くと心地良い風が肌に染みる。

今日は快晴で、特に湿度もそんなに高くない。俺にとっては、後2週間ばかりこういう天気が続いてくれれば、何の問題もなく、この体からオサラバできるのだが…。

「いないのか…。」

夕日に照らされた教室内には、俺ともう1人、黒ずくめの男が隅っこに立って俺を見ている以外には誰もいない。

「しょうがないな。少し待つとするか。」

ここに来た目的は、万一に解毒剤を作っている可能性に掛けてみたくなったというだけの事である。ただ、元々の薬自体が怪しいの

に、解毒剤を信じる根拠は何もないのだけれど……。それでもワラに
すぎる思いで、来てみたものの、見事に肩透かしを食らった次第で
ある。

俺はソファ―に寝転がると、天井を見上げて溜息をついた。

「はあ……。」

開いた窓から心地良い風が吹く。ここ数日は晴れの日が続いてい
い感じに乾燥している。まあ、元々こんな目に合う前からジメジメ
した空気は好きではなかったのだが、除湿機を買ってからには中々体
の調子も良い。

ウトウトと瞼が重くなる。なんだかんだ考えているうちに時間が
過ぎていく。廊下からは足音の一つも聞こえず、教授が戻ってくる
気配はなかった。

「まったく、どこ行っただ？、もう帰ったのかな。」

本当は自宅にでも押しかけたいくらいだが、そこまでするのも面
倒だ。

仕方なく帰ろうとする俺の目に、小さな紙切れが飛び込んでくる。
事務機の隅においてあるその紙切れが妙に気になった。

俺はこう見えて直感などという類のものは信用しない。しかし、
この時は何故かその直感が働いたのか、何気にその紙切れを手に取
った。

開いてみると、汚い字で何かを殴り書きしてある。

「水、公式、回避、不可能、死神……」

幾つかの単語が並んでいたが、俺が読めたのは、それだけだった。
何を意味しているのかは分らない。単語一つ一つは、解釈できても、
この紙全体で読んだ者に伝わるメッセージは皆無だった。

しかし、読める単語を繋げて読めばあまりいい感じはしない。ま
あ、元々教授の考えている事など理解しようとするだけ時間の無駄
だ。

振り返った俺の目に黒ずくめの男が飛び込んでくる。またしても、
俺の直感が働いてそいつに向かって思わず呟いた。

「お前：死神か？」

「…。」

そいつは相変わらず何も言わずじっとそこに立っている。そして俺はもう一度紙切れを見た。比較的科学的な単語が並んでいる中で、「死神」という単語は一際異形を放っている。何故か、この単語だけが、特に丁寧な書かれていた様な気がしていた。

振り返った俺の目に飛び込んできたそいつの表情は、少し笑っているようにも見える。

「お前：教授をどうした？、まさか、殺したんじゃないだろうな？」
俺は後ずさりしながら、そいつから少しずつ距離を取る。

「さあな。」

男の低い声が、まるで地獄の底から俺の脳に直接呼びかけてるような声が確かに聞こえた。しかし、ようやく聞こえたその声も、明瞭な意思を表すものではなかった。どこか空虚で命そのものの呼吸など感じられない。俺は本気でこいつが死神なんだと思った。

「俺は…死ぬのか？」

もし、死ぬとしたら原因など一目瞭然だ。あと2週間に迫ったゴールが遠ざかったように思う。いや、その前に、こいつに殺されるのか。

「くそ、俺もただでやられるわけにはいかないぞ。」

そう言いながらも後ずさりは続いた。そのまま窓際まで来ると窓を開いて奴が何か言おうとするのを少し待った。2週間目でようやく取れたコンタクトは、俺の好奇心を刺激したが、それよりも命あつてのものだねだ。

ここは1階なので窓から飛び出せば、逃げる事は可能であるが、よく考えれば、こいつは、俺の家を知っているし、第一本物ならば、果たして逃げられるものなのだろうか…。

俺は漫画や小説に出てくる死神というイメージを膨らます。間違いないくこいつはその要素を色々と満たしている。俺みたいな奴はともかく、科学の権化みたいな教授が、なぜそんな単語をメモしたり

したのだろうか。

紙切れに書いてあった2文字の単語が、俺の背筋を凍らせる。

「まさかな…。」

思考が一巡して考えるのをやめた。信じようが信じまいが現実には奴は目の前にいるのだ。そして、俺はあと2週間程で自由に普通の生活に戻れるのだ。

2週間後の自分を想像して「普通である事」の素晴らしさを考える事で俺は目の前の現実から気持ち的に逃れられたような気がした。それから教授はやがて行方不明という事で学校側から警察に届けが出された。自宅も強制捜査されたが、結局、行方は分らないままだ。

聞いた話だと、自宅には作りかけのカップ麺があり、風呂場には服が脱ぎ捨ててあつたらしい。そして、シャワーの水が延々と流れては排水溝に吸い込まれていたそうだ。

「な…。」

津波警報がテレビの画面に踊る。今日、1ヶ月目でこのふざけた魔法は解けるはずなのだが、俺には2つの不安があった。一つは部屋の隅に座っている死神の存在。そして、教授の言った1ヶ月で薬の効果が切れるという言葉。

まだ試してはいないが、恐らく俺の体は正常な体に戻っているはずだ。洗面所で顔を洗えば1発で分る事だが、まあ、ここまですれば、1日くらいの猶予をおいてもいいくらいに考えていた俺にとつてこのニュースは晴天の霹靂そのものである。

「くそ。」

災害に対する備えなど一切考えていなかった1ヶ月前の俺とは違う。こんな時の為に逃げる準備くらいはしてある。外は、雨こそ降ってはいなかったが、怪しい雲が空を覆っていた。簡単に荷物をま

とめて外へ飛び出すまで約5分。我ながら要領の良さに驚いた。街の人達は既に避難を初めており、高台へ向かっている。

自転車などの乗り物は一切持っていないだったので、とにかく走るしかない。俺も皆と同じ方向に全力で走り出す。家から飛び出す時に、部屋の片隅にはまだ死神が残っていたが、まあ、あいつは放っておいても問題はないだろう。

携帯ラジオでの情報では、津波の到達までまだ1時間近くあった。高台までの距離と俺の足を考えると十分余裕はあるはずだ。

周りは家族連れや近所の喫茶店のマスターなど顔見知りもちらほらいて、皆、普段見せたことのない様な表情で必死に高台を目指している。

差し掛かった交差点では、警官が交通整理に追われていたが、彼ら自身も逃げないといけないので、何となく落ち着かない様子だった。混雑する車を捨てて走り始める者もちらほらと見える。

比較的大きな街ではないので何とか大混乱という程でも無かったが、それでも、災害の恐ろしさを十分に物語っている。耳元のラジオでは、落ち着いたキャスターの声が災害情報を冷静に伝え続けていた。

「津波は高さや勢いを増して沿岸部に向けて進んでおります。」

勢いを増して……。避難中にいつの間にか最初の想定の高さの倍程に膨れ上がっている。俺は、生まれてこの方、津波などというものは、映画のCGでしかお目にかかったことはないが、それでも、頭の中に湧いているイメージは、本物と然程差分はあるまい。何とか高台の麓に到着して階段を見上げた。割と広い階段だったが、人で埋め尽くされている。パニックになる人を警官が宥めている場面もちらほらと見える。

俺自身は、特殊な事情で他の人の倍くらいはパニックになっていたのだが、列を作って並んでいる人を見ると何も言えなくなり、その最後尾に並んだ。

「お前等は、所詮水を多少被っても死にはしないだろう？」

と、心の中では叫んでいたのだが、こんな特殊事情を説明したところで相手を納得させるのには時間がかかり過ぎるし、こんな時だからこそ、信じてもらえる自身もその弁舌もなかった。

何故かこんな時なのに俺は周りを見回して、黒い服を探す。似たような体格で黒い服を来た人もちらほらいてドキリとしたが、俺がこの1ヶ月ずっと見てきたあの男は見当たらない。もっともこの人混みの中では普通に探す方が困難なのだが。

「すみません。うちの子を見ませんでしたか？」

取り乱した母親が子供を捜す声が聞こえる。無理も無い。この状況ではよくある事だが、力になれそうもないだけに、悲痛な声が耳に痛い。

暫くして何とか階段に足をかける。時間的には全く余裕はないのだが、止むをえない。周りの人々も今出せる全力のスピードで階段を駆け上がっている。

「くそ……」

思わず舌打ちしたもののどうしようもない。

不意に大粒の通り雨が体を叩いた。

「！」

一応合羽を着込んでいたものの1ヶ月も怯えていた水に体を叩かれるというのは気分の良いものではない。合羽のフードを深く被って何とかやり過ごす。今の所体に水滴がついていないのか、体質が直ったからなのか全身の何処にも焼けるような痛みはない。しかし、それを確認する余裕はもろろん無かった。

ようやく階段に足が掛かると加速度的に人の群れに押し流されるように駆け上がる。不気味な地鳴りが体を振動させていたが、今はそれに耳を貸している場合ではない。何の保障もないが、とにかくこの階段を駆け上がるしかないのだ。

乗り物を持っている人は既に街から退避するという手段とっている人も大勢いる。ここにいるのは、俺のように乗り物を持っていないために短時間で遠くには逃げられない人々が多い。老若男女、様

々な人がいたが、人間危機感を感じるとここまで力が出せるものかと思える程、皆力強く階段を登っている。

いつの間にか薄暗くなってきた。今が何時なのか分らない。俺は腕時計など持っておらずいつも携帯電話で時間を確認していた。しかし、ポケットから取り出した携帯電話を開くと画面が真っ暗なままだ。電源ボタンを押しても何の反応もない。

「こんな時に限って…。」

電池切れの役に立たない携帯をポケットに戻す。ふと上を見上げると、ようやく丘の頂上が見えてきた。これで何とか助かった。

そう思った俺の目に飛び込んできた黒い服。奴だ…。

「なっ…。」

「おい、止るなよ!」

背中にぶつかつた人から、俺に向かって罵声が飛ぶ。一瞬立ち止まつた後、俺は再び階段を上り始めた。しかし、上を見ると奴の姿は消えていなかった。気のせいなどではなく、冷たく俺を見下ろしている。見慣れている筈のその目は、今は俺の背筋を凍らせるだけの威力を持っていた。

その目が俺を焦らせたのか…。登り慣れていない階段を俺はあっさりと踏み外した。

「あ…。」

それが俺の記憶の最後の一言だった。後の事は何も覚えていない。「何やってんだ!」

「うわああ!」

「馬鹿野郎!」

誰が誰に向かって話しているのかすら分らない。耳の中に入ってくる罵声を浴びながら俺は体に激痛を伴って気を失った。ただ悔しいのは、その激痛が階段に体を打ち付けた、人間本来の痛覚によるものなのかどうか分らなかつた事くらいだ。

ファントム(前書き)

この物語はフィクションです。名称や人名は実在の人物とは何の関係もありません。

フアントム

俺には友達がない。

高校に入ってからとかではなく、幼稚園、小学校、中学校と見事にゼロである。数える必要もなければ、今後増える予定もない。自分としては、今のところ楽で良いとしか考えていない。

別に人と話すのが苦手だとか人間として何か欠陥があるということも特になく、誰かに迷惑をかけたこともない。一人の時間が苦しいと思つた事もなく、誰かに話したいエピソードも別にない。

チャイムが鳴ると騒がしくなる教室をよそに席を立てて教室を出た。片手には、朝コンビニで買ったサンドイッチと珈琲牛乳の入った紙袋を持って。いつもの屋上の特等席に向かって階段を気だるい歩き方で昇る。

この学校は屋上は立入禁止なのだが、入学してすぐに校内に一人になる場所を探していた俺は屋上に出る扉の横にある窓が通り抜けられる事に気づいた。

「今日は風が強いな。」

いつもの昼寝ポイントに移動すると紙袋から昼食を取り出した。

快晴の空に少しだけ肌寒い程の風が大変居心地が良く、午後の授業をサボりたい気分が蔓延してくる。目を閉じると何も無い真っ暗な世界が瞼の裏に広がっている。気絶するように少し昼寝すると頭がすつきりする。

本当にこのままサボるという事も考えたのだが、残念だが、俺はそこまで不真面目ではないので渋々起き上がった。

俺がいたのは出口のある小さな小屋の様な四角い建物の上だ。正確に校舎で一番高い位置にいた。起き上がった、降りようとした俺の目に制服が飛び込んでくる。1人は男、もう1人は女だ。

「あ。」

突然現れた俺の方に驚きの目線を送る2人。負けじと俺も2人に

対抗視線を送る。人付き合いが苦手な俺にとって、この空気は最悪の場面の1つだ。そして、2人もその空気があまり得意ではないように、暫く3人もそのまま固まってしまった。

と、チャイムが鳴り響く。

その音で、俺を含めた3人は現実に戻って来た。俺はそそくさと小屋を降りて、そのまま帰ろうとしたが、背後から不意に声を掛けられた。

「あ、あの…。」

声を無視するわけにも行かずに俺は立ち止まる。だが、こちらから声をかける事はなかった。

「よく、屋上には来るの？」

振り返ると男の方がこちらに近づいてきた。その後ろから女の方も恐る恐る近づいてくる。

「…。」

俺は、何も言わずに振り返る。男の方はよく知らないが、女の方は見た事はある。確か同じクラスに同じ顔がいたと思う。

「あの、ここにいる事は…。」

心配そうに言う男の言葉が終わらないうちに俺は言葉を重ねる。

「言わないよ。言ったら俺もいたことになるでしょうが。」

「そ、それも、そうね…。」

女の方がほっと胸を撫で下ろして、後から言葉をつけ加える。

「あ、あのー、もう1つ…。」

振り返って戻ろうとする背後から、今度は女の声が俺の足を止める。

「何だよ。もう昼休み終わるよ。」

次の授業は確か体育だ。教室に戻って着替えてから校庭に行かないといけない。少し焦った態度の俺に彼女は思わぬ言葉を投げかける。

「私たちは、その…。」

大体言いたい事は分る。急いでいた俺は彼女の言葉を率先して補充した上で約束を取り付ける。

「付き合ってる事は黙っておくよ。俺はここで何も見なかった。それじゃ。」

今度は本当に振り向いて俺は出口へ急いだ。

はつきり言つて、2人の事など全く興味はない。それより、自分だけの場所と思つていた屋上への侵入者というイメージしかない。

また、明日から1人で居られる場所を探さなくてはという事だけが頭をよぎつた。

教室に戻ると既に誰もいない。制服が各椅子に掛かっているという事は、どうやらクラスの皆は着替えを終えているのだろう。俺は、急いで着替えると昇降口に走つた。学校の授業自体には興味はないが遅刻する事で目立つのがとても面倒くさいからだ。

「くそつ。」

思わぬ事で時間を食つた為に、間に合う公算の方が少ない。このまま屋上に戻つて昼寝でもして、何食わぬ顔でそのまま帰つた方がいいのかと考え始める。

ともかく上履きを靴に履き替え、踵を踏んだまま外に飛び出した。「!?!」

不意に何かの塊が視界に入った。

一瞬何が起こつたのかわからなかった。

しかし、次の瞬間、それが人の形で赤く染まっている事を認識する。

「た、助けて...。」

ゆっくり上げた顔を血に染めて、手を差し出すその女子は、先程屋上で見た顔の変わり果てた姿だった。

はつきり言つて俺はホラー映画の類は苦手だ。なので、子供の頃に一度見たきりで、テレビでもその類のものは直ぐにチャンネルを変えてしまふ。そんな耐性の無い俺が、いきなりこれはレベルが違いすぎる。

「…。」

恐怖などというものを乗り越して、俺はその場に固まってしまった。そんな現実から目を反らすように俺は上を見る。

彼女がもし誰かに突き落とされたのだとしたら俺の視界に何かが入るはずだったが、俺が冷静じゃなかったのもあったのかも知れないが、特に何も見えなかった。

「はあはあ。」

突然の息切れに顔を降ろすと、彼女の震える手が今にも俺の足に届きそうな勢いで近づいてくる。情けない事に俺はそこから一步も動くことが出来なかった。

「た、助けて…。」

消えそうな声でそう呟くと彼女の血塗れの手が力なく地面に落ちるとともに彼女の顔もうつ伏せになった。

俺が何気に見届けて顔を上げると、いつの間そこにいたのか。黒ずくめの男が彼女の傍らに立っていた。

「わっ！」

次々と起こる想定外の出来事に俺の心の許容範囲を超えたらしく、遂に幻が見えてきたと思った。その男はじつと俺を見ていた。特に何をされたわけじゃないが、見えないプレッシャーに押されたのか、その場に尻餅をついた。

「で、君は屋上に行っていたと。」

「はあ…。」

目の前の初老の刑事がメモを取りながら型通りの質問を繰り返す。

「その時に屋上にいたのは？、君と彼女だけか？」

「いや、最初に行った時は誰もいませんでした。それで少し寝転がっている間に、あの2人が…。」

「2人？」

「そうか、仕方ない。では、何か思い出したら、ここに電話してくれ。俺は赤木だ。ま、覚えてるかどうかは自由だけどな。」

刑事は軽く嫌味的な事を残して、俺に紙切れを渡す。紙切れには電話番号が書かれている。

刑事が立ち去った後、俺はとりあえず部屋から出て昇降口へと向かう。あんな目にあつた場所に戻りたくもないが、この校舎から外に出るにはどうしても通るしかない。取調べが終わったら、今日はもう帰宅するように先生には言われているから、行かざるを得ない。現場は上へ下への大騒ぎが続いていた。学校の外からも野次馬が見に来ていた。

靴を履いて外へ出る。また何か落ちてきそうだと思う上を見た。空は既に夕暮れの様相を呈している。

「ん？」

校舎は3階建てで屋上から誰かが覗いていれば直ぐに見える。そして今、誰かが、屋上から下を覗いていた。

「あれは…。」

俺は思わず昇降口に戻る。

よく考えれば、これ以上こんな事に関わる気は無いはずなのに、体が勝手に動いたとしか言いようがない。

それにしても今日はよく走る日だ。足が痙攣しそうな気がする。笑う膝を抱えて屋上へと向かうが屋上への出入口の前に鑑識員らしき若い男が立っていた。

「何だ君は？」

「あ…、あの。屋上に…。」

「屋上は今、立ち入り禁止だよ。まあ、最も普段から立ち入り禁止みただけで、今日は特にね。」

「い、今、下から見たら屋上から人が覗いていたんです。」

「覗いて？、まあ、今、色々調べているからね。監視員のだれかじゃないのか？」

「いや、その。」

今の心理状態では見間違ひも確かに考えられるが、それでもあれは確かに、あの時の生徒だった。そして、そいつは屋上から俺を真っ直ぐに見ていた。

「あの、一応お聞きしますが、うちの生徒は1人もいませんよね？」
「生徒？、あのね。いたら追い出されてるよ。もう三十分以上も我々はここにいてるけど、生徒でここに来たのは君が最初だよ。」

警察がこんな嘘を言うとは思えない。やはり見間違ひだろうか…。
「そ、そうですか…。分りました。すみません。お騒がせしました。」

「俺は諦めて屋上を後にした。」

学校を出ると駅に向かう。しかし、どうしても背後が気になり、後ろを振り返ると、さっきの黒ずくめの男が一定の間隔を置いてついて来ている。

服装は目立たないが、尾行という程こそとしているわけでもない。第一、明らかに俺に見つかっているが、全く何も気にしないまま、深々と被った帽子に隠れた目はこっちを見ているのかどうかも分らない。

警察に連絡するのが安全かもしれないが、今の所不気味なだけで別に何もしてない。いや、人の後ろをついて来ているというのは犯罪なのだろうか。何かあってからでは遅いし、ストーカーである可能性は否定できない。

散々色々考えた挙句に俺は無視する事を決め、早足で帰路についた。

「あーあ、疲れた！」

部屋に入ると大の字になって溜まっていた一言を天井にぶつけた。今日は本当に色々であった。もう頭を使うのも面倒くさい。

とりあえず、落ち着く為にいつも通りの生活をする事にする。外

はずっかり日が落ちていた。両親は、今夜は遅いと言っていたから、台所に行けば夕飯の用意はしてあるはずだ。風呂に入って飯を食い、部屋に戻って机に座った。

ノートを開いてペンを握る。学生の本分である学業だ。一応体裁は整えたが、頭がそちらの方向に動くわけは無い。

ペン先でノートをトントンと叩きながら、ノートの中身などは頭に入ってきていない。それどころか部屋の片隅からする異様な雰囲気にもますます気が散るばかりだ。

「あんだ、何なんだ。」

俺は今まで消していた部屋の灯りをつけた。部屋の片隅に座っていた黒ずくめの男の姿がくつきりと浮かび上がる。

「…。」
そいつはこちらからの問いには何も答えない。ただ、視線は確実に俺を捕らえている。よく考えれば何故俺はこんなに落ち着いているのだろうか。

何を聞かれても答えない不気味な男が部屋に侵入しているのだ。普通なら悲鳴の一つもあげてもおかしくはない。なのに俺は多少の腹立たしさがあるとはいえ、この状況で、この得体の知れない相手と堂々と対峙している。

「第一、何処から入ってきたんだ？」

一番の疑問を聞いてみる。さして広い家ではない。玄関からトイレの窓まで鍵は一応すべて閉まっている筈で、俺はこの家に帰ってから今まで、玄関と風呂の窓以外は触っていない。その風呂の窓も外側に格子がついている筈だから、侵入は難しいだろう。

男は笑うでも怒るでもない表情をしている様に見える。その無の表情は、この男がこの世の存在では無い事を想像させるのに十分な説得力を持っている様に思える。

「この世…。」

俺は1人呟く。俺の聲がこいつに聞こえたのかどうかは分らない。立ち上がって部屋の隅の本棚に手を伸ばす。最近買ってきた他愛

も無い小説を手にとってページを捲る。

その三流小説は、あるサラリーマンの男が人生に嫌気がさして自殺を考え、ビルの屋上へ向かった所、死神に会ったという話だ。奇妙な事に死神は、男に自殺をやめる様に説得する。結局男は死に切れずにもう一度頑張ろうと決心したその日に、交通事故で重傷を負い、搬送先の病院で苦しんでいる所で再会した死神に苦しみを訴えて殺して貰うという話だ。

今、目の前で俺を見ている男の格好が、その死神にとっても酷似している。ただ一つ違うのは、小説で出てくるような鎌を持っていないという事だ。だが、案外本物はそういうものかも知れない。

「お前、俺を殺しに来たのか。」

思い切って問い掛けるが、案の定戻ってきたのは沈黙だった。

「勝手にしろ。」

よく考えれば、この小説の主人公と違って俺は自殺なんか考えた事もない。第一、屋上ではこいつを見かけてはいない。そう考えていくと、俺と言うよりは、死んだ吉村真弓という女子の方に取付いていたとしか…。

「あ。」

机に戻った瞬間、一つの仮説が頭の中に生まれる。

こいつは、俺に取付いたんじゃないやなくて元々、吉村真弓に取付いていたのではないだろうか。いや、それどころか、屋上から彼女を突き落として殺したのはこいつ？

そう考えると何かと辻褃が合うような気がしてくる。

そうなるともう1人、屋上にいたあいつはどうしたのだろう。名前もクラスも分らないが、彼は生きているのだろうか。しかし、そうなるると突き落とされたのは2人という事になる。いくら何でも落ちてきた人間を見失う事はありえない。確かに俺の目の前で地面に叩きつけられたのは、1人だけだった。

それに2人一緒にいて、片方が突き落とされるのを黙って見ていた筈は無いし…。あの男子生徒は何処へ行ったのだろうか…。

疑問が疑問を呼んで少々混乱気味になった頭を少し冷やす為に背伸びをした。よく考えればそれらは全部死神ありきの考え方だ。そんなものこの世に居るわけがない。俺はもう一度部屋の隅を見た。そこには既に誰も居なかった。一切何かが動いた気配はなかったのに…。

結論としては、「疲れて見えた幻」という事にするしかなさそう
だ。

「いてて。」

登校中の電車の中で、痛む頭を押えて呟く。

俺は生まれてこの方酒など一滴も飲んだ事はないが、俗に言う「2日酔い」とはこんな感じなのだろう。夕べは明け方まで、色々な事が頭をよぎって普段寝ている時間を過ぎても全く瞼に重さを感じなかった。

ようやく眠気が訪れたのが、明け方の5時。とりあえず一回眠ったが、全く足りていない睡眠時間と夜使いすぎた脳の疲れが、今朝の頭痛の原因だという事は明白だった。

屋上から彼女を突き落としたのは誰か？

今朝の新聞やニュースで一応色々と見てみたが、遺書めいた言葉が彼女の日記から見つかったらしく「自殺」という事で警察の捜査は終わるらしい。

しかし、俺は納得できない。あの時彼女は確かに「助けて」と俺に言ったのだ。自殺した人間がそんな事を言うわけが無い。

昨日の刑事さんの様に二十年のベテランでなくとも自然と容疑者は絞られる事になる。俺は思い切って、あの時屋上にいた奴に会ってみようと思う。あまり、深く関わらないのが正解かもしれないが、あんなインパクトのある死に方を目の前でされては、こっちも気にせずにはいられない。

別に理路整然とした根拠があるわけではないので、会った所で何かを確認できるわけではない。

電車を降りて頭を抱えたまま俺はいつもルートで登校し、席に座った。特に話しかけてくる奴もいないので、そのまま教科書を立てて思い暇を閉じる。

次に俺が目を覚ましたのは、既に四時間目の終わりのチャイムが鳴っていた時だった。誰も起こしてくれなかったのかと思いつながら、のそりと起き上がる。

あの男子生徒を探すつもりだったのだが、いつもの習慣でついつい屋上に足を運ぶ。しかし、階段手前で立ち入り禁止の看板が鎖で頑丈に繋がれていた。

元々禁止されていたのだし、あんな事があつた後に出入できる方がおかしいか…。

「しょうがない…。」

引き返す為に振り返った瞬間、俺は何かの物音を感じてふと立ち止まる。

「何だ？」

屋上に続く扉の向こうから何か足音のような音が聞こえる。最初は気のせいだと思っていたが、耳をすませるとやっぱり何か聞こえてくる。

看板を繋いでいる鎖の間を縫ってドアに耳を当ててみる。微かに人のすすり泣く声が聞こえる。

「おいおい…。」

まさかと思ってドアのノブを回してみると…。

ガチャリ…。

立ち入り禁止の看板は前の色褪せたものではなくまだ新しい。こんなものを飾っておいて鍵をかけない筈はない。しかし、現に鍵は開いている。

突然の緊張感が俺を襲う。この先へ進むべきかどうか…。ノブは回したもののまだドアを少し押しただけで、屋上の様子はまだ全く

分らない。一応昨日警察が来て散々調べたと言っていたから、変なものはないだろう。単純に鍵の掛け忘れな可能性もある。

少し迷った拳句に俺は思い切ってドアを押した。

屋上には、昨日の男子生徒がいた。

「おいおい！」

そして彼は手摺を超えようとしていた。俺はとっさに彼の腕を引っ張り屋上の中央まで引き戻した。

「何しているんだよ！」

「もうほつといてくれ！」

彼は俺の問いには答えずに叫んだ。屋上の強い風がその声をかき消す。校庭では、無数の生徒が、倶楽部活動に勤しんでいる。恐らく、その人達には、この声は届いていないだろう。

聞くと鍵は開いていたそうである。名前は本人が「大木和也」と名乗った。

「丁度よかった。少し君に聞きたい事があるんだ。」

「聞きたい事？」

「昨日の事なんだけど……。」

俺が口を開くと同時に彼はあからさまに不快な顔をした。

警察の事情聴取の際にも同じ様に聞かれたそうである。

「屋上で彼女と何をしていたのか。彼女が飛び降りる前、どのような会話や行動をしていたのか。」

ほぼ容疑者として扱われ、かなり精神的にまいっていた所に俺が同じ質問をぶつけそうになったものだから感情が少し弾けたらしい。気持ちはわからくもない。

「真弓が自殺だろうが、それで無かるうが僕には、彼女がもう戻ってこないという事には変わりはないんだから、関係ないよ。今更、どうしてそんな事言うんだ。僕は、次の授業が理科室へ移動しないと

いけなかったから彼女より先に教室に戻ったんだよ！、君まで僕を疑ってるのか？」

「……。」

和也の強い口調に俺は、その理由が「好奇心」だとは言えなかった。それを否定出来ないとはいえ、言葉にするにはあまりにも不謹慎だと、一応分る。

「すまん。そうだな。」

屋上の片隅に立っている死神が俺の目に飛び込んでくる。既に見慣れてしまった事も危ない。これ以上関わると、俺の命も危ないのだろうか。仕方なく、和也に背を向けて出口に向かって歩き出すと、その瞬間、何か引つかかっていた違和感が弾けるように俺の体を貫いた。

「死神……。」

その単語が元々頭に引つかかっていたのだが、何故、最初から俺に奴が見えていたのだろうか？

「もう一つ聞いていいか？」

うなだれている和也に向かって、努めて冷静を装った俺が話しかける。

「何だよ。」

「最近、黒い服の男を見なかった？」

「は？」

不快な顔つきから一転して目を見開いて眉毛をハノ字にする。「こいつは突然何を言い出すんだ？」というような表情である。

「例えば、あいつみたいなの。」

俺は見えている死神を指差して聞いてみた。和也は一応俺の指先に視線をあわせてくれたが、首をかしげながら、

「何も見えないけど……。」

と、遠慮げに答えた。

「そうか。ありがとう。」

今だ不可思議な表情をしている和也を尻目に俺は屋上の出口へ向

かった。

俺からすれば、吉村真弓が屋上から転落する前には、そんなものは一切見えなかった。最初に見たのは彼女の遺体を見た後……。その時は、あまりにもショッキングな場面に遭遇したせいで、死神が見えるタイミングなど考えもしなかったが、今となっては、この事件に関わるきっかけとなったタイミングで、あの黒服を見かけるようになってる。

という事は、この事件に関わらなければ死神を見る事も無かったのだろうか。

ほんの少しの後悔と同時にもう一つ奇妙な事がある。

何故、和也がまだ生きているのだろうか？、和也には死神が終始見えていないのは？、真弓が死んでから一番悲しんでいる奴は、一度自殺未遂までしておいて死神の存在に気づいていない。

「なあ……」

俺は振り返らずに立ち止まって口を開く。

「何だ？」

背後からやたら冷静な声が聞こえる。

「君は、彼女と最後に交わした言葉はなんだ？」

「え？、悪いけど覚えてないよ。でも、多分『また放課後に』とかだったと思うけど、それが何か？」

「どうしても気になる事があるんだ。」

「気になる事？、でも、お前彼女と別に仲良くも無かっただろう。あんな事があつて第一発見者という関わりくらいだろう。何を気にしているんだ？」

「君の話だと、彼女は飛び降りる前は1人でここにいた事になる。自殺なら、遺書めいた事とか会話の節々に出てきそうなものだけど。」

「さあな。新聞じゃ、警察は彼女の日記にそんな事が書かれていたとか言っているけど、僕との会話にはそんな雰囲気ではなかったよ。」

俺は正直に言うかどうか迷った。

「ちなみにその日記は、読んだ事は？」

「ない。」

「ふむ…。」

俺が顎に手を当てて考えていると和也は近づいてきて肩に手をおく。

「何が、そんなに気になるんだ？」

先程とは別人のような低い声が耳を擦る。

「いや、やっぱりいいや。他人に深く関わるとロクな事ないからな。」

「そうか。僕も…、それがいいと思うよ。」

ほんの少しだけ悪意が薄らいだような声。俺はこれ以上ここにいてはいけないような衝動に駆られて出口まで走った。正確に言うと、走って逃げたのだ。

一気に階段を駆け下りると昇降口を出るまでほぼ止らずに駆け抜ける。普段運動などしていない俺に、こんな体力があったのかと思う程、飛ばした。

「はあはあ。」

昇降口を出た「現場」で一旦立ち止まり息を整える。

そこから見上げた屋上からは、一見誰もいないように見えるが、何かが俺を見下ろしている感じがする。俺は、本気でこの件に関わる事をやめようと思ったが、あの日、彼女の最後の言葉がどうしても耳に残っている。

「た、助けて…。」

自殺する人間の発する言葉ではない。即死しなかった事で後悔している可能性もあるが、俺には事切れる前の彼女の言葉が、死のうとした人間の言葉とは思えない。

それに同じクラスのクラスメートではあるが、人付き合いの無かった俺にこれ以上関わる必要があるのだろうか。

放課後になると俺は職員室のドアをノックした。そして、担任の

先生に彼女の住所を尋ねる。

「吉村真弓の住所？」

「はい。一応第一発見者ですから、線香の1本でもと思いまして。」
「そうか。まあ、そりゃいい心がけだ。えーと…。」

個人情報保護とやらにうるさい時代だが、担任の初老の先生の世代にはそんな意識はない。あっさりと住所を紙に書いて渡してくれた。

「行くのはいいが、失礼の無いようにな。」

「はい。」

校門をくぐると俺の足は自然に吉村真弓の家に向かった。

彼女の家に来るのは、もちろん初めてだ。チャイムを鳴らそうと指を押し当てる瞬間に声を掛けられた。

「お前、何でここにいるんだ？」

声の方を向くと、何処かで見た顔が…。

「あ、確か…。」

「何だ、忘れたのか？、警視庁の赤木だよ。」

丁寧にわざわざポケットから手帳を出して俺に見せた。現場で一度だけ話しただけなのであまり記憶には無かった。

「何でここにいるんだ？」

「え、えーと、ちよつと気になる事がありました。」

俺は警察が苦手だ。今回のようなアクシデントがなければ一生この職業の人と会話なんてする機会はなかっただろう。

「そうかい。」

「刑事さんは何でここに？」

「事件の捜査してるのさ。」

「捜査？、でも自殺って新聞にも…。」

「俺は納得してない。あの日記を見せてもらったが、これから死ぬような人間が書く内容じゃない。」

「や、やっぱり…。」

「やっぱり？」

俺はほとんど直感でこの刑事は信用できるのではと思った。根拠はない。しかし、俺はこう見えても自分の勘は意外と信頼していた。

「どうやら、お互い話す必要がありそうだな。その辺りの喫茶店でも行くか。」

男にお茶に誘われる筋合いはないとはいえ、俺も同じ事を考えていた。

ガラス張りに見える駅前は、夕方の第一次帰宅ラッシュで賑わっている。それ程大きな駅ではないが、昇降者数は同線上では多い方だ。昼間と夜の隙間の時間で、所々灯りが灯り始めている。

「さてと、で、何だっけ。」

いつの間にかトイレから戻ってきた赤木刑事がいつの間にか俺の前の席に座っていた。目の前にはビールとコーヒーというアンバランスな組み合わせが置かれている。

「あの、勤務中なのでは…。」

「だから？」

一応、聞いてはみたが、この話は時間の無駄そうなので打ち切る事にした。

「赤木刑事は、彼女の日記の内容を見て、自殺が納得できないと。」

「赤木さんでいいよ。そうだ。君は何で彼女の日記の内容が気になるんだ？」

ここまで話しておいて何なんだが、俺はこの続きを話す事を迷っていた。別にこの人当たりのいい警官が信用できないわけではない。理由を話すには、死神の話をしなければならぬ。いくら人が良いとはいえ、そんな荒唐無稽な事をあっさり信用してくれるとは思えないし、逆に俺の方が疑われる材料になりはしないだろうか。

「…。」

「どうした。」

拳動不審とまではいかないが、明らかに様子がおかしい俺の顔を覗き込む刑事。まるで自分が容疑者で取り調べを受けている気分だ。

「あの…。」

「ん？」

「こ、こんな話、信じてもらえないかもしれないんですが…。」

「そりゃ、話してみないと分らないだろうが、信じるかどうかは君が決める事じゃなくて、聞き手である俺が決める事だ。」

まあ、言われてみれば全くその通りで、グウの音も出ない。目の前のコーヒールを一口飲んで一息入れると、話を切り出した。

「実は…俺、見たんです。」

「見た？、犯人をか？」

「いえ…。」

「じゃあ、何を？」

「…死神っていうんですか？、あの人間じゃないものを…。」

赤木刑事は動きを止めて俺の顔をじつと見ている。心の中では、どう思っているのか分らないが、一見動揺や混乱は見当たらない。職業柄、こういう変な事を言う人とも接してきたのだろうか。だから取り扱いは一般人よりは慣れているのだろうか…。

「えっと…。」

二の句に困っていた俺に、赤木刑事は突然掌を見せた。

「話しを続けてくれ。で、その死神と今回の話と何の関係が？」

やはり刑事ともなると、こういう話もちゃんと聞いてくれるものだ。俺はとりあえず今まで考えた事を正直に話す事にした。

「俺、今までそういうものは信じた事はないんですけど、今回だけは、どうも、本物見たいで…。」

「ふむ。君が何故それを死神だと思ったのかは、一旦おいておくとして、それが、彼女の死とどんな関係があると思ったんだい？」

赤木刑事は責めるでも宥めるでもない冷静な口調で、俺に問いか

けてくる。

「俺は彼女と同じクラスです。別段仲良くもないし、あまり話した事もない。でも教室での彼女の様子だと、自殺するような素振りなんか微塵も無かった。」

「なるほど、でもあの年頃の女の子は、そういう気持ちを隠すのがとても上手だったりするものだよ。」

「だから、日記の内容なんです。誰にも見られない前提で書いているものなら、その日記の何処かに自殺の原因の断片があるはずだと思います。例えば……。」

「死神とか?」

「ええ、そうでなくとも、何か納得のいく理由が欲しいんです。」

「君はどうしてそう彼女の死の真相を知りたがるんだい?、さっきの話だと、彼女とはそんなに親しい間柄ではないようだけど。」

「俺が死神を最初に見たのは、彼女が俺の目の前で地面に叩きつけられた時からなんですよ。」

「……なるほどね。で、君は、死神を見てしまったのは、この事件に第一発見者として関わってしまったからで、死神から逃れるヒントがこの事件の真相に隠れているかもしれないと思ったわけだ。」

さすが捜査のプロ、察しが良くて話が早い。その通りだ。

「信じてもらえないでしょうが。」

「ふむ、俺は死神を見たことないからな。だが理由はともかく、彼女の自殺に関しては俺も疑問視しているよ。残念だが、捜査上の守秘義務もあるんで日記の内容は細かくは教えられないが、彼女が死神とやらで悩んでいるような記述は無かったよ。もちろん、それ以外にも死を連想させるような内容は一つもない。むしろ、高校生活を満喫しているような内容ばかりで、見れば見るほど自殺などとは程遠い心理状態だったと思う。ただ、君はどうして彼女の自殺を疑っているんだ?」

「あの日、俺の目の前で彼女は死ぬ直前に『助けて』といったんです。普通、自分の意思で飛び降りた人間が言いますか?」

「ほお、それはますます疑ってかかるべきだな。だが、それは君だけしか聞いていないから証拠にはならんよ。俺は信じてるがね。」
「…そうですか。」

この刑事が嘘を言っている様には到底思えないので、一応日記の内容に関しては確認できたと思つてよいだろう。

「まあ、気になるのは分るが、捜査は俺達プロに任せて、君は学生の本分に戻る事をお勧めするよ。」

赤木刑事は、ネクタイを緩めるとビールに口をつけ、まるで水を飲むようにグラスの半分近く飲み干した。

「おつと…、ところで。」

「はい。」

中身が半分になったグラスをテーブルに置き、懐から手帳を取り出して、ガサガサとページを捲り始める。

「君が彼女のクラスメートだったって事で、一応確認して置こうかなと思うけど。」

「何でしょう?」

「彼女の日記の中に時々出てくる『大木和也』って知ってる?」

「和也?、ああ、別のクラスの奴で、彼女と付き合ってた筈ですが。」

「まあ交際していたのなら日記に出てきても別に不思議は無いだろ。」

「それはおかしいな。」

「おかしい?」

「君らの学校にそんな名前の生徒はいないんだよ。」

「は?」

赤木刑事の言葉は、一瞬で俺を混沌とさせた。それじゃ、屋上で話したあいつは誰なんだ?、背筋を冷たいものが滑り落ちる。俺はもしかしてとんでもない事に関わっているのではないだろうか?

「そ、そういえば…。」

「何だ。」

「今日屋上であいつに会いました。色々聞いている中で、午後の授業の話になって、次の時間が理科だって…。でもよく考えれば、五時間目が理科なんてクラスはないはずです。」

「そうなのか…。ふーむ。色々と確かめる必要があるそうだな。」

赤木刑事は顎に手を当てて天井を見上げつつ残りのビールを飲み干した。

「そ、そんな…。」

喫茶店で話した翌日、俺は赤木刑事と学校の視聴覚室にいた。目の前には、先生が2人。その2人のうちの1人の先生の言葉に思わず席を立ち上がる。

「落ち着け。」

赤木刑事が俺の制服の裾を引っ張って座らせる。だが、これが落ち着いていられようか。

「じゃあ、大木和也という生徒はいないんですね。」

「はあ、過去の名簿も調べましたが、うちの学校の歴史の中にそのような名前の生徒が在籍した事は一度もありません。」

「そんな馬鹿な。じゃあ、俺が屋上で話したあいつは誰なんだよ？」
詰め寄る俺に不機嫌そうにする先生。

「君、屋上は立入禁止だぞ。」

そんな些細な事は今はどうでもいい。俺はとにかく自分の質問の答えが聞きたいのだ。

「そうですね、しかし、最近学校に来なくなった生徒はいますか？、ほら、登校拒否的なものなんかで。」

「うーん、風邪が少し流行っているので病欠はいますけど…。」

「じゃあ転校とか。」

「それは今年は1人もいませんね。」

「そうですね。」

赤木刑事は考え込む。俺もそれに倣ったわけではないが、椅子に深く座って腕を組んだ。俺に名乗った名前は偽名だろうか。しかし、同じ学校の生徒同士で偽名を使う意味などない。俺が直接見たわけではないが、第一、交際していた彼女の日記にもその名前があるのだ。

「やれやれ、これじゃあ調べようがないなあ。」

視聴覚室を出た俺と赤木刑事が同時に背伸びをする。

「あの、戸籍とかは？」

「あのね、何人いると思ってるんだ？、第一、住所も分らないのに、絞りようがないだろ。名前も姓もあまり珍しいものじゃないから、同姓同名もたくさんいるだろうし、それらを1人1人調べる時間なんかない。」

言葉にする必要もないくらい至極もつともな意見である。

「参ったな。このままじゃ、君が容疑者になっちまうぞ。」

「は？」

突然電撃を浴びせられたような衝撃が走るとともに直感的にそうかと思ひ直す。そういえば俺はあの日屋上にいたのだ。赤木和也と真弓さんと最後に会った人物に当然容疑がかかる。

「お、俺ですか、でも俺は飛び降りた彼女を昇降口で見ているんですよ。どうやって彼女を突き落とすんですか？」

「それなんだが、赤木君と君の共犯という線も考えた。」

「な、な、何言ってるんですか。俺は、あの2人と接点がないんですよ。俺がどんな人付き合ってたか、調べて貰えば分ります。」

自分が疑われてるなど夢にも思っていなかった俺は不意を突かれて慌てて言葉を搾り出す。

「慌てるなよ。こやって話しているという事はその線が消えたという事だよ。」

「？」

俺が首をかしげると赤木刑事はポケットから煙草を取り出して火をつけた。ユラユラと揺れる煙が曇り空に向かってゆっくりと登っ

ていく。

「簡単な話だ。共犯の線は赤木君がいなければ成立しない。だから、赤木君の事を調べようが無くなったという事は、君が犯人だと証明するものが何も無くなったという事だよ。」

赤木刑事は遠くを見つめながら煙草の煙を大きく吐き出した。なるほど、だから昨日俺に接触してきて刑事だと名乗ったんだ。

「じゃあな。」

刑事は残念そうな表情で、携帯灰皿に煙草を押し付けるとその場を去った。

大木和也が何者なのか？、今となっては分らない。あの日俺が見た奴の顔を忘れる事は出来そうにもない。いつかの屋上で背後からかけられた低い声も、今考えるとゾツとするが、あの時に落ち着いて返答できた事も何かと幸いしたのだろう。

事件に関わっている間、ずっと俺に付きまどってきた死神もすっかり見なくなった。あれから変わった事といえば、俺が屋上に行かなくなつたぐらいだ。

俺は相変らず変わり映えのしない孤独な日々を送っているが、あの出来事を思い出す度に、和也だけではなくて吉村真弓という存在まで疑うようになってきた。

昼休みなどは、教室でうつ伏せになつたまま寝ているのだが、またしても奇妙な事に1つ気づく。寝つくまでの間、教室で話している他の生徒の会話が耳に飛び込んでくるのだが、あれだけの事件だったにも関わらず、その話題が1つも聞こえてこないのだ。皆が皆気を遣っているだけといえればそれまでかもしれないが、どうしても気になった。かと言って何か行動を起こしているわけでもなく日々は淡々と事件前と何も変わらない日常が過ぎていった。

しかし、何かおかしい……。何がと問われれば言葉には出来ないの

だが、通常に戻ったはずの日常から妙な匂いがしてくるのである。事件前と事件後では、何かが違う。

そんなある日、俺はいつもの昇降口の出口で立ち止まっていた。

「あーあ、天気予報も当てにならないなあ。」

独り言で愚痴って、突然昼ごろから振り出した雨粒を睨みつけていた。今朝、家を出る時の天気を考えると信じられない程に暗くなつた空から結構大きめの無数の雨粒が地面に叩きつけられていた。

パラパラと音がする中、俺の横を通り過ぎていく用意周到な生徒達の色とりどりの傘が、薄暗いモノクロの景色にほんの少しの彩りを添える。

「しょうがない…走っていくか…。」

止みそうもない雨の前で、どうしようもなく腹を括る。駅まで、普通に歩いて十分程の距離だから鞆を頭の上に持ってきて全力で走るしかあるまい。

「仕方ない…。」

そう呟いて鞆を頭の上に持ってきた。

その瞬間目の前に雨粒ではない、何か大きな固体がどさりと目の前に落ちてくる。まさに走り出そうとしていた俺は不意をつかれて足を滑らせそうになったが、何とか踏み止まった。

「何だ？」

「どうした？」

周りの生徒が一斉にこちらを見る。俺は目の前に落ちてきたそれを暫く放心状態のまま、それが何であるかを認識しないまま、ただそれを見ていた。

「き、きゃあああ！」

不意に俺を現実に引き戻す甲高い声。近くにいた女子生徒が、まるで夏休みの蝉のように一斉に空気を振るわせる声を発した。

「飛び降りたぞ！」

不意に目の前に現れた人間の死に目を閉じる暇も無く、俺は目が合ってしまった。

「た、助けて……。」

俺は強烈なデジャヴに襲われて顔を上げる。目の前は、あの死神が雨の中、突っ立ってこっちを見ていた。

過去に帰る日（前書き）

この物語はフィクションです。名称や人名は実在の人物とは何の関係もありません。

過去に帰る日

「げぼっ！」

ドアを開くとそこは埃だらけの場所だった。うつすらと太陽の光が埃のこびり付いた窓やトタンの隙間から漏れている。

「ここは？」

僕は一人言を言いながら計器類のメーターを確認する。

「えーと、西暦だから、そうか、数十万年の未来なのか…。」

とりあえず外に出ようと、足を踏み出した。地面に降り立った足元から埃が舞い上がる。

「げぼっ！」

咳を繰り返しながら僕はとりあえず出口を探すことにした。一先ず、綺麗な空気を吸わなければと思い、出口と思われる引き戸を見つけて、そちらへと歩を進めた。

「ん？」

不意に何かの気配を感じて立ち止まる。あたりを見回すが特に何も見当たらない。何せ自分のいた時代よりかなり未来の世界に来たのだ。知り合いなど一人もいないし、見つかったら、面倒な事になる。

人気の少なそうな座標を選んで来たつもりだが、何せ時代が違うので何が起ころかわからない。時間旅行が普通になってきたのも最近（勿論僕のいた元の時代で）だから過去や未来の安全な時間と場所を調査する調査員の献身的な努力により、かなりの数のツアーが組まれる様にはなってきた。

それでも何かと事故が絶えない危険な旅行であるのは確かだ。未来がどんな世界かは、人の想像や予測を大きく外れている場合が多い。

僕が自分のマシンに適当にセットした値が偶然僕をここに連れてきた。既に誰かが来たことのある安全な時代と場所かもしれないし、

そうでないかもしれない。どちらにしても僕はすぐに帰るつもりはなかった。

僕のいた世界より数十万年の未来、さぞかし文明は発達し、素晴らしい世界が広がっているだろう。そして僕はこの世界で人生をやり直すんだ。

そう意気込んでやってきたものの、いきなり埃だらけの倉庫からの出発。しかも、建物を構成する材料は、波型のトタンときたものだ。窓を構成しているガラスも硬質ではなく輝の入った超旧型のものに見える。

「間違ったのかな。」

メーターは確かに数十万年先を指していたが、もしかしたら僕は少し過去に戻ってしまったのかも知れない。

「参ったな。メーターが信用できないんじゃない。戻るのも一苦労なんだけどな。」

愚痴を溢しながらも得体の知れない気配への警戒を続ける。一応持ってきた武器として光式銃が懐にあるが、出来れば使いたくない。殺傷能力は然程ないが、熱信号で組織一部を一時的に麻痺させる効果のある光線を放つことができる。要するに麻酔弾のレーザー版のようなものだ。

「だ、誰かいるの?」

僕は思い切って声を掛けてみる。突然現れた僕にびっくりしているだけかもしれないし、余計な敵愾心を煽る事もしたくない。かといって自分の身も守らなくてはいけないので、一応銃を手にとつて握り締める。

異なる時代に行った場合、基本はそこにいる生物に一切の危害を加えてはいけけない事になっている。当然だが、それが他の時代にどういふ影響を与えるのかを計算する事がほぼ不可能だからだ。たとえ全てデータと計算式があつたとしても、僕の時代のコンピューターの演算能力では、変化の速度に追いつく程の性能がない為、この手の計算には一切ノータッチというのが、科学者の見解だ。

要するに、計算し終える頃にはもう次の変化が始まっているので、計算する事自体が無意味だという事らしい。この時代なら、それらを瞬時に割り出せる機械が普通にあるのかもしれない。何せ、数千万年未来の世界なのだから。

それはそうと、呼びかけた僕の声に返答は返ってこない。しかし、相変わらず気配はそこにある。

「仕方ない……。」

ヒソヒソ声で僕はそう言うと威嚇射撃というやつを試してみる事にする。天井に向かって撃とうとしたが、このオンボロの小屋が崩れてきては困るので地面に向かって引き金を引く。

ヒュン。

微かな風切り音とともに閃光が辺りを一瞬昼間の明るさに変えた。そして、その一瞬で、小屋の壁を背にこちらを向いていた人影がクツキリ映し出されている事を確認する。

「誰？」

再び勇気を振り絞って声をかけるが返事はない。こちらに危害を加えるつもりならとくにそうしているだろうが、そんな気配がない。たまたまここに居合わせて、向こうも戸惑っているのだろうか。だとしたら、威嚇など余計な事をしてしまったかもしれない。

どうする？、このまま外に出てもいいけど、タイムマシンの在り処を知られてしまった。この人が誰かにこの事を言わない保障など何処に無いのだ。

「困ったな……。」

僕は敵意の無い事を示す為にわざと、聞こえる様に呟いた。まあ、三文芝居だといわれればその通りだろうけど。

「……。」

その影は何も言わない。本当に困った。

「動くな！」

不意に第三の声がある。その場面に割り込んできた。余りにも予想と意識の外側だったので僕は戸惑いを超えて心臓が止りそうになる。

「2人とも動くな！」

再び建物の出口付近からの声にそちらを向くと、茶色のズボンに同じ色の目立たないようなジャケットを羽織り、サングラスをかけた男が僕と同じ様な銃をこちらに向けている。

しまった、さっきの威嚇射撃の閃光で見つかってしまったのだろう。それにあの腕章は時間管理警察の腕章だ。以前、ニュースで時間法違反の人が逮捕されてしまうのを見た事がある。

冗談じゃない。前科なんかごめんだ。まだ、時間移動しただけで僕は何も悪いことはしていないし、今後も人に危害を加える気はさらさら無い。何とかわかってもらえないだろうかと頭を巡らす。

「いいか。動くなよ！」

警官は威嚇しなから銃口をもう1人と僕の交互に向けながら近づいてくる。

「貴様！、持っている銃をこっちに投げろ！」

当然の如く、武器放棄の命令が下る。

「くそっ……。」

こうしている間にも、警官と僕の距離が縮まっていく。向こうも1人のようだ。もつといれば複数人数で踏み込んでくるはずだ。恐らく巡回中に建物から怪しい光が放たれたので様子を見に来たら2人の怪しい人物が対峙している場面に出くわしたという所だろう。

もし向こうが1人ならまだ何とかかなりそうかもしれないと、僕はジリジリと後ずさりし始めた。

しかし、向こうもそれに気づいたらしく、僕の足元に向かって短いレーザーを照射してきた。

「動くなと言ったのが聞こえなかったのか？」

ますます不機嫌な表情がサングラスで強調されていく。

仕方ないと観念しかけた瞬間。

「む！」

突然天井からガラガラと無数の鉄棒の様なものが落ちてきた。

「何だ！」

それに慌てた警官が銃の構えを解いて出口の方へと退避を始める。
「こつちだ！」

背後からの声に振り向くと、そこに眼鏡をかけた、僕と同じ背格好の男の子が裏口らしき出入口から僕を呼んでいた。

その声に従うか：判断には少し迷ったが、僕は、その好意に甘える事にして裏口に向かって全力で走り出す。

「ふう。危なかったね。はあはあ。」

「あ、ありがとう。」

「どういたしまして。」

「ここは？」

逃げる事に夢中になって気づかなかったが、何処かの公園のようだ。振り返ると裏山のような小高い丘の上に木が生い茂っている。おろらく、その中に入った建物から走ってきたのだろう。丘が小さく見えるとは、相当な距離を走ってきたとみえ、僕も、僕を助けてくれた少年も息を整えるのに随分時間を費やした。

「はあ。」

ようやく鼓動が落ち着いてきて空を見上げて深呼吸をする。快晴の空は僕のいた時代と全く変わらない。よかった、どうやら全く別の星などに来てしまったわけではなさそうだ。

「怪我は？」

「あ、ああ、大丈夫。」

「とりあえず、ベンチにでも座ろう。」

「そうだね。」

噴水の前にあるいくつかのベンチには、親子連れや老夫婦といった方々がのんびりと腰を落ち着けていた。日曜日の午後の風景といった所だろう。僕は開いていたベンチに腰掛けた。

「君、未来から来たんだろう？」

「え？」

突然の少年の問いかけに僕は何と答えていいか分らずに口をモゴモゴとさせる。

「分ってるんだ。この前も何か、同じ様な人があの倉庫で誰かを捕まえてた。」

「同じ様な人？、誰かって？」

「ああ、ごめん、分りにくかったね。僕は、孝。この近所に住んでるんだ。」

「僕は…。」

「いいよ。言わなくて、未来から来た人ってそういうの隠しておかないと時間法が何とかでうるさいんだろ？」

「へえ、この時代じゃもう君みたいな子でも時間法の存在を知ってるんだ。」

「いや、普通は知らないよ。」

「そうなの。何で君は知ってるの？」

「孝でいいよ。そりゃ、この前、未来から来たって人から聞いたから。」

「えーと、未来、未来って言うけど…。僕は一応過去から来たんだよ。」

「へ？」

孝は目を大きく見開いて驚きの表情を浮かべた。僕がタイムマシンで来た事を知っているのに、たかが過去から来た事でそこまで驚かれる事には違和感を感じる。

「君、タイムマシンで来たんじゃないの？、さっき建物の中にあつた丸い機械はそうじゃないの？」

意外な質問が飛んでくる。

「いや、孝の言う通りだよ。あのタイムマシンで来たんだ。」

僕の答えに孝は何故か首を捻って怪訝な表情をしている。僕はそんな孝を見て同じリアクションをとって見た。何故か話がかみ合わない…。

「えーと、今は西暦でいうとXXXX年だけど…。」

「そうなの。じゃ、狙い通りの時代にこれたはずだよ。僕のタイムマシンのメーターもその年代を指していたはずだからね。」

「うーん。」

孝は妙に何かを考え込んでいる。僕は仕方なく暫く、そんな彼を眺めて動き出すのを待った。

「えーと、ちなみに君の時代は何年なんだい？」

「××暦××××年。」

「…そんな時代は聞いた事無いなあ。」

「ちよつと、聞いた事ないって、せめて教科書に載ってるとか遺跡が残ってるとか、そうだサーバのデータとかは移管をして何処かに残ってるんじゃない？」

「うーむ、聞いた事もない。それに遺跡とかつてさ、だいたい土器とか、貝殻とか、昔の人の骨とか、そんなんだよ。サーバがどうか、データがどうか、今の時代のならあるけど、君の時代のやつは何も残ってないと思う。」

僕の頭が目まぐるしく回転する。もう一度確認したいが、タイムマシンのメータは確かに未来を指していた事は間違いない。それに座標軸などを考えても他の星に来てしまったとはとても考えにくい。大体、今こつやつて同じ言語でコミュニケーションをとれている事自体が、よく考えれば奇跡なのだ。

「そうか。多分そうだよ。」

「え？、何？」

1人納得している僕に孝が顔を近づける。この少年の好奇心はなかなかのものだ。いつの時代もこつこつという人はいるものだと感心する。「えーと、簡単に言つと、この世界は一度滅びてもう一回、やり直したんじゃないかな。」

「やり直した？」

「零からかーからか分らないけどさ。つまり僕は、君から見れば過去に栄えた文明の人って感じになるのかな。」

「うーん。」

僕の説を噛み砕いているのだろうか、孝は腕を組んで考え込んでしまった。僕はまたしても返答を待つ。僕は、退屈凌ぎに辺りを見回した。夕暮れの公園。この雰囲気は少し違うが似たような景色は僕の時代にも存在していた。

「ん？」

ふと孝の鞆からはみ出している本に気づく。

「これ見せて貰っていいかい？」

「ん？どうぞ。」

それは何かの雑誌だった。まだ紙媒体の本が存在しているとは……。僕の仮説が正しければこの文明は、僕等の文明にはまだ追いついていないようだ。僕の時代には、紙そのものは存在していたが、紙自体が高級なアンティーク品で、本などというものは金持ちのオークションに登場する高級絵画的なものだった。僕自身は、子供の頃の学校の授業で歴史を習う時に、博物館で一度見ただけだ。

「うーん、そうなのか。」

一人事を繰返す孝を横目に僕は雑誌の薄っぺらいページを捲った。中身は色々な記事が大きなタイトルと詳細な文章、それに数枚の写真とともに紹介されている。中身は、僕の時代のニュースのデータと対して変わらない。

『タイムマシンは可能なのか？』

『恐竜の謎』

『最新医療科学を追う』

どうやらそれは科学系の雑誌のようで、いくつかの特集記事が紙面を飾っていた。読み進めると、どうやらこの時代にはまだタイムマシンなど存在していないようだ。彼が、僕の話聞いてくれているのは、普段からこういうものを愛読しているからなのだろう。

「よし、何となく理解した。」

突然、孝は顔を上げて言った。僕は少し驚いて雑誌から目を離す。「で、君はこれからどうするつもりだい？」

彼は続けて僕に問いかけてくる。

「うーん、どうするって言われてもなあ。」

言われなくても、さつきからその事ばかりを考えていた。しかし、よい案が思い浮かばない。

「帰りたいのかい？」

「えーと、正確には帰りたくない。」

「え、何で？」

「うーん、僕は家出してきたんだよ。」

「家出？、そりやまた、古典的な。タイムマシンを扱ってるような君達程の文明でもそんな事あるの？」

「家出に文明も何もないと思うよ。これは人間同士の問題だ。」

「まあ、そうなんだけどね。」

孝は苦笑いしながら、鼻の頭を掻いている。

「過去に行くのは、時間管理法で厳しいんだ。余計な事をして歴史を改竄されては面倒だからね。それより未来へ行くことは制限はあるけど、ある程度は緩やかだったりするから、ここで人生をやり直すのかと。」

「ああ、そうなんだ。」

「でもなあ、何かこんなつもりじゃなかったんだけど…。」

僕はあからさまに肩を落として溜息をつく。

「まあ、話を聞く限りは、君にとってはこの時代は不便そうだね。一回戻って考え直してみては？」

孝の言う事ももつともだと思った。

「でもさ、さつきの人って、もしかして未来の警官？」

「どうしてそう思うの？」

「だって、明らかに制服がこの時代の警官と違うんだもの。」

「そうだよ。多分僕を連れ戻しにきたんだろ？」

「へえ、ついたばかりなのに対応が早いねえ。」

「そりやそうだよ。僕等が載っているのはタイムマシンなんだよ。」

数日後に判明したとしても、行き先の時代が分れば、その少し前に

到着して待ち伏せするのが常識だよ。」

「なるほどねえ。」

「だから、無許可でタイムマシンを使った人達は、目的地へ到着した直後が一番警戒するものなんだよ。」

「ふむふむ。」

「あ…。」

話していて、ふと自分の離している事の矛盾に気づく。

「そういえば…。」

「どうした。」

孝が心配して真っ青な顔を覗き込む。

「いや、僕が到着した時に時間警官がいたんだけど。」

「そうだね。今、君が、到着直後が一番危ないって言ったじゃないか。」

「そ、そうなんだけど…。あの人一人だった。」

「…？、それが何か？」

「普通、警官がそういう人を捕まえる時は、最低でも2人一組なんだ。それに、僕が到着してからあの人が見れるまで少し時間があつた。普通は到着直後にタイムマシンを降りてくる所を囲むんだ。」

「何かさつきから聞いているとやたら詳しいね。」

「まあ、父さんが警官だから…。」

「あ、そう。納得。でもさ、それが不自然だとしても、君のタイムマシンが見つかった事はヤバイんじゃない？」

「それは大丈夫だよ。」

僕は懐から長細い水晶の石を取り出す。

「これが無いとあれは動かせないからね。」

「これ何？」

「僕も仕組みとかは詳しくは知らないけど、タイムマシンの動力の鍵だよ。これを操縦席の窪みにはめ込まないと動かないんだ。」

「でも、あの人が未来の警察なら同じもの持つてるんじゃない？」

「それは抜かりない。」

「？」

「普通鍵を登録したらそういう犯罪を防ぐ為にコピーを取ってスペアを渡さなくちゃいけないんだけど、こいつは登録前のやつだからコピーはこの世の中に存在しないんだよ。だから、こいつは世界で一つしかないから、これを持っているうちはあれは動かないんだ。」

「へえ。綺麗な石だな。ただのペンダントかと思った。僕も同じようなの持ってるんだよ。」

孝を眼鏡のズレを直しながら、自分のペンダントを僕に手渡した。それはまさに僕とそっくりの形をした石だったが微妙に模様が違っていた。

「どうしたんだよそれ。」

「父さんの形見つてやつさ。」

「そうか。」

「もしかしたらさ、警官じゃなくて犯罪者の方かもな。」

孝は悪戯っぽく笑ってそうだったが、僕には悪い冗談にしか聞こえない。

「とりあえず、何にしても一度戻りたいなあ。」

「今日はもう遅いからやめとけよ。明日行けばいいさ。僕も学校休んで付き合つてやるよ。今日はうち来いよ。」

辺りはいつの間にか夜の様相を呈して来ている。暗い中を戻るといっちは確かに心細くて危険に思える。孝の親切心に甘えるが一番いいのだろうと僕は判断した。

「…そりゃどうも。」

「まあ、その辺に座ってくれ。」

両親は既に他界して一人暮らしだという事だったから、その辺りは確かに遠慮しなくても良かったのだが、部屋に入ると予想以上の混雑振りに少し戸惑った。

「えーと、掃除ロボットとかは…あるわけないか。」

「掃除機ならあるよ。使い方分る？」

孝は押入れの奥からホースのついた箱のような機械を渡してきた。正直歴史の教科書で見た事のある機械だが、使い方はさっぱり分らない。

「いい。この辺のものを少し隅に寄せていい？」

「いいよ。」

孝はそう言うと、部屋の隅にあったソファらしきものに腰を降ろした。

「しかし、凄いな。」

机の上や床には何かの実験器具の様なものが散乱していて、足の踏み場もない。

「へへへ。本当はあの秘密基地の方へ移動しようと思ってたんだよ。」

「秘密基地？」

「今日、君が到着した所だよ。今日は下見に行ってたんだ。」

「ふーん。そうだったのか。そりゃ、運が悪かったな。とんでもない場面に出くわして。」

「そうでもないさ。中々好奇心を爰る材料を貰ったと思っているよ。」

僕は部屋の中を改めて見回す。月面写真や天体観測の模型から何か造りかけの機械の基盤など散乱していて、科学博物館をぎゅっと縮めてこの部屋に押し込んだ感じの装いとなっている。

「好奇心ねえ。隣の部屋見ていい？」

「どうぞ。と、その前にその石をもう一度見せてくれないかなあ。」

「別にいいよ。」

僕は、彼に石を手渡すした。

雑多な荷物に埋もれかけたドアを見つける。今度はこっちの好奇心が爰られる。僕は荷物を掻き分ける様にしてそのドアを開いた。

「わっ！」

「どうしたの？、そっちは寝室だから荷物は少ない筈だけど…。」
孝は、僕が声を上げた事を不思議だと思ったのか、椅子から立ち上がり僕の肩越しに部屋の中を見る。

「わっ！」とでも言うのを期待したが、彼は部屋の中を見ても無反応だ。

「？、何も無いけど、布団とかが珍しいとか？」

僕は首を横に振る。僕の時代にもベットにしっくりこない人が床に布団を敷いて寝る事くらいはあるので、部屋の風景自体は別にも無かった。

しかし、僕が声を上げたのはそんな事ではない。

「何だ？」

部屋の中に不気味に佇む黒い人形の影。黒い服を全身に纏っていたが絶対に幻ではない。襟と深く被った帽子の隙間から見える目は明らかに僕を見ている。

「おい？、どうしたんだ。」

青い顔の僕の肩に孝の手がポンと置かれて僕は我に帰る。

「見えないのか？」

「へ？」

彼が僕の目線を追うが、特に何かを見つけたというリアクションはない。どうやら本当に彼には何も見えていないのだろう。

「うーん、何も見えないけど、特殊なコンタクトでもつけているのかい。」

僕は生まれてこの方目はいいい方で眼鏡一つかけたこともない。

「そうか、見えないのか…。」

「死神…かな？」

「死神？」

「そうさ、まあ僕は信じないけどね。最近それを見たと言っていた友達が行方不明になったんだ。」

「おいおい…。」

僕はこの手の話は苦手だ。でも孝が見えるものを見えないと嘘を

ついている様には見えない。警察ならともかく、そんなわけの分らないものまで追いかけてくるなんて…。

その時突然、ガシャーとガラスの割れる音がした。

「な、何だ？」

僕も孝も音のした方を振り返る。そこには、あの茶色いジャケットを来た警官が銃をこちらに向けている。

「く、どうして…。」

僕らはなす術も無く、殆ど反射的に手を上げた。

「そうだ。大人しくしてろ。」

男は僕等の態度に満足したらしく、低い声で呟くと少しずつ近づいてくる。

「まさか、こんな事で捕まるとは…。」

僕は心の中で観念した。まあ家出程度なので殺されるとは思えないが、こんなに早く計画が頓挫するとは。まあ、時間の長さはこの際あまり関係ないといえはないけど…。

「死ね！」

「え？」

その男は、僕の予想だにもしなかった行動を開始した。

銃口を孝に向けて引き金を引いたのだ。僕も孝も、あまりの予想外の出来事に全く体も頭も反応出来なかった。孝は至近距離から肩を撃たれて、その威力で壁に背中を打ち付ける。

「ぐっ…。」

肩を押えて蹲る孝に留めをさそうと男は更に銃口を向けたまま距離を縮める。何故、警察がこんな事を？、しかし、僕に迷っている時間はない。本能が危険を知らせている。

「この！」

僕は自分の銃を抜くと、その男に向けて思い切って引き金を引いた。幸い殺傷能力がなく、この状況では完全に正当防衛なので一応躊躇いはなかった。僕の銃の銃口の向こうで男がこちらを向いて僕を睨みつけているのが見える。

そして、僕の放った光線が男の肩に命中したのが見えた。

「ぐあつ！」

男は顔を歪めて肩を押えたが、倒れるまでには至らなかった。すぐさま反撃してきて僕の肩を熱い光線が貫く。こちらの武器とは余りにも能力が違いすぎる威力だ。確實こいつは僕達を殺すつもりでここにいるのだ。

「何でこの時代にそんな武器があるんだ？」

男は不思議そうに僕を見下ろすと、2発目の引き金に手を掛ける。どうやら僕の方から留めをさすらしい。何とかあがこうとするが床に落ちた自分の銃を拾うには、肩の痛みが酷すぎて腕が動かない。孝は苦しそうに壁にもたれたまま、肩を押えている。万事休すというやつだ。

「待て！」

男とは違う声我突然、男の背後から聞こえた。僕も孝も、男も一斉に声のする方を向いた。そこにいたのは、男と同じ茶色いジャケツトの男。そいつも僕を撃った男と同じタイプの銃を持っていたが、標的は僕では無く、僕に銃口を向けている奴のようだ。

「くそつ！」

そいつは舌打ちすると振り返って、第二の侵入者に向かってすぐさま発砲する。第二の侵入者は身をかがめて銃弾をうまくよけた形になった。その隙に第一の侵入者は玄関に向かって走り出す。

「そつちへ行つたぞ！」

明らかに仲間を呼ぶ声。その声に反応する様にドアが開いて3人程の同じ背格好の男達が狭い部屋に雪崩れ込んでくる。

「畜生！」

僕はその間、手の痺れが少し取れたので、床に落ちていた石と銃を拾い上げて孝に駆け寄る。

「大丈夫か？」

「う、うん。」

顔色は悪いが肩の傷は思ったより深くはないようだ。

男はそれを見て再び部屋の中に舞い戻ってくる。しかし、窓にいた男の銃口はさつきからずっと、その第一の侵入者に向けられていた。追い詰められた奴は咄嗟に倒れている僕に手を伸ばし、すぐさま首を腕で締め上げられて銃をこみかめに押し付けられる。典型的な人質というやつだ。

「全員動くな！」

「くっ！」

人質に躊躇っているところを見るととりあえず本物の警官らしいが、それ故に何も出来ずに立ち尽くしている。

「どけよ！」

男はかなりの力持ちのようで、僕を抱えたまま窓から飛び降りた。

一応2階だったのだが、着地すると直ぐに走り出し、近くの車に乗り込んだ。キーがついたままという事はどうやら男の所有しているものらしい。

「待て！」

警官の止めるのも聞かずに男は車のアクセルを踏んだ。

「諦めろ……。」

男は僕に冷たく言い放つ。光線銃のようなものを僕に向けている。殺傷能力が何処まであるのかは分らないが、少なくとも意識を失わせる位の威力は十分予想できる。下手をすれば二度と目覚めない程の……。

僕は例の小屋に連れてこられていた。目の前には、僕のタイムマシン。男の持つ懐中電灯だけが唯一の灯りだった。いきなり車から放り出された後に銃を突きつけられている最中だ。

「諦めろって言われても。あんた、時間警察じゃないな。」

ここまでの苦勞を考えるとそう簡単に諦めるわけにはいかず、僕はその男を睨みつけた。ついでにその男の背後にいた死神に対して

も同じ目を向ける。

「けっ、反抗的な目をしてても結果は同じだぜ。馬鹿が、寿命を数分縮めるだけの事だ。」

男の引き金に当てた指に力が入るのが分る。

「畜生！」

僕の叫びに男が反応して笑い出した。

「あははは、そうだ。叫んでもいいんだぜ。こういう時は誰でもそういう反応をするもんさ。ははは。そうさ、俺は警官なんかじゃない。この服の方が動き易いんでね。目的は達成できなかったが、一旦引き上げさせてもらおう。」

「目的？」

「ふん、お前の友達を殺す事だよ。」

「え？」

男の口から出た意外な言葉。

「な、何で？」

「お前も未来から来たのなら知ってるだろう？、タイムマシンをあいつが発明するからさ。」

「た、孝が？、で、でも何で……。」

「何で殺すのか？だって、そう遠くない将来にそのタイムマシンの材料になる石がどんどん消費され、この星のバランスが崩れる。そして、気候が変わり、俺達人間は殆ど死にしまうんだよ。だから、そうならないようにタイムマシンを作った奴を消せば俺達は滅びない。」

「そ、そんな理屈で……。」

「始めはお前も同じ目的かと思ったが様子が違うんでな。仕方なく俺が決行しようとしたわけさ。さあ、動力の石を渡しな。」

僕は銃を向けられている恐怖を掻き消す程の悔しさが込み上げてくる。何で、自分の生まれた時代でもないのにこんな目に遭うんだ。確かに危険を犯してここに来たんだが、命を捨てるつもりなど全くない。しかし、背に腹は変えられずに涙を流しながらポケットから

動力の石を取り出した。

「そうやって初めから素直に渡していればよかったんだ。」

男はにやけながら僕から石を奪い取ると、それを持ってタイムマシンに素早く乗り込んだ。扉を閉める時ににやけながら光線銃の引き金を引く。

「うわっ！」

それは余りにもあっさりした行動だった。僕自身は石を渡した事ですっかり油断していた。光線銃から伸びた一本の光は、僕の肩を掠めて地面に突き刺さる。その痛みは次の瞬間に一瞬にして僕の肩に押し掛かった。

「ぐあー！」

肩を押えて倒れこむ僕を勝ち誇った目で見下ろしながら、男の姿は扉の影に消えていった。そして暫くするとマシンのエンジン音が鳴り始める。

「大丈夫か！」

ようやく屋上の出入口の扉が開いて、数人が到着した。肩に包帯を巻いた孝は僕の姿を確認すると駆け寄ってくる。

「血が出てるじゃないか。」

「見れば分るよ。」

「どうなった？」

時間警察の男は、空中に浮かんでいるタイムマシンを見ながら、状況の確認を行う。

「見たら分るでしょ。。。くそ、ここまでの苦労が。。。」

僕は目一杯悔しい気持ち露にして言葉にした。

「逃げられたか。行き先は君の時代かね。」

「そうですよ。チューニングが間違ってたければの話ですけど。」

「そうか。」

時間警察の男は、諦めた様に肩の力を抜いた。その瞬間に空中に浮かんでいた僕のタイムマシンが眩い光を放ったと思うと、突然空中で四散して姿を消した。

その場にいた全員が目を閉じるか腕で顔を覆う。唯一サングラスをつけていた時間警察の男だけが顔を一切動かさずに消える瞬間をじっと見ていた。

「消えたか…。」

悔しげな声だけが、僕の耳に入ってきた。

光が収まると、時間警察の男は無言のままその場を去った。数人いた部下達もその後についていく。その背中を見送った後に、孝と僕だけがその場に取り残された。

「立てるか？」

「う、うん。」

僕は孝の肩を借りて身を起こす。彼は僕に何か言いたげだったが、目をあわせただけで何も言わなかった。

「あ！、死神は？」

僕は、そう呟くと辺りを見回す。

「まだ見えるのか？」

孝の質問に僕は首を横に振った。

数日後の公園のベンチ。

僕の肩も孝の肩も傷は半分癒えてきて回復に向かっていた。孝と2人でベンチに座ってボーっとしていると、彼は鞆から科学雑誌を取り出して広げていた。

「まだ、そんなの読んではるのか？」

僕は、彼の方を振り向きもせず呆れ顔で問いかける。

「あいつの話だと、僕が将来タイムマシンを作るみたいだからな。勉強しておこうかと思っただけ。」

「そんなもの作ったってロクな事にならないぞ。」

「そうか？、僕は使い方次第だと思うけどな。」

「いいか、道具ってのは便利なほど悪用がきくもんなんだ。それが

凄ければ凄い程な。だからどんなに便利でも存在しない方がいいものもあるんだ。お前は勉強なんてしなくていいよ。」

「そうかな。でも、お前の乗ってきたタイムマシンとあいつの乗ってきたタイムマシンって同じなのかな。」

「同じなわけないだろ。大体…。あ…。」

「どうした？」

僕の頭の中に一つの仮説が組み立てられる。あくまで仮説だが…。「いいかい。最初に僕がここに来た。」

「ん、突然、どうした？」

孝は雑誌から目を離して僕の方を向く。

「いいから聞け。その後で、あいつが未来からお前の作ったタイムマシンに乗ってきた。」

「そうだな。確か君は、未来じゃなくて、過去からきたんだよな。」

「そうだ。僕のいた文明は、何かが原因で一度滅びて、人間はまた一から文明を作った。そして、君がようやくタイムマシンを作るところまでいったんだ。」

「それが何か？」

「つまりそうだよ。君がタイムマシンを作らなければ、僕は無事に過去に戻れたんじゃないか？」

「え？」

ポカンとする孝の膝から科学雑誌を奪い取る。

「だから君はやっぱり勉強なんかしないでいいんだよ。この世界のタイムマシンが無ければ、奴がこの時代に来ることもなかったんだから。」

「な、いいがかりだ！」

孝はベンチを立って僕が取り上げた雑誌を返してもらおうと手を伸ばす。

「あははは。」

孝は突然腹を抱えて笑い出した。帰れなかった僕に向けられた嘲笑かと思ひ、僕はあからさまに不機嫌な態度で彼に顔を近づけた。

「何がおかしいんだよ。」

「おっと、これ見てみるよ。」

孝は僕の持つている雑誌のページの一部を指差す。僕の目線が彼の指先に向けられた。

「ぶっ！」

僕の機嫌があつという間に直つていく。なるほど、これは笑える。その雑誌のページの特集には、『謎！、カンブリア紀の地層から三葉虫を踏んでいる人間の足跡！』とある。

「あははは！」

孝を批判しておきながら、僕はもう一段大きな声で笑った。その写真に乗っていた足跡のすぐ横には、足跡の主が僕から盗んだ水晶の石があつたからだ。記事の内容の中では、その石にも触れてある。『自然に出来た形とは考えづらく、足跡とともにこちらにも謎である』的な表現で。

「こいつ、戻つてこれたのかな。」

涙目を拭きながら孝が僕に尋ねた。

「いや、絶対無理だよ。片道分しかない燃料だからね。」

「でも、それじゃ君が乗っていたら……。」

「この足跡は僕のものになつていたかもなあ。しかし、違う時代に置き去りにされる気持ちは少し分るかもね。」

僕は自分の発言にゾツとしながら、それでも可笑しくて仕方ない感じにやけて返答する。

「どうする？、これも僕のおかげだろ？」

「せいぜい勉強頑張ってくれよ……。」

僕は苦笑しながら科学雑誌を孝に返した。

「帰るのを諦めるのかい？」

「いや、また一からやり直しだけど、諦めないよ。」

「また死神が現れたらどうするんだい。」

そういえば、あの日から死神を一度も見えていない。あれは、僕じゃなくて、僕のタイムマシンを盗んだ奴に取付いていたのだろうか。

死神がいるところには必ず奴がいたような気がする。

「その時は、諦めるぞ。」

「そう悲観するなよ。」

孝はそう言っただけで笑いを堪えた表情をみると、懐から見慣れた石を取り出した。

「え？」

「へへへ。」

「じゃ、まさか……。」

「タイムマシンは僕一人じゃ荷が重過ぎるからな。手伝ってもらわないと……。」

「わはははは！」

僕は笑いながら空を見上げて背伸びをする。雲ひとつない空が、広がっていて、この空だけはいつの時代も同じなんだなあと思った。

邪魔

「はあ。」

僕は溜息をついて屋上へ続く扉を開けた。快晴の青い空と適度な温度、そして照りつける太陽。通常ならばここで思い切り大の字になって昼寝でもすれば最高なのだろう。

しかし、残念ながら今日の僕の気分では、そのような要素は無い。逆に暗く沈んだ気持ちにますます拍車が掛かっていつている音が心に響くような気がしていた。

周りを見回すと誰もいない。まあ、当然だ。平日のこの時間は普通のサラリーマンであれば、午後の眠気も通り過ぎ、夕方に向けて仕事に拍車が掛かっている事だろう。仕事があるという事のありがたみも分らない連中が愚痴を並べて会社の歯車をまわしているのだ。今から死ぬ僕には関係ないか…。

「はあ。」

もう一度大きく溜息をつく、鞆の中から一枚の紙切れを出す。

「予想はついていたけど…。」

紙切れには「不採用」の文字が、綺麗に印刷されている。

大きな字ではつきりと嫌味のようにプリントされた一言一句をもう一度「間違いではないか」とか、今日から言葉の意味が変わって「採用」という意味になったのではと考えたりしながら眺める。

「やっぱりそんなもんだよな。」

今夜真夜中を過ぎれば僕は三十歳になる。本当に素敵な誕生日だ。よく考えれば色々あったが、三十年といえは長生きした方だよなあと、無理矢理自分に納得させつつ紙切れを細切れに手で引き千切って空に投げる。

屋上の風がそれをまるで花びらの様に空に持って行ってしまった。今日はそこそこ風が強い。

「やっつと…。」

とりあえず、出入口に鍵をかける。屋上に閉じ込められない様にとの配慮か、この出入口は外からも中からも両方から鍵をかける事ができるを僕は知っていた。その鍵を管理人室から拝借したのは犯罪かもしれないが、これから死ぬので法律もあまり関係ない。

柵の近くまで行き腰を降ろす。

鞆から取り出した最後の2つのお握りを開けて頬張った。何の運命か、この2つを買った時点で、僕の残高はぴったりと0円になった。

「うまい。」

百円セールで買ったお握りが、今まで食べたどの料理よりも美味しく感じたのは気のせいではなかったと思いたい。

あつという間にそれを平らげると、とりあえず僕は大的字になって、雲ひとつない空を眺めた。季節柄少し肌寒い気もしたが、まあ、これから死ぬ僕には風邪を引く心配はないだろう。

走馬灯とはよく言ったもので、今までの苦労が確かに脳裏に少しずつ映ってくるようだ。しかし、目を閉じても大した映像など浮かばない。そんな事よりも今は、頭を空っぽにしてこの瞬間を楽しむ方が恐らく有意義な事だろうと、僕は目を開いて再び空を見た。

「あーあ、人生こんなもんかあ。」

誰に聞かせるでもない一人毎を呟く。何故僕がこんな目に会うのだろうと、今朝までずっと考えていたが、死を決心した途端にふつと体が軽くなつた様な気がした。普段からこんな気分で生きていれば、ここまで追い詰められる事はなかったのかもしれない。まあ、既に手遅れなのだが…。

「さてと…。」

起き上がって背伸びをする。いつ飛び降りてもいいのだが、とりあえず背伸びをする。

「ん？」

僕は不意に人の気配を感じて後ろを振り向いた。

「誰だ？」

さつきまで確かに人の気配はなかった筈なのに、今は出入口の建物の影に誰かがいる。

鍵をかけた筈だから、誰もここには入ってこれないはずなのに。いる可能性があるとするれば管理人が鍵を盗まれた事に気づいてスペアのキーを使って入ってきた事くらいだが、出入口が開いた様子はない。という事は、その影は僕が屋上に来た時からそこにいたという事になる。

のそりと姿をあらわしたそいつは、上から下まで真っ黒な服を身に纏った男だった。

「誰？」

このビルに僕の知っている人物はいないので、誰が出てきてもそう言っただろうが、とりあえず同じ台詞を繰返す。

「誰…？」

その男は深く被った帽子と襟の隙間から見える鋭い眼光をこちらに向けながら僕の質問には一切答える気配はない。

「…。」

ただただ沈黙が流れる。そいつはどういう腹積もりかは知らないが、僕にとっては迷惑この上ない。ただ、誰かも分らないし、ここは別にプライベートな場所ではないので「出て行け」というのも間違っている事は分っていた。

「えーと…。このビルの関係者の方ですか？」

事を荒立てない様に最大限に気を使って聞いてみる。

「違う。」

ぼそりとそいつは呟く様に答えた。関係者ではないという事は鍵を持っていないので、僕が鍵をかける前からここにいた事になる。

ここはそれ程広い場所ではない。障害物といえる程の建物や置物もないビルの屋上である。この男がここにいたのであれば、上がったときた時点で周りを見渡せば見えた筈なのだが…。

見落とすという事は考えにくい、事実いるのだから仕方ない。

「えーと…。」

資金的余裕や誕生日という事でなければ、後日仕切りなおしという事でこの場を去るといふ選択肢もあったのかも知れないが、何分僕にはそういう余裕もない。困って次の言葉が出てこなくなった。「すみませんが、どうしてここに？」

ほんのわずかな可能性だが、僕と同じ目的でここに来たのだろうか。確かに暗い影が落ちている人物の様にも見える。

「…。」

男が何も答えない事で事態は再び行き詰まりを見せる。

「えーと、僕、今から飛び降りるので、すみませんが邪魔しないでもらえますか？」

仕方が無いので、思い切って本当の事を言ってみた。言葉にする以外に淡白なものだと思った。

「…。」

別に何かに期待していたわけではないが、人が死ぬと言っているのに男の反応は更に淡白なものだった。何を考えいているのかさっぱり分らないが、とりあえず騒いだり警察を呼んだりする様子が一切無いのでとりあえずは放っておこう。

「じゃ、そういう事で。」

僕は軽く手を上げて、男から離れ柵に向かって歩き出した。いよいよかと少し気合が入る。この気合も今更入ってもという感があるのも否めないのだが…。

「何してるんですか！？」

突然背後から、さっきの男の声とは明らかに異なる声がする。心臓を撃ち抜かれた様にギクリとして、僕は振り向いた。

「え？？」

そこには管理人と警察官と数人の人が出口から出てきてこちらを見ていた。

「君、ここで何をしているのかね。」

先頭にいた制服姿の警官が低い声で質問しながら僕に近づいてくる。ゆっくりとした足取りは、警戒している証拠だろう。

「……」

先程の黒ずくめの男の真似ではないが、僕は何も答えずに柵の方へと少しずつ擦り寄っていく。

「君、そっちは危ない。こちらへ来なさい。」

手を差し伸べながら警官はジリジリとこちらへ歩み寄る。

何でここが分ったのだろう。管理人が鍵がなくなっているのに気づいて警官を呼んだのだろうか。それとも、一連の行動を誰かに見られたのだろうか。

「な、何でここが分ったんだ？」

僕がそう言っていると、警官は、ふと出口付近にいる数人のギャラリーの方を向いた。数人のギャラリーの中から、若い女性が歩み出て来る。

「わ、私が見たんです。」

「き、君は誰だ？」

はつきり言って初めて見る顔だ。会った覚えはない。

「仕事中にふと窓の外を見ると、このビルの屋上から紙切れが飛び交っているのが見えて、それでよく見ると人がいたので。」

「ほっといてくれれば良かったのに……。」

僕の呟きも虚しく警官が再びこちらを向いて、進み寄ってくる。

「さあ、こちらへ来なさい。」

「嫌だ！近づくな！」

僕は一気に柵まで駆け寄ると、それを飛び越えてビルの屋上の端に足をかけた。

柵から手を離して足を踏み出せば、人生の終わりである。

「な、馬鹿な事はやめなさい！」

口では怒声を発してはいたが、警官は立ち止まってこちらには近づいてこようとはしなかった。

「きゃあ！」

「何だ！」

足元から、また違う声が聞こえてくる。下を通る通行人が僕に気づいて騒ぎ始めたようだ。

「飛び降りだぞ！」

あつという間に足元が賑やかになり、先程までの緊張感が台無しになった。一人でひっそりと死のうとしていたのだが、とんだお祭り騒ぎになってしまった。

「くそつ。」

舌打ちしつつ再び視線を上げて警官の方を見る。彼は僕の目を見て何か言いたげにしていた。まだ若い警官だから経験不足でこういう時にかかる言葉が見つからないのだろう。

「こんな馬鹿な事やって、親が泣くぞ。」

後ろにいた管理人の初老のおじさんが、一歩前に出てきて口を開いた。

「そ、そうだ。ご家族に心配をかけるなんて恥ずかしいと思わないのか。」

若い警官がそのおじさんの意見に便乗して台詞を追加した。

「はあ。」

僕は深く溜息をついて警官の方を向く。

「ご心配なく。僕は、親も死にましたし、兄弟もいないし、親戚なんかもいませんので。」

はつきりを言っただけのけつと。目の前の人達は皆口をつぐんで動揺の色をみせた。一番後ろで今だに僕をじっと見ている黒ずくめの男だけは、無表情のままじつとこちらを見ていただけだったが。

群集や警官は次の言葉を捜しているように目が泳いでいる。自分達は完全ではないだろうが、そこそこ満足した時間を送っているのだろう。だからこういつ時の言葉など引き出しに入っている筈がない事は明白だった。

「ふん。」

鼻息を一つ鳴らして僕ははいよいよ柵に手を掛けた。よくよく考えれば、お祭り騒ぎになるうが何だろうが、僕のやるうとしている事に変わりはないと考えると人目を気にしている事自体が馬鹿馬鹿しく思えてきた。

「ま、待て！」

若い警官の声が背中から聞こえる。僕は少し鬱陶しそうに柵に手を掛けたまま警官を振り向く。

「何だよ。まだ何か？」

そんな僕の態度が予想外だったのか、明らかに動揺した顔つきをしている。目の前で自殺されるのが、そんなに嫌なものなのだろうか？、まあ、逆の立場になったことが無いので今の僕には何も言えないのだが…。

時間の無駄を感じた僕が再び手摺の方に向くと、またしても背後から声が聞こえてきた。

「君を必要としている人はきつといる。」

誰がそんな歯の浮くような戯言を言ったのか分からないが、僕は首だけ振り向いて一言言い放つ。

「居たら連れてきてみるよ。馬鹿野郎！」

こつこつ場合は多分僕の反応の方が正常な気がする。屋上に集まった野次馬の一塊を一瞥してから手摺を飛び越える。はつきり言っている僕は高い場所が得意ではないので、そこから真下に見える風景はあまり気持ちの良いものではなかった。

「ま、待て！」

もう飽き飽きした呼び止める声を無視して深呼吸をする。高い場所の空気は澄んでいるとか言うが、都会の汚れた空気が肺に染み込むだけだった。

「げほつ。」

少し蒸せた後、再び下を見る。

「ち、ちよつと待ってくれ。」

まったく、飛び降りるのは僕なんだから何かを待つ必要などない

のだが、またしても僕はつい後ろを振り返ってしまっ

「り、理由を聞かせてくれ。」

自分の命が取られる訳でもないのに慌てた様子で、警官が妙な質問をしてくる。人に説明する余裕があれば、こんな事にはならないという事が理解できないらしい。おそらく本当は、どうでも良い事なのだが、一応立場上もあるし、人目もあるから仕方なく体裁を取り繕っているのだろう。

「理由はありませんが。」

細かく言えば色々あるのだが、はっきり言って面倒なので話を打ち切る様に冷たく言い放った。

「……………」

僕の台詞に黙り込んだ若い警官はあからさまに目が泳いでいた。自分の力で解決出来ないと悟ったのか、後ろにいた群衆を振り向いた。

「……………」

しかし背後の群衆も殆ど全員が警官と同じ目をしていた。

そんな風景を見ていて、あまりの滑稽さに少し吹き出しそうになる。そんな気分の僕の方に再び警官が顔を向けた。

「し…仕事か？、仕事が上手くいかないからなのか？」

僕が何も言わないので、とうとう自分から色々と選択肢を提示する形式に切り替えたらしい。

「上手くも何も仕事自体がないんだけど。」

「じ、じゃあ本官と一緒に捜してやる。それなら思い止まってくれ

るだろう？」

警官は歪な微笑を浮かべながら僕に手を差し伸べた。僕はその掌を少しの間じっと見つめながら放心状態で目を点にしていた。

「ど、どうしたんだ？、早くこちらへ来てくれ。そこは危ないから。」

まだ手摺を飛び越えたわけでもないのに別段危なくもないのだけ

ど。いや、それ以前に世間知らずで空気も読めない馬鹿さに呆れ返

っているのが、分からないのだろうか。

「結構！」

僕は一言残してヒョイと手摺を飛び越えた。

「な、ち、ちよつと！」

僕は後ろは振り向かなかつたが、情けない声を聞くと、とんな顔をしているのか大体分かった。

手摺の外側の僅かな地面に着地すると、ちよつとだけ首を伸ばして下を見る。

割と強い意志でここに来たはずだったが、それすら揺らいでしましそうな程に、下から見上げている人達が米粒に見える。

「ち、ちよつと待ちなさい！」

足に少し力を入れて飛び出そうとした瞬間、さっきと違う声が僕を呼び止めた。

ここで一気に飛び出さなかったのは、この高さから下を見たのが初めてだったから。と、心の中で一人言い訳しつつ面倒くさそうに振り向くと、制服を着たOLが一步前に進み出ている。

「何ですか？」

持ちうる限りのぶつきらぼうさを發揮して返事する。彼女は少したじろいだ様子だったが、その場から更に一步前に進み出て話しました。

「あなた彼女とかいるの？」

「は？」

突然何を言い出すのかと思えば……。

「いませんが？」

「今までいたことは？」

何言ってるんだ、この女は？、周りには微妙な空気が流れているのが、僕にも分つたが、そいつは空気関係なしに話を進めた。

「質問に答えてよ。」

「えーと……。」

まあ無視するのが一番いいとは思ったが、押しの強い人が苦手な
つつい話に乗ってしまふ。

「いたことはないよ。もう、いいだろ？」

どういつつもりか知らないが、邪魔くさいことこの上ない。

「なら、やめた方がいいわよ。そんな幸せを知らないまま死ぬなん
て考えられないわ。ねえ！」

彼女は自分の言う事に説得力を持たせたかったのか、背後を振り
向く。そしてその中から一人のスーツ姿のサラリーマン風の男が進
み出てきた。

「か、彼女の言う通りだ。君は人生を大損しているぞ。」

そういう男の腕に彼女がしがみ付いて言葉を続ける。何だこいつ
ら……こつちが気持ち悪くなってきた。

「馬鹿馬鹿しい。」

「馬鹿馬鹿しいだって、君も頑張れば幸せになれるんだぞ。」

男の言葉に彼女の方が軽く頷く。まったく、興ざめにも程がある。
これならさっきの若い警官の話の方がまだマシだった。

世の中、自分達が幸せなら他の人も幸せになるべきだなどとはざ
く馬鹿が多すぎる。大体「幸せ」の定義自体人それぞれだという大
前提を見失った奴等の言う事にいちいち耳を傾ける必要はない。

僕はかける言葉もなく、2人を無視して再びビルの下を覗き込ん
だ。

「ち、ちよつと、何無視してんのよ。」

本当なら殴っておきたい所だが、まあそんな事に時間をかける必
要もないだろう。

そんな無駄な時間を過しているうちに少し風が出てきたようだ。
気のせいだろうが、今立っているビル全体が風で揺れている様な錯
覚がして、僕の恐怖心を煽る。

「くそ……。」

最初にあっさりと飛んでおくべきだったと少し後悔したが、まあ基本的な自分の決心が歪んだわけではない。そう思いながらも足に力を入れて思い切り飛び出そうと膝を曲げた。

「！」

飛び出そうと力を入れた瞬間、信じられない程の風が正面から拭いて僕の体を屋上の柵に押し付けた。

「嘘……。いててて。」

柵に後頭部を打ち付けた僕は頭を摩りながらゆっくりと立ち上がる。そして不意に柵から伸びてきた手に腕をつかまれた。

「何だ！」

首を捻って振り返ると若い警官が必死の形相で、鼻息も荒く僕の腕を掴んでいる。

「全く、手間を掛けさせやがって！」

さっきまでとはまるで違った態度で僕の腕を掴む力を更に強化させた。

「くそつ。話せ。」

ふらつく頭を押える手で警官の腕を掴むと必死ではがそうとしたが、明らかに向こうの腕力が僕の力に勝っているので、彼の腕は微動をだにしなかった。

「来い！」

警官はその腕力で僕の体を柵に貼り付ける様に引っ張る。ガシヤンという乾いた音とともに僕の体が柵に叩きつけられた。ここまでくれば、僕の完全な敗北である。野次馬の中からも何人かの男が駆け寄ってきて警官とともに僕の体を柵に固定した。全く身動きが取れない。

「くっそー！」

絶叫とともに体に思い切り力を入れるが、それも虚しい抵抗だった。全く身動きの取れないままずりずりと柵の内側に体を持っていかれる。昔の武士あたりなら懐から出した短刀で自分の首を斬るといような事をしたのだろうが、生憎僕はそんな物騒なものを持って

ないし、持っていたとしても氣勢を削がれた今の状況では、それを実行する勇気も無かっただろう。

死ぬことすらできないのか……。心の中で半ば諦めつつ体は引き戻されない様に抵抗を続けたが、ものの数分であっさり僕が屋上の柵の内側の安全な場所へと引き戻された。

「全く、手間を掛けさせやがって。」

警官を含め、僕を引き戻した人々の安堵の声が聞こえる。何ともいえない複雑な心境の中、僕も諦めて体の力を抜いた。

何気にふと野次馬の群れの方を見ると、黒ずくめの男が群れの後方から僕の方をジッと見ている。僕を助ける男達には混ざって無かったようだ。

「あー、やれやれ。」

「人騒がせな奴だったな。」

口々に好き勝手な事を言いつつ、まるで三流映画を見終わった後の映画館の様に野次馬達は屋上を引き潮の様に後にする。しかし、黒ずくめの男だけは、その場から全く動こうとしなかった。

「……」

僕は若い警官に脇を抱えられて立ち上がる。既に抵抗する気すらなかったのだ、まるで人形のようにスムーズに上がった。

「……」

その間も僕はジッと黒ずくめの男の表情を見ていたが、彼の感情はピクリとも動いていない様だった。

「ほら、歩け！」

まるで犯罪者を扱う様に警官が背中を掌で叩く。手錠こそされていなかったが、抵抗する気はさらさらなく。僕はその場で頂垂れてゆっくりと歩き始めた。

僕が出口へ向かう、その瞬間だった。またしても一陣の風が肌を

叩き、ビル全体が揺れている様な感覚が体を襲う。この風さえ吹かなければ今頃楽になれた筈なのにと、恨めしく思っていたその矢先……。

「ん？、何だ？」

「お、おい、これは……。」

出口付近に固まっていた人々の口から次々と言葉が漏れてくる。

「ゆ、揺れてるぞ……！」

それは次第にはつきりと大きくなうねりになっていく。そして、はつきりとした揺れになるまでは、そう時間は掛からなかった。

「ふ、伏せる！」

言われるまでも無く既に、僕も、僕を押さえつけていた警官も立っていられない程揺れている。

「ぐ……。」

いつまで続くのか分らない揺れ。それは、ビル全体を左右に揺さぶり、その場に居た全員を恐怖に陥れる。

「お、おい、このビル、大丈夫なのか？」

誰が言ったのかは分らないが、誰もが考えていた事が耳に入ってくる。

このビルに入ってきた時から余り頑丈そうには見えないビルだったので、確かにそれは心配だ。ん？、心配？

「あ……！」

僕の中に閃光の様なもの走り、僕は直ぐに立ち上がった。先程まで僕を押えていた警官の手は既に、彼自身が自分の身を安定させる為に地面に着かれる事に使われて僕の体を離れていた。

「何処へ行く！」

背中から若い警官の声が聞こえる。僕はそれに心の中で答えた。勿論、当初の目的を果たす為に決まっているだろうが。

揺れる地面の中、何とかバランスを保ちながら僕は屋上の柵に向かって全速力で駆けた。運動神経のいい方ではないが、この時ばかりはとんでもないポテンシャルを出していたと自分でも思う。

それ程広い場所でも無かったので、あともう少しで柵に手が届く所までは難なく辿り着いた。僕は手を伸ばして、まるで、長い間閉じ込められた洞穴から命カラガラ這い出すかの様に必死で柵に向かう。しかし、やろうとしている事は全く逆の事なのだが。

「よし！」

目的達成を目の前にして思わず声を出した。しかし、それがいけなかったのだろうか、僕の手は柵を掴む事は無かった。

先程まで力強く蹴り続けていた地面が突然無くなる。

当然、超能力者でも鳥でもない僕は重力に逆らう事が出来ずに落下感覚を味わった。周りを見る余裕も無く、何が起こったのかも分からない。

次の瞬間、体全体に今まで味わった事の無い強い衝撃が走った。

「ぐっ！」

激痛だったが、何とか気絶せずに歯を食いしばる。視界が揺れているのは、まだ、全体の揺れが収まっていないことを示していた。

「何が起こったんだ。」

揺れている為に立ち上がる事が出来ずに辺りを見回す。光が盛れている頭上を見ると、どうやら屋上の床にぽっかりと穴が開いてそこから落ちたらしい。僕は神様などは信じたことはないが、もしいるとしたら、どうやら意地でも死なせてくれないらしい。

「くそ。」

建物全体の揺れが収まっていないので、今すぐに移動する事が難しいと悟った僕は、どうしようもなく、ジツとしているしかなかった。

僕が落ちた部屋は殺風景な会議室のような場所だ。周りには家具も事務用品もない。窓の外では隣のビルの窓がクッキリと見える。灯りはついていなかったが、昼間なので、カーテンの無い広い窓から入る日光で割と明るさを保っていた。

「いてて。」

座ったまま窓際に移動しようとして足をくじいている事に気づく。

しかし、とりあえず痛む足を引きずって窓際に寄っていく。目的地である真ん中辺りの窓を一点に見つめてまっすぐ最短距離でそこに向かう。

「ん？」

不意に視界の端に人影が映る。あの黒ずくめの男だった。

「あんたか……」

多分そいつも僕と同じ様に落ちてきたのだろう。しかし、この揺れの中、そいつもは全くバランスを崩す事なく真っ直ぐに立っている事が妙に不自然だった。

「……」

当たり前だが、僕もそいつも別段話す事もないので僕は無視して窓に向かったの移動の続きを開始した。

相変わらずグラグラと揺れている中で何とか窓に辿り着くと鍵を開けて窓を開く。上空の突風がいきなり顔を叩いた。その風に乗ってビル周辺の人々の騒ぐ声が耳に入ってくる。下を除くと、さっきまで人の自殺を面白そうに見物していた野次馬達が、まるで宇宙人が襲来してきたかと思う程、逃げ惑っていた。

「ふう。」

とりあえず窓の縁に腰をかけて一息ついた。ふと顔を上げると、黒ずくめの男が僕の方をじっと見つめている。

「あんたは、他の連中と違って、僕の邪魔しないな。」

「……」

話しかけたが返事が無い。顔全体は見えないが、恐らく能面の様に無表情なのだろう。

「まあ、いいや、さてと、ここなら邪魔も入らない。」

このまま、半分外に出ている体を外側に傾ければ、最初の目的通り、自分の人生の終わりを演出できるはずだ。

「じゃあな。」

僕は無愛想な黒ずくめの男に軽く手を上げて体を傾けた。

が、やはり、神様は俺の事が嫌いらしい。ビルの真下から吹き上

げてくる風に押し戻されてバランスを崩したかと思うと、さっきまでの揺れとはまた違う大きな揺れが体を襲う。

「うわっ。」

結構強めに床に叩きつけられると、ビルが先程よりも強い力で下に揺れている。

「くそっ！」

舌打ちしつつも反射的にその場に蹲った。いつそのまま天井が落ちてきて潰してくれないだろうかと思いつつながら。

今度の揺れは先程より大きく長かった。僕は目を瞑ってジツとしていたから何が起こっているのかは分らなかった。ただ一つ分った事は、死のうとしていても、こういう場合はちゃんと恐怖というものを人間は感じるものなのだという事くらいである。

どのくらいの時間じっとしていたのだろう。というか、僕はいつ気絶したのだろう……。気絶する前の記憶はかなりハッキリしている。目を開くと真っ先に快晴の空が目に入ってくる。

「い、いてて……。」

気絶する前とは明らかに痛む場所が増えている。体を起こそうとしても、あちこちが軋む様な感じがして上手く起き上がれない。

「おい、まだ生きているぞ！」

聞いた事の無い声が聞こえてくる。生きている？、そうか、僕はまだ生きているのか……。そんな事を考えながら、何とか身を起こして頭を振った。

「おい、大丈夫か？」

駆け寄ってきた、見知らぬ誰かは僕の肩に手を置いて問いかける。

「は、はあ……。」

まだ頭がぼーっとしている僕は、気の無い返事と共に周り見回す。

「え？」

周りは一面瓦礫だった。

「な、何が起こったんですか？」

僕は首を振りながら、僕の肩に手を置いているヘルメットを被った男に問いかけた。

「局地的な地震だよ。この辺りのビルはすっかり崩れてしまった。

我々も先程到着したばかりだが、今の所は君の他は生きてる人が一人も発見できてない。」

「嘘……。」

僕は暫く彼の言葉を右から左へ受け流したまま、周りを見回しているだけだった。

「大丈夫か？」

僕の放心状態を見かねたのか、再び肩を強めに叩かれ我に帰る。

「立てるか？」

僕は自分の体を見回して確認した。細かい傷は沢山あるが、どうやら立って歩くことくらいは問題なさそうだった。

「多分、大丈夫です。」

そういうと、痛む足を何とか踏ん張って立ち上がる。遥か向こうに何とか崩れずに残っているビルらしき建物が見える。三百六十度周りをぐるりと見渡すと、丁度自分が立っていた位置を中心にほぼ円形に瓦礫が広がっている。

「あ、あの……。」

目を点にして周りを見回している僕を見ていた男に恐る恐る問いかける。

「何だ？」

「他の人達は？」

「他？、誰かと一緒に居たのか？」

「え、ええ、まあ……。」

「おーい！」

会話の途中で突然、少し離れた場所から呼びかける声。

「ちよつと、失礼。」

僕との会話を打ち切って、男は声のする方へと瓦礫を掻き分けて走って行く。僕は何となくその背中をじっと見ているだけだった。何か騒いでいるようだったが、僕の興味を引くようなものではない。不意に背筋に冷や水を掛けられた様な感覚が体を走る。

「！」

後ろを向くとあの黒ずくめの男が立っている。

「あんたも生き残ったのか。お互い運がいいものだな……。」

僕なりにねぎらったつもりだったが、男は表情一つ変えずに黙ってこつちを見ているだけだ。そんな男の態度にももう慣れたのか全く気にならなくなった。

「それにしても、一番死にたかった僕が生き残るなんて皮肉なものだな。」

「……。」

黒ずくめの男はくるりと背中を向けると僕から離れていく。

「誰かと話していたのか？」

不意に肩を叩かれて振り向くと、さっきのヘルメットの男だった。僕は、再び立ち去っていく黒い背中に視線を向ける。

「誰か居るのか？」

ヘルメットの男が僕と同じ方向を向いたが、不思議そうな表情で僕の顔と黒い背中を交互に見ているだけだった。

「いや、別に……。」

僕はいつからか、黒ずくめの男が普通の人間ではない事に気づいていたのかもしれない。ヘルメットの男の態度も何となく不自然には感じなかった。

僕はヘルメットの男に背中を向けて、痛む足を引きずって歩き出した。

「あ、何処へ？」

「……。」

僕はその問いに何も答えなかった。ただ、黒ずくめの男の行った方と逆の方向へとゆっくり歩き出しただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4182w/>

死神の杖

2012年1月4日10時49分発行